

老子講義

大野太衛著



008328-000-8

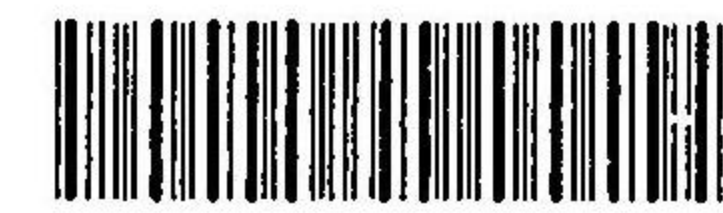
75-95

老子講義

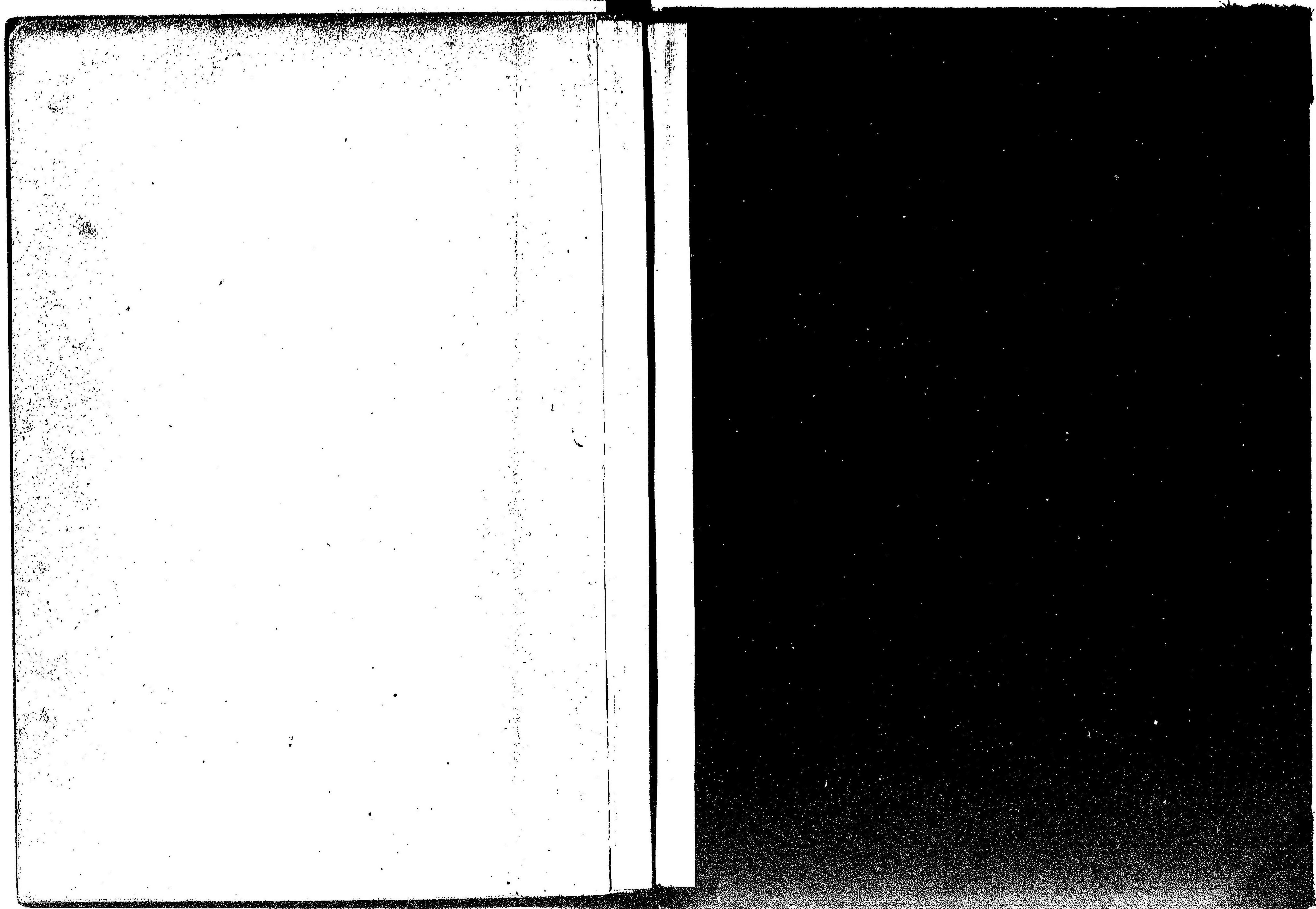
大野 雲潭 / 著

M3 1

AAC-0276









老子講義自叙

士鮮於俗學久矣。予閱焉而講此書。自信不必冬筴夏裘也。夫以湯止湯。沸乃不止。去火則止。人之惑於俗學。其火何居。為外物動心是也。昔者仇由貪大鐘之賂。而亡其國。虞君利垂棘之璧。而擒其身。獻公斃驪姬之美。而亂四世。桓公甘易牙之和。而不以時葬。胡王淫女樂之娛。而亡上地。是皆為外物動心者。非耶。今之人或視歐米皮膚外貌之開明。淫焉甘焉。斃焉利焉。貪焉成此陋俗。皆俗學之弊。而告朔之餼羊。尚存教化之餘喘。未泯可不及今救之哉。主唱俗學者曰。道德者。生入々相接之間而已。離群獨處。無復道德。海客遇風。到無人島。盜物無其主。欺人無其人。將焉用道德。噫。何其言之悖慢乖謬。無所忌憚也。夫人之離羣獨處也。閉思雜慮。邪意淫慾。勃然紛然。日夕鬪于心胸之間。一旦發露。變為衆惡。是所謂小人間居為不善。無所不至者矣。若夫無一點惡念。光風霽月。樂於已而無所憾。是所謂慥慥爾君子矣。故曰。君子必慎其獨。抑道也者。塞于天地。彌于四海。約而能張。幽而能明。弱而能強。柔而能剛。淖澠纖微。無物不存。無時不在。故君子之心。以天地為廬。心中自有天地。而無人島亦不外于天地。乃謂無人島無道德。蓋盲道德之高原者。想彼唱俗學者。其人多慾。悻悻陷於一偏。其為外物動心亦宜也。其心苟為外物所役。因以立說。莫非行險徼幸。其言雖如智其實愚。衆愚遵奉。恣其慾流。害于天下也大矣。老子之說道。義雖與我所謂道德異。望慾破俗學之效。或有勝儒學者焉。蓋老子之立教。淡泊無為。尚柔凝神。蹈虛守靜。先道而後德。先德而後仁。先仁而後義。先義而後禮。





讓先禮讓而後法律與俗學正相反。是以人善讀老子則知清慮之智而悟慈念之愚矣。人君善讀之可以戒荒縱制奢侈。可以去讒遠邪。可以從諫如流。大臣善讀之可以斷定大事。小吏善讀之可以廉潔守職。富人善讀之可以博愛利人。貧人善讀之可以安分知足。武夫善讀之可以見危授命。文人善讀之可以從容自得。學士善讀之可以韜光樂道。傑士善讀之可以濟世治民。婦人善讀之可以貞節戒妬。學生善讀之可以勉學不息。商估善讀之可以見幾量利。農夫善讀之可以崇儉務業。工人善讀之可以拮据無倦。黨人善讀之可以禁暴進心。病客善讀之可以治性安神。新聞紙記者善讀之可以擬董狐筆。辯護士善讀之可以廢健訟風。罪人善讀之可以反己改過。凡居逆境者善讀之可以轉禍爲福。凡居順境者善讀之可以謙虛守成。此我講義之所以不可已也。

明治三十一年十月

雲潭 大野 太衛 撰

重野成齋評。把慎獨工夫。以破無人無善無德之說。爲俗學下頂針。末段少失於敷衍。然講義論流俗者。不必要雅簡。○三島中洲評。老子之學。虛無自然。以行仁義於天下者。世人或以爲山林樵善之學。蓋不善讀老子者矣。吾兄評之。欲以濟一世陋俗。可謂善讀老子者矣。

The lecture on Lao Tze's "Tao Teh Ching" has been carried out by Mr. Ono rei known chinese scholar to explain the principles and discuss the knowledge of the moral philosophy of this great chinese philosopher and combat a prevailing moral idea borrowed from European countries. Such lecture may be a great favour to the young students who now-a-days devote themselves much to the study of European languages but a little to Chinese.

### 老子講義

#### 緒論

大野雲潭講述

予嘗て老莊の講義を完了したりしが、近來復た郵書を以て、更に余に老莊の講義を請求するもの幾百人なるを知らず、因て先づ老子より着手し、然る後莊子に及ぼし、以て請求者の求めに應じ、且つ余が家塾新入者の讀本に供せんとす、今回の講義は簡明を主として、其神髓を穿ち、冗言を省きて、以て速に講了せんと欲す、蓋し朱子學を學ぶには、必ず老莊を講究せざる可らず、現に宋學の泰斗たる張橫渠は老子より入るに非ずや、朱文公は莊子に註釋を下し、に非ずや、則ち朱子學の一部は、老莊より變遷し來るを推知すべし、頃日福翁自話を見るに、頗る老子の旨に似たる所あり、嗚呼、福翁も亦人傑なる哉抑老子は、楚國苦縣勵鄉曲仁里の人にて、性は李、名は耳、字は伯陽、諡して聃と云ふ、周の守藏室の小史（柱下の史とも、太史とも云ふ、今の書記の如きものなり）にして、孔子の己れに嚴事せるに依り之れに禮を教授し、關令尹喜の需に應じて、道德經五千餘言を著はし、俊哲なるとは、禮記史記及び高士傳に徴して明かなれども、史記にも其終る所を知らずとある如く、其身の最後は考ふべからず、去れども、後漢書には、老子は天然に往き釋迦佛となり、佛法を説き弘めしとあり、或は云ふ、老子は、晚年歐羅巴に往き、哲學の源基を開きしと（耶穌も釋迦の弟子にて、印度より歐羅巴に往きしものなりと云ふ説もあり）果して然らば、今日歐羅巴に行はる、Nihilism 虛無論、暨以無政府黨の如きものは、老子に基因せしかも知るべからず、老子の學旨は固より虛無黨等が論する所とは、大に異なれども、其虛無寂靜の深旨を誤解して一變するときは、無政府黨等が云ふ如き大害を醸すに至ると無きを保せず、故に老子は頗る危険なる書なり、適ち余之れを講ずるには、十二分の注意を加ふれども、之れを聴くものも



亦豫め其意を體せざる可らず、夫れ老子は、真人とも云ふべき俊哲なりしか、識見の狭き漢唐學者の考證家は、孔子は老子の弟子なりと云ふを恥と爲し、其事を蔽はんとして、老子が師事せる老子と、道德經を著はし、老子とは、別人なりと云へり、或は云ふ、老子は周の平王の時の人にして、孔子より百六七十前の人なりと、或は云ふ、老子は孔子より百七十八年後の人なり、故に劉向新序に、老子が梁の惠王に見へたるを記しぬ、又史記に太史儋が秦の獻公に見ゆ云々と記し、太史儋は、即ち老子の事なりと、此れ周禮の職制は、守藏守の吏、即ち太史も、世襲なるを知らざればこそ、爾き謬説を來たすなり、道は武内宿禰の同名異人なるを知らずして、三百歳の壽命を保つなど云ふと一般なり、事文類聚に云ふ、老子の母、李樹の下に於て、老子を生みたれば、老子生れなからにして能く言ふ、李樹を指して曰く、此を以て我が姓とせんと、因て李を姓と爲すと、或は、老子の母が七十二歳のとき立妙王女流星が其口に入るを夢みて老子を生むとか、或は上世の真人か、老母の胎中に入りて老子を生むか、老子は生れなからにして胎首なり、人其老たるを見て、其幼きを見ず、之を嬰兒と云はんと欲すれば、胎首なり、之を老父と云はんとするも、新に生れたる子なり、故に之を老子と名くとか諸書に散見するものは後世仙術者の如き者か、老子の事を高妙にせんとして作爲したるものなりと信す、此れ補正成の父か、子なきを愛へて、其妻と志貴山に騰りて、正成を生むとか、豊臣秀吉の母か、日輪か其懐に入るを夢みて秀吉を生むとか云ふ奇譚と同日の囁語なり、凡へて未開の世には、斯く怪誕不稽にして幻妙思議すべからざるを、いと貴きもの、如く思ひし故、此等の事をもて、人に信心を起さしめしか、開けゆく世の人の眼は、怪誕をもては、欺くへからざるなり、夫れ老子の書は、當初より上下二篇に別ち、篇中章を別つと雖ども、易繫辭傳に上下を別つか如く深意あるにはあらずしが、河上公と云へるもの、老子經章句を作り、上下二篇を分ちて八十一章と爲し、上篇を三十七章とし、下篇を四十四章として、天地奇偶の數に象とりぬ（前漢の嚴遵は七十二章となせり）唐の玄宗は、又其の章句を改定して、上篇は道を説き、下篇は徳を説くと云へども、上下篇とも道德を混説したるものにて、截然たる區分はあらずなり、實に老子の書は、僅々五千言に過ぎざれども、其學問の深遠なるとは、儒書十三經、佛書一切經

八萬四千の法藏にも、對抗するを得へし、故に漢の孝文帝は、甚だ老子の道を悦へり、竇太皇も亦老子の學を好まれ、景帝をして群臣に之を教へしめらる、爾後老子の道、漸く世に行はれ、唐の高宗の乾封元年には、老子を追號して太上玄元皇帝と爲し、唐の天寶二載には、大聖祖の號を加へられ、同八載には大道玄元皇帝と加號し、同十三載には、大聖祖高上大道金闕玄元天皇帝と加號す、宋の世には、太上老君混元上德皇帝の號を贈り、又老子の母、及び妻にまで尊號を贈れり、其世に崇尊さるゝと想ふ可きなり、而して學者英傑の老子に據て、學問を素養し、事業の根底を爲し、もの指屈するに違わらず其最も老子の神髓を得し人々を擧ぐれば、戰國に在ては、則ち莊子、申子、韓非子、漢に在ては、則ち曹參、張良、陳平、晋に在ては、則ち王導、謝安、竹林の七賢、宋に在ては、則ち蘇家の兄弟なりき、漢の董仲舒、唐の韓退之、宋の程子等は、老子を信せざれども、皆能く老子を研究したるには相違わらじ、殊に文朱公か老子を評したる語を觀れば、其深く老子の書を見たるを知るへし、老子の道の正潤は暫く擱き、學者英傑たらんと欲する者は、必ず先づ其書を十分に講究せざる可らず、之を信すると、否とは講究の曉に於て、我が良心に問て決するに在るが如し、古來老子に註し、書は、多からめと觀るへきものは甚だ尠し、唯河上公、嚴遵、王弼、蘇子由、呂吉甫の注を著名なりとす、其中に就て、最も信を惜くに足るものは、蘇子由の説なり、故に本講は、蘇子由の説を基本と爲し、更に己れか創説を加へ尙ほ諸説を取捨折衷して補充するも、煩瀆を避け、成るべく講義を迅速に完結すべし、緒論の終に臨んで、仍は言ふ可きをあり、余は盡く老子の説を信するに非れども、老子を講するに當ては、大に老子の説を左祖し、自ら老子に代りて講するの心なかる可らず、是れ頼山陽が日本外史源氏正記の篇に於て、源氏の兵を我兵と記するが如き心なり、

老子道德經

道德の字は、篇中總へて道德の事なるを以て、茲に講説するを要せず、經は、ツ子、ミチと訓する字にて、聖人の作りたる書を云ふ、老子の書も、最初は一の子書なりしが、漢の景帝初めて此書を尊んで經と名け、道學の基本と爲し、天下の



人をして之を拜讀せしむ、爾來此書を老子道德經と唱ふるに至りぬ、

上 篇

道可道章第一

道可道非常道名可名非常名

大凡を物として事として道にあらざるものは無けれども、斯様なるものか道なりと云ふときは、不變不易の道にあらざる、惟く道の道とす可らざるものこそ、常道とは云ふべけれ、即ち仁義禮樂を以て人に教ふるは、道の道とすへきものにて、不變不易の道にあらざるなり、常とは即ち不變不易の謂なり、道既に道とす可らざれば、豈に得て之を名く可けんや、故に名の名とすべきは、不變不易の名にあらざるなり、右は蘇子由等の註に解きたる趣意なれども、此れにては、其深旨發揮せざるを以て、更に之れを詳説せん、蓋し道は天地萬物ありて、而後道あるにあらず、道ありて、而後天地萬物あるものなれば、其由りて出る所を知らず、又其終る所を知らず、即ち無終無始なれば、古往今來を通じて變滅せず、其狀を語らんとするも其象なく、之を視んと欲するも視るを得ず、之を聴んと欲するも聴くを能はされども、宇宙に偏滿普盈して、あらざる所なし、上は日月星辰、下は草木昆蟲に至るまで、之を恃んで以て存す、其至大至妙、此の如くなれば、本と言辭を以て稱道するを得ざるものなれども、舉げて之を論ずるに由なきを以て、暫く強て之を道と呼ぶ、斯く道は深遠微妙にして、形象の上に立ち、事物の外に超然たるをもて、事物の標準、行爲の制規と爲し難きに因りある學者は、仁とか、義とか、禮とか、樂とか云ふ名目を立て、行爲の制規、政教の本と爲しぬ、此の如き道は、明かに人に示し教ふるを得るものなるか故に、之を道可道と云ふ、然れども、各其見る所、好む所に由て、之か名を設く、其名は均しく仁義なるも、孔子の仁もあり、宋襄の仁もあり、伯夷の義もあり、聶政の義もある如く、仁義も一定せざりき、禮樂も亦夏殷周各々相異なるか如く、時の古今と、地の異同に據て變易なき能はず、是を以て、仁義禮樂等の名目を立て、之を道と爲すときは、常道即ち不變不易の道と云ふを得ず、唯其れ宇宙に涉り、古今に通じて、會て變易せざるものこそ、常道とは云ふべけれ名可名非常名

老

子

老

子

は、輕く見るへし、此れは辭を替へて、上の句を再び解きたるものにて、仁義禮樂等の名を附するは、恒常不變の名にあらざるを云ふ、請ふ近く之を譬へん、今文學博士とか、法學博士とか、理學博士とかの名を附するは、必ずしも真正の學者にあらず、真正の學士は、文學博士とも、法學博士とも、人得て名つくるを能はされども、理學博士か一たひ獨逸に遊ふときは醫學博士に變じ、醫學博士か官吏となるときは、法學博士に化すかも知る可らず、故に醫學博士理學博士等の名は、常名に非るか如し、餘に味増の味増は、上味階にあらず、學者の學者嘆きは、眞の學者にあらずと云ふは、蓋し此語より一轉したるものなる可し、凡そ已れか説を立んと欲せば、先づ對手の敵を破らざる可らず、故に本書の劈頭に於て孔子流の説を擊破せり、佛書には、此法を名けて破立と云へるも理にこそ、

無名天地之始有名萬物之母

此處は、古來二様の讀法あり、第一説は、無名有名の下を讀むと爲し、「無名天地始有名萬物之母」と訓點を附す、第二説は、「無名天地之始有名萬物之母」と訓點を施す、第一訓點の意に據て解くときは、天われは天と云ふ名あり、地われは地と云ふ名あり、萬物われは萬物の名あるか故に、無名と云へは、天地もなく萬物もなき時、即ち天地の未だ開けざる始にて、有名とは天地の開けし時なり、母とは物の是れより生ずるを言ふ、又育つるの義あり、夫れ天地混沌として未だ開關せざる時に在て、道の輕くして清めるもの、上に升り、其重くして濁れるもの、下に降りて天地の始めをなしぬ、既に天地開關せる時に至ては、母の如く宇宙の萬物を生して養育せり、此れ即ち眞常不變の道なりと云ふに在り、第二説の意に據て解くときは、第四十章の「天地萬物生於有有生于無」と同旨にて、無とは、列子の謂はゆる「太易」の如きものにて、天地未だ有らざるの初めに、氣、形、質の三は具有すれども、混沌として未だ相離れず、其形象の視るべきもの無きをもて、之を無と稱す、故に無名天地始と云へり、第四十二章に「道生一一生二二生三三生萬物」とあり、一とは一氣なり、二とは一氣分れて陰陽の二氣となれるものなり、三とは、陰陽と冲和の氣となり、無の中に二氣の動くは、形變の始めなり、既に一氣動くときは、形質と相待つて萬物を生し、生々已まざるものとす、此氣を指して有とは云ふなり、斯く一氣既に無中に生し、其れより二を生し、二より三を生し、三



より萬物を生ず、故に有名。萬物之母と云へり、然れども、氣は獨り物を生ずるを得ず、必ず形質と相待つて始めて萬物を生ずるものとす、其精密なる理は、第五十一章に至りて明瞭なるを以て今茲に贅せず、  
故常無欲以觀其妙。常有欲以觀其微。

欲とは、人欲とか、物欲とか云ふわしき欲にあらず、心にかくせんと念慮の起るを云ふ、無欲とは、一念不動の時即ち心中に一物なき時なり、故に有欲とは一念己に起りたる時なり、其は道を指す、妙とはクハシとかカスカとか訓する字なれども、口筆等を以て述ふ可らざる深微の趣を云ふ、佛書にも此字を用ふ所多し、所謂不可思議と云へるも亦妙の字の意に外ならず、英語には、之をAbsoluteismと云へり、微は、邊微の微にてホトリと訓す、終の義なり、物の結果を云ふ、觀は、目を以て見るに非ず、心の中に觀念する意なり、

此處は道を知るの法を説きたるものなり、夫れ人若し道知らんと欲せば、吾か心の静かにして、一念動かざるときは、道の微妙、即ち道の體を觀念して見るべし、既に吾か心動きて、斯くせんと念慮起るときは道の成敗、即ち道の用を觀念すべし、蓋し心の寂然として静かなる中より萬事出づ、道も亦静かなる中より萬物生ず、故に吾か心静かなるとき、道の妙を觀念するなり、吾か心の物に感して動くとき、道の無に由らざれば、其事成らず、譬へば物を見んとするに、眼と物との間、無なるに由りて見ゆるか如し、故に吾か心の有欲のとき、道の無なるよりして、事の成就するを觀念すべし、林希逸云ふ「欲者要也。要如此究竟也」と、此説に據るときは「常無欲以觀其妙。常有欲以觀其微。」の如く訓點を施す意なり、余は此説に従はず

此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄。衆妙之門。

兩者は、天地之始と萬物之母との二なり、玄はソロンと訓す、深遠にして測られざるの謂なり、凡て深遠なるものは、其色黒くして測り知る可からず、故に深遠なる道理を玄と云ふ、楊雄か太玄の玄も此の意なり、Philosophyと哲學を譯したれども、玄學と譯すこと至當なれ、玄學てふ字は、新製の文字にあらじ、昔者晉の世に、經學、雜學、玄學、史學の四學科を設けしとありき、玄之又玄とは、更に辭を進めて贅稱歎美する語なり、衆とは、天地萬物を指す、妙は妙の古字なり、衆妙とは日月星辰の天に麗り、山岳の地に發へ、海水の

常に絶へざるか如き美妙の働きを云ふ、門とは衆妙の由りて出づる所の義なり、

無名は、天地の始め、有名は萬物之母と云ふも、此兩者は同じく道より出てたるものにて、始めと名け、母と名くるも其名を異にするに過ぎず、實に此兩者の出づる所の本は、深玄にして測知すべからず、太陽が區字の中心に在りて動かす、地球の自動して休まず、草木の時を以て華と實を結び、動物の交接して子を生むか如き所以の美妙なる道の由りて出づる所は、無量無邊にして深玄の上に深玄を加へたる者と云ふへし、本章は、道德の二字の旨を説きたるものなり、張子は「由太虚有天之名。由氣化有道之名。」と云へど、老子は、太虚を以て、天地の由りて天地たるものと爲し、之れを名けて道と謂へり、氣化を以て、萬物か之を得て萬物たる所のものと爲し、之を名けて徳と謂へり、道とは、形而上の理にして、氣を雜れざるものを指して言ふ、莊子の謂はゆる「無有」是れなり、徳とは、形而下の氣中に此理のあるものを指して言ふ、莊子の謂はゆる「太」是れなり、故に其の道その徳は、虚無自然を以て體と爲し、柔弱不盈を以て用と爲せり、故に凡そ進取剛毅の所爲は、老子主義に於て取らざる所なり、而して常無欲と云ひしは、静中の工夫にして、中庸の「戒慎恐懼」のとなり、常有欲と云ひしは、動中の工夫にして、中庸の「誠其意」に當れり、

天下皆知章第二

天下皆知美之爲美。斯惡已。皆知善之爲善。斯不善已。

天下の人は、物の表面を知りて、裏面を知らず、現在を知りて、將來を知らざるが故に、美しさものを見れば、美しさものとして愛すれども、這は其實甚た悪しさものなり、例へば、人皆な櫻桃の美しく咲き亂れたるを見れば、美しく思ひて詠むれども、一夜の嵐に打たれて、塵塚の塵となるは、悪しさ様なるか如し、人の善に於けるも亦然り、人皆な仁義とか、自由とか、立憲政体とかの名の善なるを聞きて、之を善とすれども、或は仁義の名を假り、或は自由の名を利用して、天下を眩惑し私を營むものあるに非ずや、立憲政体も現に虎狼龍騰の紛擾を醸すに非ずや、則ち立憲政体、自由、仁義等の不善なるを知るべし、蓋し美惡善不善は相對の語にて Absolute (絶對的) の辭にあらず、美に對して惡あり、善に對して不善あるものなれば、美善



惡不善は、獨り存するを能はず、即ち我か美となし、善と爲す事も時と場所とに因て、惡となり不善となるを無きを得ず、故に老子は、先づ一定の心を立つるとを惡り、凡そ人に交り、物に接して平等圓滑なるを能はざるは、畢竟我に先づ定心あるを以てなり、人の美と爲し、善と認むるものは、多くは眞美眞善ならず眞美眞善は、即ち大道の在る所にして、美惡善不善の名もなく、其相對を失ふものになん、是を以て老子は政略的の作爲を用ゐず、自然に循ひて國家を治めり、老子の眼より之を視るときは善惡の別なく、善不善の分なく、仁義も大道の中に寓して、仁義も名は自ら生ぜざりき、

要するに美惡善不善てふ名は、我か情に適ふを美と爲し、善と認め、我か情に逆ふを惡と爲し、不善と認むるに過ぎず、某哲學者は社會の現状を視て、價值界、眞理界及び事實界の三に區分しぬ、事實界とは、社會の現象人間の出來事、國家の治亂興亡する事實の跡に就て、其原因結果を探究舉止するを得れども、其原因は何故に然るや、又何の爲めに然るやと、論理學の deduction 演繹法に據て、一々推歩するを能はずと認むる一界なり、眞理界とは、窮理學の原則、若くは論理學の思想原律の如きものを、最上至極の理と思惟し、是れより高尚なる原理無しと斷定し、吾人は之を承認すべきものにて、證明するを得ずと認むる一界なり、價值界とは、即ち此に云ふ所の美惡善不善にして、感情界と云ふに異ならず、事物及び人の行爲を視て、彼れを善と爲し、美と賞し、是を惡と爲し、不善と排するは、事物行爲の價值にして、吾人か心裡に受くる所の感情なり、故に價値てふものは、之を感受するの力ある者に對してのみ存するものとす、今立憲政体は善なり、自由は美なり、君主獨裁は不善なり、壓制は惡なりと云ふは、價值界の感情に基くものにて、眞理界の原理に據り、何故に之を善なりとし、之を不善なりとするやと問ふときは、答ふるを能はざるへし、眞理界より之を視るときは、善もなく、不善もなく、自由必しも美ならず、壓制必しも惡ならず、人類も牛馬も、均しく是れ宇宙間の動物なるに、人類の牛馬を壓制するを甚しけれども、此を以て惡とは云ふ可らざる如きは其一例なり、右に説く所の眞理界は、老子めくものところ、知らるれ、

故有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨。

相とは、二者對峙の辭にて、必しも交互の義にわらず、有無相生とは、有われは必ず無の名起り、無われは

す有の名立つを云ふ、例へは無神論あるか故に、有神論起るか如し、難易相成とは、易に對して、難の名起り、難に對して、易の名立つを云ふ、例へは、歐文は易しと云ふか故に、漢文は難しと云ふか如し、長短相形とは、鶴の脛長ければこそ、鳧の脛短く見ゆめれ、鳧の短ければこそ、鶴の脛長く見ゆる如きの類なれ、高下相傾とは、人類同等の眞理を忘れて、貴賤高下の區別を立つればこそ、下の民黨は高き内閣を傾けんとし、高き内閣は、下の民黨を壓せんとするの類なれ、音も聲も同じく空氣の作用に由て響くものなれども、聲の文を成すものを音と云へり、音聲相和とは、三昧線の音と、濁聲の糞大夫の淨瑠璃と相調和するの類を云ふ、猶ほ雪肌細腰の美人と、痘痕片眼の醜男子と夫婦となり得ると云ふか如し、前後相隨とは、前あれば後あり、後あれば前あるを云ふ、例へは改進黨か我黨は政黨の前達なりと云ふも、自由黨に對すれば、後なり、自由も三戸の正義黨等に對すれば、後たらざるを得ざるか如し、世人は、美惡善不善に就て先づ一定の成心を立てるか故に、有無、難易、高下、聲音、前後の相生し相奪ふの不正なるを知らざるなり、抑々此六句は一例を擧ぐるに過ぎず、其他勇怯強柔等に就て云ふも皆然らざるはなし、我は勇なり強なりと思ふも、我より勇強なる男に逢ふときは、我は怯柔なる男となれり、此理に均しく、我か美としする所、我か善とする所、不善とする所我か惡とする所を信するときは、眞理に違ふものとす、

是以聖人處無爲之事、行不言之教。

此處は、本章の主眼なり、上文は此二字を言ふ爲めの前言なりき、處無爲之事とは、聖人は樟朴を守りて毫も計略的の施爲なく、仁義禮樂等を脩めて、一世に衒示するを欲せず、萬物をして各々其自然に循はしむるの意なり、行不言之教とは、聖人の心には、一點の私なく、萬物の自然に循へる故を、法律規則等の力を假らずして、民の自ら化するを云ふ、第三十七章の「道常無爲而無不爲。侯王若能守。萬物將自化。」及び第五十七章の「我無爲而民自化」も亦此の意なり、要するに、聖人は、政略的の行爲を施さず、唯已れを恭して、正しく南面するのみなるを以て、長短の度を出て、先後の數に離れ、美もなく、善もなく、惡もなく、不善もなく民自ら化して、帝力は自己に關係なきか如くに思へり、



萬物作焉而不辭。生而不有。爲而不恃。功成而弗居。夫唯弗居。是以不去。

作生、爲成、の四字は、原因結果の序次ある辭なり、例之は、冬日麥等の芽の地中に萌すは、作なり、春日芽の出するは、生なり、夏日實を結ぶは、爲なり、秋日實の熟するは、成なり、辭は妨げ拒むを云ふ、有は、我かものとするを云ふ、

聖人は、無爲の事に處し、不言の教を行ふを以て、萬物か各々其自然に循て發動して、生せんとするに當りて、毫も之を妨げ拒むをなし、殊に萬物中の人類が、あるは、其の工業を爲んと欲し、あるは殖民地の開拓に従事せんと欲し、其他千種萬彙の事を爲んと欲するも、聖人は只上に在て、之を留めもせず、之を勸めもせず、一に人民の自由に任せて些も關係せず、故に萬物作焉而不辭と云へり、萬物已に生れて形を成すに至るとき、及び人民か企てし事業の始て緒に就きしとき、聖人は上み天子の位に在るも、之を己れか有と爲さず、故に生而不有と云へり萬物漸く成りて其形を具ふるとき、及び人民の事業、漸く進んで爲し得んとするとき、聖人は己れか無爲の智を恃みて、其事に手を下さず、故に爲而不恃と云へり、萬物已に成熟するるとき、及び人民の事業全く功を奏するるとき、聖人は、斯く物の成るは、化育の功用なり、斯く事業の成るは、人民の働なりとして、自ら其功に居らず、故に功成而不居と云へり、聖人は、自ら其功に居らざればこそ、其功は去り失ずして、長く聖人の功とことなりぬれ、故に夫唯弗居、是以不去と云へり、若し夫れ己れ功を立んとす心あるときは、一方に於て、其功を拒むものあるは必至の勢なるを以て、之を自然に委して、自ら功を立つるの意あらざればとも、他人の功反て己れに歸せり、歴史に據て、之れか一例を舉ぐれば、漢の高祖曰く、籌策を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは、吾れ子房に如かず、國家を鎮め、百姓を撫で、餽饗を給し、糧道を絶たざるをば、吾れ蕭何に如かず、百萬の象を連ね、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るとは、吾れ韓信に如かず、此三人の者は、皆人傑なり、吾能く之を用ふ、此れ吾が天下を取る所以なりと、斯の如く漢の功業は、此三人に在れども、天下は三人のものにならずして、高祖の天下となりぬ、是を以て、余恒に漢の高祖は、老子の神髓を學へりと云へり、

世の有爲の事、有言的の教は、人皆な其美たり善たるを知るが故に、美と惡と對し、善と不善と對し、獨尊獨貴の妙美妙善ならず、老子の無爲不言の教は、妙美妙善あれども、人之を知らず、是を以て、其妙美妙善は、獨尊獨貴にして、對比なし、斯く絶對的の論旨を探れる趣は「ピザコラス」氏の絶對論、「スピノサ」氏の本質論及び「スペンサー」氏の不可知的論と相類する所あり、而して支那俗間に行はる、謂はゆる道家の如きは、本と老子より出でたるものなれども、怪異奇誕に流れて、哲學の範圍を脱却したるものと云ふべし、

不尙賢章第三

不尙賢使民不爭。不貴難得之貨使民不爲盜。不見可欲使民心不亂。

世を治むるか爲め、賢に任し、能を使ひ、之を尊榮するに高爵美官巨祿を以てして、人民の上にならしむればこそ、人民之れに若かさるを恥ぢ、相競ふて狡智を事とし、功名を争ひ、遂に天下の紛糾混亂を來たすなれ、聖人は深く之を鑑みて賢を尙はず、人民をして功名を争さざらしむ、然れども、聖人は未だ嘗て賢を用ひざるにあらず、但之れを尙ざるのみ、須く尙の字に眼を注ぎて見るへし、夫れ金銀珠玉の類は、坑中海底より出るものにて、容易に得へからず、故に之を名けて難得之貨と云ふ、金銀珠玉の類は、米穀布帛の如く必要缺く可らざるものにあらず、飢へて食ふ可らず、寒へて衣る可らず、之れあるも身に益なく、之れなきも身に損なきに、人君たる者か、金銀珠玉を貴ふときは、上の好む所、下之れより甚しきものにて、人民は相競ふて之を得んと欲す、固より之を藏貯する者は、倍々之を藏貯せんと欲し、愈々多く藏貯すれば、愈々穢なきと唾棄蕪穢の如し、而して未だ之を藏貯せざる者は、二六時中之れを得んと欲して已まず、意思の如く之を得る能はざるときは、終に盜を爲すに至る、故に人君たる者は、西行法師の鎌倉にて銀猫を頼朝公の門前の子供に與へたるか如く、拜金拜玉の意思を損て、之を貴はざるを示さば、下民に貧人なく、盜を爲すと無かるべし、然れども、聖人も絶對的に金銀珠玉を廢棄するにあらず、但之れを貴んで、貨殖を事とせざるのみ、故に貴の字を字眼とす、不見は不示と同し、可欲は、美衣、美食、美屋、珍器の類を云ふ、世漸く下り、民漸く簡朴の風を去るを以て、山海の珍味、錦繡の美服等を見は、必ず欲羨の心を生し、侈靡



に流れ、民心漸く乱れんとす、是を以て、聖人の天下を治むるや、侈靡を去り、敦朴を務めて可欲の物を示さず、以て欲羨の念を閉ち、民心をして乱れざらしむ、然れども聖人も亦衣食住の欲を皆悉去るにあらず、但之を民に示さざるのみ、故に不見の字に意を着けて見るへし、

是以聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志、強其骨。

四側の其は、人民を指す、虚其心とは、人民の心、空虚にして、種々の事を企て巧むを無からしむるを云ふ、辭を替へて言は、人民に欲心なからしむるなり、實其腹とは、人民をして食に足らしめ、飽ませて食して腹に實たらしむるなり、或は云ふ、氣をして人民の腹内に充實せしむるなりと、亦通す、弱其志とは、人民の志を柔弱ならしむるなり、強其骨とは、人民の身體を強健ならしむるなり、聖人の天下を治むるは、人民の慾心を閉つるを以て、眼目と爲し、人々をして其心を虚にして、種々の計畫的の慾心を断たしめしむ、食は充分に足りて、其腹に實たしめ、飢餓の患ひ無からしむ、(或者の説に據るときは、人の嗜慾、盛なるときは、常に物を外に逐ひ、氣か内に専なるを能はざるを以て、腹常に空しけれども、心を虚にして外物の爲めに嗜慾起らざる時は、氣か内に専らにして、腹常に充實すとの意なり)、夫れ世に國事犯等の起るは、人民の志氣剛強なるを以てなり、故に聖人は、人民の志を軟弱從順にして、毫も上を犯し、政府に抗抵する等の意思なからしむ、然れども、人民の筋骨は、頗る強壯なるを要せり、何んとなれば、筋骨強壯ならされは、生計上の業務、即ち男耕女織等の働さを做すと能はず、之れを做すと能はされは食を足して其腹を實すると能はざるを以てなり、而して、聖人は、甚麼なる方法に倚りて、其心を虚にし、其腹を實にし、其志を弱くし、其骨を強くするを得るや、是れ他なし賢を尙はす、得難きの貨を貴はす、欲すへきを見さるに任るのみ、今尙し賢を擧げて之を尙ひ、貨を寶として之を貴ひ、欲すへきを衒らして之を示さば、人民の心と腹とをして皆實せしめ、又擧げて之を廢するときは、人民の志と骨とをして皆弱ならしむ、其心と腹と皆實するときは人民相争ふて禍亂己ます、其志と骨と皆弱なるときは、人民は俱に斯世に立つと能はざるへし、

常使民無知無欲使夫知者不敢爲也爲無爲則無不治。

人民が利欲の爲めに心を奪はれて、滑智を事とすればこそ、天下常に乱る、なれ、是を以て、聖人は一般の人民をして無知無欲にして澹然清静ならしめ、偶々一二の猾智者あるも、其猾智を働かすの餘地なからしむ、(敦朴寡欲の我々漢學者社會に偶々山師風の人物が混入するも、其狡猾奸策を用ふるを能はざるは、其實例なり)斯く聖人は、紛乱の本源を閉塞し、末流をして自ら清浄ならしむるを以て何の爲すとも無く、唯垂拱して天下自ら治れり、夫れ智の種類も亦多し、此處に言ふ所の知は、徳より出てたる本然の靈智を言ふにあらず、人の私欲を達するに巧みなる慧智を言ふなり、人民の食を足し、其腹を實たし、其骨を強ふして、春風和風の太平に生息せしむるは、即ち人の靈智なり、夫の甘言諂諛、若くは才慧等を以て、巨財を得、美官を得、美人を靡かすか如きは、皆謂はゆる慧智なり、慧智を分析し來れば、滑智もあるへく、頓智もあるへく、奸智もあるへく、其他種々の智あるへし、就中奸智の極は、必ず詐欺取財等の罪を犯すに至る、無知にして此等の公犯を爲すを得んや、故に人民は無智無欲ならしめざる可らず。

道虚章第四章

道虚而用之或不盈。淵乎似萬物之宗。

虚は、近本には沖に作れども、古本に據て之を改む、説文に云ふ、「虚器虚也」と、器の中虚なるを云ふ、ウツボと訓す、蓋し道は至大にして、形象の論すべきなきを以て、之を形容して虚とは云ふなり、凡そ物の至大なるものは、虚虚にして物なきか如し、故に虚は、虚無至大の意と見るへし、夫れ道は天地に先ちて生し、萬物生々の基をなし、宇宙に徧満して、有らざる所なし、萬物の美妙なる所以、四時の代謝する所以、日月星辰の運行する所以は、皆道の功用にあらざるはなげども、人或は之を認め得ず、恍惚として、存する如く、存せざるか如く、勢帰として、有るが如く、有らざるが如くなるを以て、用之或不盈と云ふ、或は疑の辭にて、或不盈とは、盈たざるか如くなる意なり、其盈たざるか如くなるこそ、大盈なる所以なれ、然るに、王弼は、「沖而用之。又復不盈」と注し、河上公は、「道常謙虚。不盈満也」と注し、吳澄は、「道之赫虚、人之用此道者。亦虚而不盈。盈則非道」と注し、は、不盈は即ち虚なるに見たるものなり、林希逸は「道



挫其銳解其紛和其光同其塵泄兮似若存

鋒雖虛而用之不究。或盈。或不盈。隨時而不定也。」と注し、は較々或の字の義を盡したるか如くなれども、未た至れりと云ふ可らず、余は、蘇子由の「夫道冲然至無耳。然以之適衆有。雖天地之大。山河之廣。無所不遍。以其無形。故似不盈者。」と説きたるを確實なりと信しぬ、何となれば、此或の字は、下文の似の字、象の字と俱に疑の存する辭にて、確断せざるものなればなり、淵乎は、深なる貌、萬物之宗とは、萬物の根原、即ち萬物の自りて生ずる本との謂なり、萬物は皆道より出て、其衆妙を成しぬ、故に萬物の宗と云へり、然れども、道は幽深寥廓にして見る可らざるを以て、似たりなる疑ひの辭を添へり、之を要するに、道の體の微妙にして、測るべからざるを云ふなり、

挫其銳解其紛和其光同其塵泄兮似若存

銳は、本と兵刃の尖利なるを云ふ、スルドシと訓す、刺刀の如きは、銳の鋭を極めたるものなり、こゝでは猛烈なる義に取れり、凡そ人の妄に流れ、危難に遭ふは、我に銳利猛烈なる才氣あるを以てなり、世の紛擾をして、彌々紛擾ならしむるは、亦我れに猛烈なる處分あるに據れり、故に聖人は、先づ猛烈なる銳氣を挫き去りて、虚を體し、静を守り、風を衝き、雲を打つか如くにして、事の紛擾を解けり、夫れ己れか智を耀かし、光りを露はすときは、必ず天下公衆の怨を招くものなるを以て、聖人は聰明睿智の光りを盡みて露はさす、打ち和けて目立たぬやうになせり、此れを和其光とは云ふなり、佛經にも五濁惡世など云ふ如く、世の中は、塵の如く濁りたるものなるに、我れ獨り清めりと云ふて、傲然自立するときは、天下公衆に擯けられて、天地の間に立つと能はざるへし、故に聖人は已れ獨り善人ならず、塵の如く穢なき衆人と交際せるを以て、同其塵と云へり、老子が藏室の史、即ち書記となりて、俗吏と交はれるは、乃ち是れなり、畢竟此四つのものは、虚無の妙用なるか故に、湛然とてて陳かず、(湛兮は深静の貌) 在せども目たずして、存するか若くこそ見ゆれ、右の如く説くときは、其銳其光其は、已れに屬し、其紛其塵其は物に屬しぬ、然るに、人或は云ふ、上下の句、共に道の妙用を説くものなるに、中間の此數句のみ聖人の處世法を説くものとなさば、首尾聯絡せず、意義貫通せず、故に等しく道を説くものにて、四個の其の字は、道を指して云ふ、銳とは銳利にして圭角あるなり、堅きものは毀れ易く、銳きものは挫け易し、故に道は其圭角を去りて、其

吾不知誰之子象帝之先

圓滿の跡を守れり、此を挫其銳と云ふ、萬物紛擾の中にありて、條緒の秩然たるものあるを、解其紛と云ふ光に至潔なり、道は本に至潔なれども、甚た潔白なるものは、垢れ易し、故に其光を露はさす、此を和其光と云ふ、道は毫も塵埃の垢なれども、獨り潔くして、物に別異するを欲せず、此を同其塵と云ふ、道は、其光明を掩ひ、其塵を同ふするも、其真其跡は、決して渝らず、廓大にして形象なく、寂然として聲もなく息もなく、人をして其存否如何を疑はしむ、然れども、古往今來萬物生化して、其美を濟し、天地運轉して休まざるを見れば、道の存すと知るへし、故に泄兮似若存と云へりと、此説も亦通す、

吾不知誰之子象帝之先

不知誰之子とは、道の自て生ずる所を知らずと云ふに同し、帝は、天帝なり、帝之先とは、第一章の「天地之始」及び第二十五章の「有物混成。先天地生」と粗々同旨なり。凡そ子の生ずるは、親ありて然後生ずるものなりしが、道は誰れの子にして、何れより生ずるを知らず、始めは、蓋し測り知る可らず、帝の先即ち天地の未た有らざりし時より存し、もの、如し、或人の説に、此處は聖人か無を體し、妙用は、天に勝りしを説きものなりと、又或は云ふ、吾は眞君即ち心を謂ふなりと、此れ皆牽強附會の甚しきものにて取るに足らざるなり、

天地不仁章第五

天地不仁以萬物爲芻狗聖人不仁以百姓爲芻狗

芻狗とは、芻をもて狗の形を作り、祭の時に之を供へ、祭終れば其れなりに棄て置くものなり、今こゝに之を用ふるは、意を加へずして、其れなりに棄て置くとの旨意なり、即ち萬物と相忘るゝと云ふ、此字は莊子天運篇にも見ゆ、天運に云ふ、「夫芻狗之未陳也。盛以篋衍。中以文繡。尸祝齋戒以將之。及其既陳也。行者踐其首脊。蘇者取而暴之而已」と、余か莊子該處の講義を照し見ば、更に明瞭なるへし、天は萬物を覆ひ、地は之れを載せ、雨露之れを潤し、日之れを照め、地之れを養ひ、萬物茲に生育すれども、天地は萬物を生育するの心ありて、故ら仁愛を爲すにあらす、恰も祭終れば芻狗を捨て、復顧みざる



か如く、之れを打忘れて其自然に任せり、柳は緑、花は紅、萬物各々生育するは道の用き、即ち天地の仁なれども、天地は、始めより物を生育するに心ありて、仁を施すに非ざるなり、施爲造作の心無ければこそ、萬物其生育を遂ぐるも、以て己れの功となさず、物と相忘るゝと芻狗の如くなるなれ、聖人も亦無心にて、仁愛を爲す意なく、百姓を芻狗の如くに打忘れて、其自然に任せり、蓋し聖人は上位に居て民に臨むも、計畫作爲の心ありて百姓の利益幸福を謀るとなく、唯澹然として道に躰し、自然に法どり、人民をして無欲無知ならしめて其性を遂けしむるのみ、爲めに天下平かに治るも、聖人以て己れの功となさず、百姓も亦聖人の仁愛の中に在て、生を遂げなから、皞々如として其仁愛を知らず、君民共に至治至樂の中に在て相忘れて、仁君だの、忠臣だのと想ふとは有らざりき、抑々本節は、孔老學派の相岐るゝ根原とも云ふ可き所なるを以て、爰に其區分を説明せん、孔子は口を開けば、必ず仁を説く、老子は之に反し、不仁云々と説けり、畢竟するに仁の字の所見、相同じからざるなり、先づ孔子か云ふ所の仁の意を説かん、宋儒は、仁は、心の徳、愛の理と説く、古説は、仁は字形の如く二人相對して和親するなりと説く、孰れの説にしても、仁の用は、人々相愛し相親しむの義に外ならず、夫れ人の世に在る、誰れか自己の利益の想はざらん、然れども、自己の利益のみを謀りて、毫も人の幸不幸を顧みざる時は、畏るべき結果を來たさん、例へば今の高利貸が我に毫利の權利あちは、直に之を法廷に訴ふるが如し、人と人との交際は、國に政府ある以上は、健訟の惡風に止まれども、國と國との間に於て、互に利己主義のみを主張して、和親の美德を想はざる時は、戦争各處に起り、弱の肉は強の食となり、壯者は干戈に殞れ、老幼は、貧苦に沈淪するに至らんとす、聖人之れを愛へて、人々互ひに相親愛し、相依り相助け、和氣霽然の間に各國各人其自利を享け、社會の利益を増進するの教へを立て、之れを仁と名け、以て人民の艱苦を未來に救濟せり、(大學の親民、是れなり) 此れ孔子の仁を説くに及々する所以なり、老子の見る所は、茲に異なり、老子は大道を以て、最上至極と爲し、自然に法どり、各々無知無欲なるときは、人民決して争ふに至らず、仁なる作爲の名目を立て、教となせばこそ、反て紛擾を醸すなれとの旨意なり、之れを概言すれば老子は Negative 即ち退守主義にて、民を害し、物を傷らざるを務め、孔子は、Positive 即ち進取主義にて國利民福を謀るに在るのみ、

天地之間其猶橐籥乎。虛而不屈。動而愈出。

橐籥は、籥なり、フイゴと訓す、鑄工治工等が火勢を促す爲めに用ふる器械なり、橐は外部のハコにて、籥は、其管なり、其握柄を持て衝引するときは、空氣に流動を起して風を生ずものなり、夫れ道は天地に先ちて生ずれども、既に天地生するに及んては、道は天地の間に寓して、萬物を生ずると猶橐籥の風を生ずるか如きなり、蓋し橐籥も風を生せず、籥も亦籥も風を生せず、二者相待て、始めて風を生ず、道の天地間に於けるも亦然り、道獨り萬物を生せず、天地の間も、亦獨り萬物を生せず、二者相寓して、然後萬物生ずして休まざる也、屈は盡くるなり、虛而不屈とは橐の中、空虚なるを以て、風を生じて盡さずとの謂なり、動而愈出とは、籥を動かすと愈々多ければ、風を生出すと愈々多きを云ふ、道の天地間に於けるも、斯の如き趣をなせり、道は本と虚にして、萬物を生ずるの心なく、自然に、任するを以て、能く萬物を生ず、此れ猶橐籥の中、空虚にして、風を生ずるに心なきが故に、能く風を生ずるか如し、猶は一層委しく説かば、道は本と無にして物なし、一たひ動かして一即ち氣を生ず、一より二を生じ、二より三を生じ、三より萬物を生じ、愈々動して、愈々多きは、籥の愈々動かして愈々風を生ずるに異ならず、

多言數窮。不如守中。

數は音朔。毎々の義なり、シバシバと訓す、王弼は、數の字を理の字の意に解すれども、穩當ならず、中は虚中の義にて、空虚なるを云ふ、即ち無心の意なり、林希逸は、「天地之道。不<sub>レ</sub>容<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>盡。多言則毎々至於自究。不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>默然而忘<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>」と解すれども、未だ十分の解釋と云ふを得ず、即ち上の句を承けて、人の多言を臆むと解くに如かず、蓋し人に一定の成心ありて、是非の臆見を持つときは、必ず發して喋々多言す、有心の多言を爲すときは、融通無礙なるを能はずし、て必ず窮するものとす、故に已れか成心を去りて、橐籥の中の空虚なるか如く、虚中を守るときは、事物に接して、其用窮り無かるへし、その多言に優ると幾倍なるを知らざるなり、蘇子由が「見其動而愈出。不知其爲<sub>二</sub>虚中之報<sub>レ</sub>也。故告<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>多言數窮。不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>守<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>窮也<sub>レ</sub>」と注し、は、簡にして盡くると云ふへし、

谷神不死章第六



谷神不死。是謂玄牝。

谷神は、道の深遠高大にして、空虚なるを形容したるものなり、谷は深くして、虚なるを云ひ神は、神妙測る可らざるを云ふ、不死は、不盡さざるの謂なり、即ち道の終極する所なく、止息する所なきを云ふ、凡そ實するものは、生もあり、死もあれどもあれども、虚なるものは、生もなく、死もなきものなり、故に不死と云ふ、列子の謂はゆる「不生不化」も、釋氏の謂はゆる「不生不滅」も、虚の意に外ならず、蘇子由曰く、「谷至虚而猶有レ形。谷神則虚而无レ形也。虚而无レ形。尚無レ有生。安有レ死耶。」と王弼曰く、「谷神谷中央無レ谷也。無レ形無レ影。無レ逆無レ遠。處レ卑不動。守レ静不衰。谷以之成而不見其形。」と林希逸曰く、「谷者虚也。谷神者虚中之神者也。言人之神自虚中而出。故常存而不死。」と、その説く所、各々異なりと雖も、皆前章の「虚而不屈。動而愈々出。」の意を受けて、道を論したるものなり、獨り河上公は、「谷養也。人能養神則不死也。神謂五臟之神也。」と、後世養生の仙術を説くものは、皆河上公の説の如く説けり、玄は、深遠微妙の意なり、牝は、物を生ずる意にて、萬物の母と云ふに同じ、又閑静なる意あり、牝は健躁にして、牝は閑静なる性を有すれを以てなり、爰にも證さし如く、氣分れて陰陽の二氣となり、又冲和の氣を併せて三とす三より萬物を生ずるものとす、故に谷神即ち一氣混然として、生したるものを、玄牝即ち萬物の母とは謂ふなり、

王弼か「谷神谷中央無谷也。」と注し、は、能く穿ちたるものとこそ、謂ふべけれ、注に注を施すの嫌ひあれども、人或は其深旨の在る所を解せざるものあるを慮り、請ふ少しく之を辨せん、夫れ谷てふの兩傍は岸にて、下は底なり、谷てふ谷は、甚麽なるものなりやと釋ぬれば、谷たる形なく、只々中央の虚なる處のみなるがかし、故に虚を譬へて谷とは云へり、而して、神とは神妙不思議の謂にして、虚を譬たる詞なり、凡そ物の神妙不思議の作用を爲すは、一として虚に非るは無し、鼓の聲を發するも、鏡の影を寫すも、其中の虚なるが爲めに非すや、凡そ中の實するものにして、神妙不思議の作用を爲すものはあらし、心も亦然り、閑思難慮か心に實するときは、虚靈不昧なる明德の妙用を發揮して、治國平天下の運用を爲すと能はず、輒近政黨の相對峙して、紛擾の絶へざるも、各々私心私計の實するありて、互に虚心平氣に君を思ひ國を思ふ

玄牝之門。是謂天地根。綿綿若存。用之不勤。

の誠心に乏しければ也、  
門とは、前の「衆妙之門」の門と同じ意にて、玄牝之門とは、玄牝即ち氣の自つて出る所なり、氣の自つて出る所は、即ち道なり、天地根とは、天地の自つて出る本と云ふ意なり、綿綿は、微妙にして絶へざる貌、若は、前の「湛兮似若存」の若と同意にして、確かめ難き意なり勤は、勞るなり又盡くるの意あり、門根存は、韻字を歩みたるものなり、

玄牝の門、即ち道は、天地の自つて出る根源なれども、視聽の能く認むるを得ざる所なるを以て、道は確然存すとも斷言するを得ず、然れども、道は現に天地萬物を生じて化育の功を奏するを見れば、道は存せずとも斷言す可らず、實に道は微妙を極め、綿綿として存するに似たるものなり、夫れ道は天地を生し、又天地の間に流行し、萬物を化生して、其美を成さしむ、其功用廣大無比なれども、道自ら物を生ずるの意あるに非ず、常に從容として勞せず、勞せざればこそ、其用終始盡くると無かりけれ、這は職ら道を論する點より講したるものなれども、河上公の説の如く、脩養の點より講するときは、世人は二六時中役々として、外に從へばこそ、疲勞を覺へ、力盡き精失せて死に至るなれ、人能く神を養ふて、人とは是非を争ふことなく、虚心平氣なるときは、常に從容として、心身を勞すると無くして、永く身を保つを得るとの意に外ならず、

天長地久。所以能長且久者。以其不自生。故能長生。

本章は、聖人が天地に法とりて、身を修む所以を説きて、人に示するものなり、夫れ天は、決して盡くると無し、地も亦決して盡くるとあらず、斯く天地の今古に涉りて長生久壽なるは、其所以なる可らず、其所以は他なし、自ら其生を求めざるに在るのみ、蓋し自ら其生を求むるときは、必然物を争ひ、或は物を害し或は物を奪ふて自ら利せんと欲するに至る、自ら利せんと欲すればこそ、自ら其生を害するに至るなれ、則ち天地の無心なるが如く、一點の私心なく、自然に従て、毫も自ら其生を求めざるときは、此患なきが故に知らず識らず長生する道理なるがかし、



是以聖人後其身而身先、外其身而身存、非以其無私耶。故能成其私。

後其身とは、第六十七章に「不爲天下先」とある如く人を先にして、己れを後にするなり、身先とは、其身を後にするときは、天下の人、その謙徳を慕ひて、推戴尊敬するを云ふ、第六十六章の「聖人欲先民。必以身後之。是以聖人處前而民不害。」と同旨なり、外は遺忘する意なり、外其身すとは、人に厚ふして、己れか身を薄ふするを云ふ、身存とは、其身安存して危亡の患なきを云ふ、聖人は己れを奉ずるを薄ふして、民を養ふこと厚きが故に、民も亦其君を愛するを父母を視るが如くに悦服せるを以て、其君の身常に安存す、私とは、自己の身を云ふ、邪曲の謂にあらす、非以其無私耶、故能成其私とは、聖人は、自己の幸福利益を謀らざるが故に、其結果は反て其身の福利安樂を成し得るとの意なり、蓋し當時の國君は之に反し、自ら奉ずると甚だ厚ふして、民を養ふと甚だ薄く、人民が重斂苛税に堪へずして、飢寒に泣くをも顧みず、己れ獨り錦繡を衣、豪華に飽くを以て、遂に積怨の符となりて其位を失ふに至るもの多し、(布哇の女帝の利己主義を濫用し暴政を行ひしが爲め、人民に放逐せられたるは輓近の一例なり)獨り國君のみならず、當時の社會は、利己害他の弊に堪へず、故に老子之を匡濟せんが爲めに、此言を發し、者の如し、夫れ道徳の主義も亦多し、兼愛主義、利己主義、利他主義等の説あり、而して通常利他主義を主張する説は人々我を忘れて、他を利するときは、世に争ひ無くして、天下自ら治るとの論なり、老子が主張する所の利他主義は、左にあらす、老子の説は、利他を主として、利己を得るとの論にて、頗る狡猾陰忍なる説なり、开は、利己の極は、唯他人の福利を害するのみならず、自己の福利をも并せて失ふが故に、自己の福利を忘れて、利他を主とし、以て自己の福利を得るに若かずとの旨意なり、然れども、利己主義も、必ずしも害あるものにあらす、利己主義を誤用すればこそ、老子が云ふが如き害もあるべけれども之れを正用するときは、大に世の福利を増進すべし、凡そ人の徳を養ひ身を脩むるは、(即ち明德)利己に非ずや、己れが徳を推して人に及ぼすは、(新民)愛他に非ずや、故に孔子の學は、利己に由て愛他を得、老子の學は、愛他に由て利己を得るものとす、此れ亦孔老の相反する要點なり、

上善若水章第八

上善若水。水善利萬物而不争。處衆人所惡。故幾於道矣。

善には、上下あり、大小あり、夫の仁義禮智の如きものは、善の小にして下なるものなり、何となれば、仁義禮智は、善を施すの意思あるに依り、物と争ひ、自然を害するとあればなり、上善は、最上至極の善にて之れと對峙するものなきを云ふ、即ち道と云ふに異ならず、夫れ水は天に在ては雨となり、露となり、霞となり、地に在ては、海となり川となり、谷となるのみならず、地中到處所、之れあらざるは無し、上善も亦斯の如し、而して宇宙の萬物、一として、水の徳澤に浴せざるものはあらず、實に水の萬物を利潤生育すると廣大にして、天下之と功を比すへきものなきを以て、物と功を争はず、凡そ人の智、僅に一職一官に堪へ、僅に一技一藝に止るものは、其恃む所、細小なるが故に、其功勞に矜り、他人か我か功を奪はんとを恐れ、常に人の功あるを忌みて之れと争へり、試に世の俗吏俗物の情態を見れば、其言の虚ならざるを証すべし、然れども、局量廣大にして、才能極めて高きものは、人と功を争はざるを、猶ほ水の如きなり、夫れ高きは、人の欲する所に於て、卑きは人の惡む所に於て、獨り水は高さを避けて、卑きに就けり、其功に矜らずして、物と争はざるの美德を見るへし、(故に老子は高官を辭して、微官に奉職せり)幾は近きなり、道は、萬物生々の根源にして、物皆之を恃んで、其生育を遂げざるは莫し、其有様を物に譬ふるに、火の炎上するに似ず、金の堅固なるに似ず、只其れ水は萬物を養育し生を遂げしめながら、其功に矜らず、謙退して人の謙惡する卑汚の地に就くは、正に道に似たりと謂ふへし、然れども水は、目に見るへし、手に掬すへし、故に其萬物を利する時、顯然たり、道は本來無形無象にして其生々の跡見る可らず、即ち道は無にして、水は有なり、此れ其相異なる所なり、有の功力の及ぶ所は、限りありて、有像の物の中に就ては、到らざる所なしと雖も、強て之を遮るものあらば、其功の及ばざる所あるへし、無に至ては、及ばざる所なく、到らざる所なく、之を遮らんとするも、遮る可らず、是れ有の無に及ばざる點なり、則ち水は道に同じと云ふ可らざるを以て、道に近しと云へるなり、

居善地。心善淵。與善仁。言善信。政善治。事善能。動善時。

此處は、水の徳を述べて、道を赫するの人、即ち君子の徳の水に同じとを云ふなり、







水を注ぎ置たすとを已りて、傾覆の患を避くるに如かず。端は治なり、又劍鏃を磨研して、極めて尖鋭ならしむるときは、必ず推刺して、長く保つ可らず。故に始めより鋭ならしめざるゝの愈れるに如かず、人の身を保持するも亦斯の如し、世の謂はゆる英雄豪傑及び文人才子の、常に身を全ふに保つとの稀なるは、刺刀の如く鋭とく尖りて、世に高ぶればこそ、人に惡み忌みられて、危地に至るなれ、故に功ある者は、功なきか如く才ある者は、才なきが如く、備ある者は、備なきが如く、収めて發せざることを、あらまはしかるべけれ。

金玉滿堂莫之能守富貴而驕自遺其咎功成身退天之道

咎は、禍災なり、金玉財寶を積み蓄へて堂に滿つるも、之を久しく守り保つとは、寔に難し、王公紳士の位地に在て、絶へて翼々の心なく、驕り恣まゝなるは、自ら其身に禍災を招くなり、現に殷の紂王は、賦税を厚ふして、金玉を鹿豎に滿たし、粟を鉅萬に盈たし、が、其身は遂に焚死せしに非ずや、其他富貴に慣れて驕侈の爲めに其身を喪ふの實例は、指屈するに違わらず、假ひ其身は、借倨勉勵して、富み鉅萬を重ねるも其子其孫に至るときは、必ず驕奢遊逸に流れ、顛覆を免るゝと能はず、「賈り家を唐様で書く三代目」と云へるは能く穿ちたるものと云ふ可し、乃ち子孫の爲めに美田を買ひ、金銭を遺すは、福祥を子孫に遺すに非ずして、禍咎を子孫に遺すものなり、故に身を富貴至危の位地に置くよりは、寧ろ退て安然なる卑賤の地に居るに如かず、夫れ人の功名富貴に戀々して、其身の災害に罹るを知らざるは、畢竟盈虚消息の理を知らざればなり試に天の自然の道、即ち四時の盈虚消息するを見よ、百花萬草を生出すは、春の功なり、其功成るときは、退て夏に讓れり、百卉萬木を大に長するは、夏の功なり、其功成るときは、退て秋に讓れり、萬木をして實を結ばしむるは、秋の功なり、其功成るときは、退て冬に讓れり、萬物をして藏守せしむは冬の功なり、其功成るときは、退て復た春に讓れり、凡て天下の事、この理に基づかざるものあらず、范蠡の湖に遊ひ、子房の山に歸るも、皆この理を悟れるものと云ふべし、と斯く功成り身退くは、天道の自然なれども、富貴尊榮は、人の欲するものにて、管相公其人の如き、賢良の質を以てすら、茲に戀々するの跡あり、况や陔伯の燔災に罹る如きは怪むに足らざるなり、凡そ人の終りを善くせざるものは、此理を真知せざるに因る、此理を真知せざればこそ、勇退の氣象に乏しけれ、

載營魄章第十

載營魄抱一能無離乎

載は乘なり、車の物を乗載するか如き意なり、古來載の字には、種々の説あれども、皆取るに足らず、甚しきは、載は前章「名遂身退」の退と同韻（去聲十一隊）なるを以て、「天之道」の下に在るへきを、誤て本章の首に入れりと云ふものあり、附會も亦甚しと云ふ可し營は、往來する貌なり時經小雅の「營々青蠅止于樊」の營、是れなり、又惑の義あり、淮南子原道訓の「精神亂營。不得須臾平」の營、是れなり、魄は、魂の魄にて、此二字は、相離るゝと能はざるものなり、魂は、形骸の中に存する所の神にして魄は形の用を司とるものなり、耳の聲を聴き、目の物を視、口の物を味ひ、鼻の臭を嗅き、四肢形骸の寒熱痒痒を感じるは、皆魄の所爲なり、斯く音聲等の外物と往來感動して止まざるものを、營魄とは云ふなり、載營魄とは、此營魄を乗せ負ひ居ると云ふに外ならず、一とは、道の事なり、蓋し道は、宇宙間處として物として在らざる無し、其物に存するものを性と爲す、砂糖の甘く、茶の苦く、薑の辛く、梅の酸く、兔の弱く、虎の勇なる等の如きは、皆性なり、就中人の性は、靈妙を極めて、其靈妙を名けて神と云ふ、神の純にして雜らざるものを一と云ひ、其聚りて散せざるものを模と云ふ、其歸する所は、道に外ならず、而して、聖人は性定りて、神凝るを以て、物の爲めに遷されず魄に據て舍を爲すと雖も、神の行はんと欲する所は、魄従はざる無し、神常に魄を載せり、衆人は、之に反し、神昏ふして物の爲めに性を役せられ、神反て魄の命を受け、鼻口は、臭味に勞し、耳目は、聲色に困み、魄の行はんと欲する所は、神之れに従ふ、故に魄常に神を載せり、是を以て、老子教を立て、神を抱て魄を載せ、兩者をして相離れざらしむ、

專氣致柔能嬰兒乎

專氣とは、氣を守て、散洩せざるなり、致は、極むるの意なり、夫れ嬰兒は、筋骨志氣俱に柔弱なるが、嗜欲少し、嗜欲少しか故に柔和の氣を害せず、又一方より云へば、嬰兒は、無我無心にして、其神を内に守り、其氣を外に散洩せざるが故に、外界の刺激の爲めに、感動を起さず、聲色の樂の爲めに、耳目を淫せ



滌除立覽能無疵乎。

凡そ道を學ぶものは、内能く和氣を守りて、之か散洩を防ぎ、志氣を極めて柔弱にして、嗜慾を省き、以て精神を養成するときは、嬰兒の無我無心なるか如き妙味を得て、道に造るへし、蘇子由云ふ、「神不治則氣亂。強者好闘。弱者喜畏。不自知也。神治則氣不妄作。喜怒各以其類。是之謂專氣。神虛之至也。氣實之始也。虛之極爲柔。實之極爲剛。純性而亡氣。是之謂致柔。嬰兒不知好惡。是以性全。性全而氣微。氣微而體柔。專氣致柔。如嬰兒一極矣。」

愛民治國能無爲乎。

愛民治國の術も亦多し、法律規則に一任して、邦圖の安寧を謀るもあり、仁義禮樂に頼て、人民の幸福を冀ふもあり、無爲にして自然に任せ、一毫作爲的の治術を須ひず、實を尙はす、賢を貴はす、欲す可きを示さず、民をして無知無欲ならしめ、由て以て天下をして自ら安然せしむるもあり、右の第一は、第二に如かず、第二は第三に如かず、第一第二は、民を愛するの意ありて、反て人民を賊害し、國家を擾亂するものとす、故に愛民治國の法は、果して能く無爲の道に叶へるや否やを反省熟慮するに在るのみ、

天門開闔能爲雌乎。

天門は、自然の門戸の意にて、治亂興廢の從て出る所なり、開闔は、開閉に同し、闔はヒラクと訓するともあれども、茲ではトツルと訓す、雌は、雌鳥が雄鳥の唱ふるに和するか如くなるを云ふ、夫れ天門開けは世治

明白四達能無知乎。

り、天門閉つれば世亂るものなり、天門の開閉未だ定めざる時、即ち革命の將に起らんとする際に當て、天下の先導者となりて、雄威の激論を主張するときは、必ず安全に其身を保つと能はず、故に雌鳥か雄鳥の唱ふるに從て和するか如く、先導者の龜尾に屬して事を爲すときは、安全に其身を保つを得るなり、唯安全に其身を保つを得るのみならず、或は意外の幸福を得ることあるべし、試に維新前を回顧せよ、賴三樹、佐久間象山、吉田松陰、橋本佐内等の如き革命の先導者は、幕府の毒刃に非命の死を遂けたれども、右等の先導者附和したる木戸等の如き者は、黄閣に麒麟を畫きたるに非ずや、凡そ事の先導者たるものは、決して其事を遂げ得るものにあらず、現今政黨内閣を主唱するも、亦然り、其説に附和する後生は他日或は内閣に列するものあらん、此等の議論は、西洋の文明論、及び東西の歴史に就て、之を徵せば、余が言の虛ならざるを證すべし、或は云ふ天門は精神の出入する所の源、即ち心なり、開闔は、動靜なりと、此説に據るも解すべからざるには非れど、穩當ならざるを覺ふ、

明白四達とは、宇宙の事理を洞見して、毫も通達せざる所なきを云ふ、無知とは宇宙の事理を知るも、自ら其知を忘るゝの謂なり、夫れ人の知は、明白四達なるも、其知を忘るゝに至らざれば、未だ道に造らざるものなり其知を忘るゝに至ればこそ真知なれ、則ち本文の義は、我に明白四達の知あるも、能く其知を忘れたるや否を反省する意なり、斯く説くは、通常の解釋なり、蘇子由の説に據るときは、一層精微なるを覺ふ、蘇子曰く、「内以治身。外以治國。至於臨變。莫不有道也。非明白四達而能之乎。明白四達。心也。是心無所不知。然而未嘗有能知之之心也。夫心一而已。苟又有知之者。則是二也。自一而二。蔽之所自生。而愚之所自始也。今夫鏡之于物。來而應之則已。又安得知應物者乎。本則無有。而以意加之。此妄之源也。」

生之蓄之。生而不有。爲而不恃。長而不宰。是謂立德。不有とは、功ありとせざるの謂なり、不恃とは、吾か智を恃んで手を添へざるを云ふ、不宰とは、種々の手段方法を施して、さうもりを爲さざるを云ふ、皆な自然に任すの意なり、夫れ道は、天地萬有を生し、之



を善ふとに於て、大自在力を有すと雖も、之を生ずるに心なく、無我無心にして、毫も其功ありとせず、況や吾か智ヲ恃んで、手を此間に添ふるとあらんや、又況んや、種々の手段方法を施して、宰理する所あらんや、斯くなればこそ、深玄至妙の徳とこそ云ふへけれ、人の一身を脩め、一家を齊へ、天下を治むるも、亦此の如く、私智私心を蕩滌し去りて、政略的の方便を用ふるとなく、自然に一任するときは玄妙の徳に契ふ可し、

三十輻章第十一

輻は、説文に輪輻也とあり、輪輻とは邦俗に云ふ、車の筋の事なり、古へは、月に象とりて輻の數を三十となしぬ、故に三十輻と云ふ、輻は説文に輻所湊也とあり、邦語にては、之れをコシキと唱ふ、三十の輻を皆中央なる轂に倅めて車の形をせり、故に三十輻共一轂と云ふ、其無は、轂の中心の虚無なるを云ふ、轂の中間、虚無にして軸を容る間隙のあれはこそ、車の基礎をなして其用を爲すなれ、人も亦虚無自然の道に違ふときは、人たるの根底を爲し萬事に應じて運用窮りなかるへし、世人は、有用の用を知りて、無用の用を知らざりしが、元來物は、無よりして有を生じ、虚よりして實の用あり、即ち有のあるは、有その物あるにわらずして、無の用に據るものとす、故に虚無は、物の根底なるを知るへし、以下數句も亦物を假り有は無あるに據て用する所以を説けり、

埴埴以爲器當其無有器之用

埴は、以然切、コチルと訓す、土を和くるとなり、埴は、粘土なり、キバツチと訓す、其無は、器の中の虚無なるを云ふ、粘土を埴合はして陶器を製造するも、其器の中の空虚なればこそ、能く物を入るゝを得て、器の用を爲すなれ、器物且つ然り、況や人に於てをや、

鑿戶闢以爲室當其無有室之用

戸は、人の出入する所なり、説文に云ふ、「半門曰戸」と闢はマドと訓す、明りを取る所なり、説文に云ふ、

「屬穿壁以木爲窓也。屬所以見日」と其無は、戸闢と室内の空虚なるを云ふ、凡そ家屋を作るに、戸口を開くを以て出入するを得、窓闢を鑿つを以て空氣を通し、光線を引くを得、室内も物なければ、住居するを得、孰れも其中心空虚にして障礙物なければこそ、室家の用を爲すなれ、物皆斯の如く、無の有を爲し、虚の實を生じ、無用の有用たることを知るへし、

故有之以爲利無之以爲用

故は、前節を承けて結ぶ詞なり、有は形のあるものを云ふ、即ち室なり、器なり、車なりは、皆有なり、此等の物は、人世必須の物にて、其利甚た大なりと雖も、其用を爲す所以のものは、其中に空虚虚缺あるを以てなり、儒し車の轂中に空窻虚缺なくは、輪轉運輸の用を爲さず、無用の長物たるのみ、室も器も亦然り、畢竟するに此三つ者は、其空虚即ち無か用を爲すなり、退は眼前の實例に過ぎざれども、凡て有無の關係は、此理の外に出でず、故に有之以爲利無之以爲用と云へり、歐洲の哲學者ピサゴラス云ふ、「凡て萬物は其性質に因りて知り得べきものにあらじ、其形状、廣狹、厚薄、遠近等の分量に因て知るを得へし、而して分量は數に因りて定るを以て、數の外に分量あらず、即ち數は萬物の根源なり、數を離れて別に形状なく、形状を離るれば、別に萬物なし、故に萬物は即ち數に外ならず、一は點にして、二は線なり、三は平面にして、四は立体、五は性質なり云々」と、此説は、未だ其根原を極めず、何んぞなれば、其第一の點の前に、空間即ち無のあるを知らざればなり、英國近世の哲學者チンドル氏が「空間は實に無限無極たり」と云へるは、老子の謂はゆる無の意味とは、少しく異なりと雖も、千古の確言なりと信ず、此處を論理學に據て正確に記するときは左の意味なり、

凡て物は、無の用に由るものなり、..... Proposition 1 (第一命題)  
有の利は、物の外に出でず、..... Proposition 2 (第二命題)  
故に有の利は、無の用に由るものなり、..... Conclusion (歸結)

五色章第十一

五色令人目盲五音令人耳聾五味令人口爽



五色は、青赤黄黒白なれども、都へて美麗なる色を云ふ、美人の如きは、其最なり、盲とは、目の精明を失ふを云ふ、莊子の謂はゆる「五色亂目。使目不明」是れなり、五音は、宮商角徵羽なれども、都へて面白き聲を云ふ、淨瑠璃、常盤津等も亦此中に包含す、聾とは、耳の聰明を失ふを云ふ、莊子の謂はゆる「五聲亂耳。使耳不聰」是れなり、五味は、鹹、酸、甘、苦、辛なれども、都へて美味の物を云ふ、爽は、タガフと訓す、口の用を爽失するを云ふ、莊子の謂はゆる「五味濁口。使口勵爽」是れなり、

本章は、慾を禁し、内を守るは、學問の根底なるを説きたるものなり、人若し嗜慾を恣にして、内を守るを能はざるときは、精神は外に馳せて、主人公を失ふに至り、甚しきは、爲めに國家をして顛覆せしむ、夫の足利尊氏か九洲に敗走する機に乗して追撃せば、之を勦絶し得るは、鏡に掛けて見るか如くなるに、渠れをして再燃せしむるものは、新田左中將か勾當内侍の色の美に目を盲し、補廷尉の諫をも用ゐず、出陣の機を失ふか爲めならずや、耳慾口慾も亦斯の如く、之を恣まゝにして、國を亡はし、家を喪ひ、身を全ふするを能はざるもの、數ふるに堪可ゆらず、

馳騁田獵。令人心發狂。難得之貨。令人行妨。

發狂とは、精神を紊亂して、性情の常度を失ふを云ふ、難得之貨とは、第三章の謂はゆる金銀珠玉珍奇の物を云ふ、妨は、害ひ傷るの謂なり、山野を馳騁して鳥獸を田獵するは、快は則ち快なりと雖も、之に耽り溺るゝときは、心性を狂亂して其常度を失はしむ、古來王公貴人か、田獵を事とし、國政を顧みざるか爲めに邦國を顛覆するもの枚擧するに堪へず、現今にても華族紳士の中に於て、遊獵に耽りて王家の輔佐たる本分を忘るゝもの無さを保せず、夫れ世に紛擾を生し、人ど人との間に在ては、權利義務の争ひを起し、終には法廷を煩はすに至り、國と國との間に在ては、權義を干戈に訴へ、無辜の生靈をして槍烟の際に枉死せしむるに至るものは、抑や何の故なるや、畢竟するに、互に得難き貨、即ち金銀珠玉珍奇の物を得んと欲するが爲めならずや、實に人の行爲をして妨害あらしむるものは、之れに過ぐるものは非るなり、故に道に志すものは、常に此等の物を遠けて玩ふ可らず、

是以聖人爲腹不爲目。故去彼取此。

爲腹とは、猶ほ内を守り治むと云ふか如し、蓋し腹は五臟を藏し、精神の居る處にして、耳目等に對すれば内なり、故に氣を靜かにして、精神を内に守るを腹を爲すと云ふなり、不爲目とは、猶ほ外を務めすと云ふか如し、蓋し外慾を吾か胸腹に惹き來る媒介を爲すは、目を以て其最とす、故に目は、腹に對して外の義と爲す、彼とは、諸般の外物、即ち目を指す、此とは、吾か精神、即ち腹を指す、夫れ人の五色五音五味及び得難き貨等の慾に惹かれて精神を紊され、性情を失ふものは、畢竟するに内を棄て、外に走るを以てなり、但聖人は内を主として外を末とするか故に、精神常に内を守りて、外に走らず、然れども、聖人なればとて、五色五音五味の物を、絶對的に遠けて近けざるにわらず、此等の物來りて我に接するも、内に守る所あるを以て、誘惑されざるのみ、

寵辱若驚。貴大患若身。

寵は、爵祿なり、威權あるを云ふ、即ち高貴の事なり、辱は、其反對にて、卑賤の事なり、故に寵辱は、榮枯禍福と云ふか如し、驚は、狂疾の名なり、古來字義の如くオドロクと訓すれども、其れにては上の若の字解し難し、王註は、若驚の意に解すれども、甚だ妥當ならず、蘇子由は若驚非實驚也。若驚而已と註せり、斯く解くときは、稍々穩かなるを覺ふ、驚を狂疾の名と看るも二様に解するを得へし、其第一説は、今世人を見るに、徒に名利の末に奔り、寵榮を得れば、手の舞ひ足の踏む所を知らざる程に喜悅すると狂人の如し、又寵榮を失ひ鄙辱に遇ふときは、憂悶顛倒すると狂人に異ならずとの意なり、其第二説は、此れを古の達人の事とし、辱を寵の客字として輕視す、古の達人は、寵榮富貴を發狂人を視るが如くに嫌惡せりとこの意なり、太思は、即ち上の寵榮の事なり、蓋し寵榮富貴の裏面には、大辱大患の存するを以てなり、此句も亦二様に解するを得へし、其第一説は、世人は、此大患たる寵榮を貴重すると、恰も我身を愛するか如しとの意なり、其第二説は、亦此れを古の達人の事とす、此れは倒語にて、貴身若大患と書きたるに同じ、其意は、古の達人は、我か身を貴ふと、猶ほ小人か大患たる寵榮を貴ふか如しとの意なり、右の如く此二句は二様に解するを得れども、第二説の解し易さに従ふに如かず、第二説に據りて解くときは、此二句を古語



と爲し、是より以下は、此古説の解釋と視ざる可らず、蘇子由云ふ「古之達人驚寵如驚辱。知寵之爲辱先也。貴身如貴大患。知身之爲患本也。是以遺寵而辱不及。忘身而患不至。」  
何謂寵辱苦驚寵爲上辱爲下得之若驚失之若驚是謂寵辱若驚

古語に於て「寵辱若驚」と云ふは如何なる故なるぞ、  
開は寵辱禍福は纏へる繩の如く、謂はゆる塞王か馬にて、右方に福あれば、左方に禍を伏す、上面に寵來れば、下面に辱來る、(故に寵爲上辱爲下と云ふ)斯く寵辱禍福は、一正一反して、相離れざるを以て、古の達人は、榮華利達を得るも、狂疾を視るが如く嫌惡し、又之れを失ふも狂疾を視るが如く嫌惡す、寵もなく、辱も亦く、香も薰せず、屈も發らざるを貴へり、此れ前節第二説に據て解釋するものなり、前節第一説に據て説かは左の如し、夫れ寵辱は、兩物にわらず辱は寵に生し、寵は辱に生するものなるに、世人は此理を悟らず、寵を以て上と爲し、辱を以て下と爲し、唯々寵榮富貴を得んとを愛へ、既に之を得れば失はんを恐る、故に之を得るも失ふも、顛倒失措するを恰も狂するか如しとの意なり、

何謂貴大患若身吾所以有大患者爲吾有身及吾無身吾有何患

有身の有は、重く見よ、吾が物として執着する意にて、有身と讀むべし、列子楊朱篇の謂はゆる「身非我有也」の有是なり、世人は、吾が身を以て己れの物と思ふが故に、二六時中吾が一身の私利奉養の爲めに汲々し、功名利達に戀々し、寵榮富貴に眩惑するを以て、寵榮却て、殃を醸し、大患を生ずるに至りぬ、古來才子の身を過り、國君の位を失ふは、皆吾が一身の私利奉養を計るに原因せざるは莫かりき、故に吾所以有大患者、爲吾有身と云へり、無は上の有の反對にて、無身と讀む、吾が物と思はぬ意なり、即ち公平にして、一點の私念なきときは、吾が身は、宇宙の一部分にして、吾が物にわらず、天下公用の物の如く想ふに至るなるべし、斯の如く、公平無私なるときは毫も寵榮富貴に執着するとなし、業に已に寵榮富貴に執着せざるときは、畜害の來るへ門なく、安穩に身を保つべし、故に及吾無身、吾有何患と云へり、  
故貴以身爲天下者則可寄天下愛以身爲天下者乃可託天下

此處の、諸本異同あり、句讀も亦各同しからず、諸説皆取るに足らず、獨り林希逸の説、信を措くに近し、其説に曰く「知其真身之可貴。知其真身之可愛。雖得天下不足易之。人能知之。則可以寄託於天下之上矣。」今此説に據て訓點を施すと雖も、「寄託於天下之上矣」の意を探らず、凡そ我が一身を重んぜざるものは、利に趨るを以て、大事を任す可らず、乃ち眞に一身を重んずる者は、一點の私念なきを以て天下國家を寄託すべし、寵榮功名を以て、一身の畜害を招かざるものこと、眞に一身を愛するものなれ、天下國家は、必ず斯の如き者に寄託せざる可らず、決して才智に富みたる人に任す可らず、舜禹の天下を有てども與らずと云ふか如きは、實に天下國家を寄託すべし其人なり、夫の論語の「令尹子文三仕爲令尹。無喜色。三已之。無愠色。」及び「可以託六尺之孤。可以寄百里之命。臨大節而不可奪也。君子人歟。君子人也。」と云ふか如きは次なり、  
要するに、老子の學旨は、先づ吾が身と云ふを忘れされは、必ず身の畜害を招くと云ふに在り、故に吾が身は天下の身の一部分と思惟して、吾身の執着を斷ち、至公無私なれば、吾が身安くして、天下も安し、是れ即ち眞に身を害するものにて、前の謂はゆる「後身而身先」是れなり、夫の揚朱の學問は、本と老子より出つと雖ども、その「不拔一毛爲天下」と云へる主義は、老子の説と正に相反するものとす、

規之不見章第十四

視之不見名曰夷聽之不聞名曰希搏之不得名曰微此三者不可致詰故混而爲一

視は、意思を用ひて物を見る意なり、見ば、ミユルと訓す、物來りて我が目に入る意なり、聽も意思を用ひて、音聲を聴く意なり、聞は、キコユと訓す、音聲來りて我が耳に入る意なり、故に視聽は重くして、見聞は輕し、之は、道の本體を指す、夷は、タヒラと訓す、漠然無色の謂なり、希は、マレと訓す、第四十一章の「大音希聲」の希にて、寂然無聲の謂なり、搏は、ツカムと訓す、握持するを云ふ、微は、カスカと訓す、微細玄妙にして、執ふへき形なきを云ふ、致は、極むる意なり、詰は、ツメルと訓す、責問する意なり、前章に於て



塵々道体の巨大にして虚無なる所以、及び其妙用の極り無き所以を説きしか、本章は、職として道を認識する點より立論して、大道の躰は、虚にして、聲色名相の表に超ゆるを説けり、夫れ道は、宇宙到る處あらざるなく、天地萬物一として之に由らざるは無けれども、形体ある物質にあらざる、故に之を視んと欲するも見えず、之を聴かんと欲するも聞えず、之を執らへんと欲するも、執ふるを得ず、斯く道は、采色の眼に入るへきものなれば、黑白赤青等の區別もなく、一樣に平かなるを以て、之を夷と名けり、又はその寂然として音聲の聴くへきもの無き點よりしては、希と名けり、又之れを握持せんとするも、杳漠として形なく、手に觸るゝもの無き處よりしては、微と名けり、吾人の認識する能はざる道体を形容して、暫く夷希微の三名を附したれども、其實此三つの者は、吟味極詰して道に就かんとするも能はざるものとす、則ち「不可思議」の一點に歸着せざるを得ず、故に混而爲一と云へり、仍は講義の充分ならざる所あるを覺ふ、因て蘇子由の説を左に掲げて之を補ふ、蘇子由云ふ「視之而見者、色也。所以見色者不可見也。聽之而聞者、聲也。所以聞聲者不可聞也。搏之而得者、觸也。所以得觸者不可得也。此三者、雖智者莫能詰也。要必混而歸于一而可耳。一者、性也。三者、性之用也。人始有性、而已及其與物構、然後分裂四出、爲視爲聽爲觸。日用而不不知、反其本、非復混而爲一。則日遠矣。云々」と、

其上不皦其下不昧、繩々不可名、復歸於無物。是謂無狀之狀。無物之象。是謂惚恍。

其は道を指も、其上其下は、易の謂はゆる「形而上、形而下」と云ふか如し、皦は、明かなり、昧は、暗きなり、繩々、長くして絶へざる貌、即ち道の萬古不朽なるを形容したるものなり、惚恍は、ホル、と訓する字にて、心かボツトして、物の有無が判然せざるとなり、夫れ道の形而上に屬するもの、即ち聲も無く臭も無き處は、靈妙にして皦かならず、但道の形而下に屬するもの、即ち電氣、磁石、蒸氣、熱及び光等の作用の如きは、其理味からざるを以て、人智に據て探究するを得ると雖も、道体に至ては、萬古に亘りて、繩々として名狀すへからず、口之れを言ふ可らず、目之れを視る可らざれば、無物に歸せざるを得ず、則ち單に

無と言はんとするも、天地山川等はこれに由りて其形を現はせり、則ち有と言はんとするも、微妙虚靈にして摸捉端倪す可らず、故に道体を指して、無狀の狀と云ひ、又無物の象と云へり、這は、實に形なきもの、形を生し、物なきもの、物を生し、漠として其有無判明ならざるを以て、更に又之れを惚恍と云へり、

迎之不見其首、隨之不見其後、執古之道以御今之有、以知古始是謂道紀。

今之有とは、今日の萬有と云ふ意にて、萬般の世事なり、即ち一日萬機の政と云ふか如し、紀とは、オホツナと訓する字にて、之れを引かば、衆目の舉がるものなり、道体の大本大綱を名けて道紀と云へり、前節に詳述し、か如く、道は有無の間に惚恍するを以て、之を迎へて見んとするも、道の由て來る所の首始を認む可らず、又之に隨て、其終後を見んと欲するも、見る可らず、斯く道は、始めもなく、終りもなく、形もなく、名もなければ、萬物の宗源たるは、今古相異ならざるに因り、古の無爲なる道を執て、今の煩雜なる世を統御すへし、則ち太古は遠しと雖も、古始の道は、今の世に居るも、亦以て知るを得へし、故に是れを名けて道紀とは云ふなり、夫れ道は、虚無なりと雖も、無の中には、有も亦自ら存するものとす、老子の主義に據て之を實際に施すは、只心を清くして欲を寡くし、公平無私を以て、事を處理するに在るのみ、漢の文帝か天下を治るは、職ら之れに是れ由れり、然れども、夫の西晋の儒者の如く、手を袖にして、何の爲すとも無く、放逸に流るゝ若きは、老子を誤讀したるものと謂ふ可し、王通か晋儒を評して、「清虚長而晋室亂」と云ひしは虚言にあらざる也、因て老子の論する所を推究すれば、漫に進取を主張し、事の善惡を問はず、西洋風を輸入する等を嫌惡すと云ふに外ならず、則ち「起一事、不減一事」と云ふ格言こそ、老子の旨に協ふと云ふ可けれ、

古之善爲士章第十五

古之善爲士者、微妙玄通、深不可識。

士は、人の善稱、聖徳を備ふる君子と云ふに同じ、即ち老子の道を得たる者なり、老子自ら云ふと見るも可なり、微妙玄通の四字を説くには、之れに對する論理學の Positive terms (實語格) を對示せば、細説せず



して自ら明瞭なるへし、微は顯の反對にして、カスカと訓す、顯とは、富貴尊榮若くは虚名の赫々たるもの等を云ふ、微は之れに不非無等の字を冠するものなり、是れを虚語格即ち Negative terms と名く、妙は、粗と相對するものにてタへと訓す、粗とは、荒増にして、感心すべき甘味なきを云ふ、妙は其反對なり、玄は、白と相對するものにて、クロと訓す、白とは、著明にして深遠ならざるを云ふ、玄は其反對なり、通は、塞と相對するものにて、イキヌケと訓す、塞とは、事に物に差支ヘフサガリて、困却するを云ふ、通は其反對なり、孔子の爲人は、温良恭儉なりしか、老子風の善士は、少しく其趣を異にして微妙玄通の徳を備へて深遠なるか故に、他より其奥を測り識る可らず、

夫唯不可識。故強爲之容。豫兮若冬涉川。猶兮若畏四隣。儼兮其若容。涣兮若水之將釋。敦兮其若樸。曠兮其若谷。渾兮其若濁。

豫は、固と獸名にて、象に似たるものなり、此獸は、智慮深くて輕操に進退せざる性を備へり、故に「戒而後動。追而後應」を豫と云ふ、猶は犬の子なり、犬の性は、畜以主と俱に路を往くにも主人を失ふを恐れ、前後を顧みて進行し、主人留まれば、亦留まるか如く、頗る用心深きものなり、故に猶は、逡回因循の意に用ふ、推して之を云へば、猶も豫も大差なし、故に事の延引するを猶豫と云へり、儼は、矜莊なる貌、渙は、解散する貌、敦は、篤厚なる貌、樸は、固と木材の未だ器を成さざるものなり、即ち質素にして飾りなきを云ふ、曠は、ムナシク、又はヒロシと訓す、度量の廣大なるを云ふ、渾は美惡混同の貌、前節に説きたるか如く、善士は、道徳深くして、測り識る可からざるか故に、其人がらを言ふは、寔に難けれど、強て之を形容すれば、其事を處する、扣目にして、輕操ならざるを、宛も豫の性質に似たり、其戒慎せる趣は、冬月に凍りたる川を渉るか如し、(或は云ふ、豫は、狐の冬川を渉る貌なり、狐の凍川を渉らんとするときは、耳を傾けて、凍下の水聲を聴き、水聲遠く聞ゆるときに非れば渉らず、蓋し水聲近く聞ゆるときは水薄く、遠く聞ゆるときは、水厚きを以てなり、故に初冬信州諷訪の凍湖を渉らんとするときは、水上に狐の足跡あるを確めて、然後涉れりと、此説も亦通す) 又善士の戒慎恐懼する様は、宛も犬の用心深くし

て路を往くに回顧遲疑するか如し、實に其眞神の内城を確守する状は、朝鮮か四隣の日支魯を畏るゝに似たり、其儼然として矜莊なる状は、束帶せる賓客に接するか如し、斯く嚴肅なる中に、寛容流暢にして、初春氷の將に釋けんとするか如く、固執澁滯せざるもの、存するあり、而して、其心は、敦厚にして、質樸なるを、猶は素木の飾りなきか如くなれども、其度量の廣大なるとは、猶は谷中の空虚にして、百物を受くるか如し、要するに其心廣大にして、世と相離れるに在り、故に自他彼我を混同して一と爲せり、捨も水の清濁を混合するが如く、己れも濁水となりて、獨り清水とならず、謂はゆる和光同塵是れなり、(豫分以下七句は二句つゝを以て、一聯と爲し、渾兮其若濁の一句を以て、上の三聯六句を總結するなり)

孰能濁以靜之徐清。孰能安以動之徐生。

此處は、上節結句の濁の字を承けて、孰能の二字を以て問を設けたる辭なり、世の俗士は、常に外物の爲めに心性を汨濁す、一旦心性を汨濁するときは、復た之を清すを知らず、又世の枯槁の士は、心の安きを得るが爲めに、世俗と交際を絶ちて、山林に獨居す、心安きの餘、心性死して復た生さず、乃ち孰れか能く濁郷に入りて、濁人と混居すと雖も、其本心靜かにして、獨り自ら徐かに清めるものなるが、孰れか能く其心性安靜にして、濁人と俱に活動すと雖も、獨り自ら徐かに心性生々活々として、毫も滅却せざるものなるが、此れ即ち老子の道徳を得たる上徳の善士なり、

夫れ人は、交際の動物なり、必ず人と相交らざるを得ず、夫の山林に隱居し、世と交際を絶つ如きは、天理に非るなり、蓋し人の濁世に居り、俗物と衣食を共にするは、動なり、陽なり、形體は、俗物と衣食を共にするも、其心性の安きは、靜なり、陰なり、抑天地未有の先は、虚にして無なれども、其中に一大太極の存するあり、一小事一小物も、亦斯の如く本來は虚無なれども、各其中に一小太極存しぬ、太極動きて、陽を生ず、動極りて靜となる、靜にして陰を生ず、靜極りて復た動に歸へる、一動一靜互に其根たるものなり、故に、陰に偏して世の交際を拒絶し、又陽に偏して心性の安きを顧みざるは、皆天理に非るなり、

保此道者不欲盈。夫惟不盈故能弊不新成。



此道は、老子の道。即ち「濁以靜之。安以動之」の道なり、弊は、古き意なり、不新成は、改易の無きなり、

此道を保つ者は、盈つるを欲せずして、虚なるを欲せり、虚にして無心なるときは、能く弊古にして改新せず、依々として舊の如し、莊子の謂はゆる神人は千歳を経るも、綽々として處女の如きの類是れなり、試に日月を見よ、虚にして無心なるを以て、千年前の日月も、今日の日月も、依々として改新せざるに非ずや人も亦斯の如く、自然の道に任して、改新作意の私智を去り、分に安んじて、足るを知るときは、體軀に疾病なく、安穩に身を保つを得るなり、

本章、消、生、盈、成の四字は、八庚の韻を歩めり、

致虚極章第十六

致虚極守静篤。萬物並作。吾以觀其復。

致は、推し窮むるの意なり、大學の「格物致知」の致、是れなり、作は、オコルと訓す、萬物の發生するを云ふ、詩經の「微作」の作、是れなり、復は、靜即ち無の初めに返へるとなり、必しも易の復の卦の復と同視せず、

人能く六根の欲を去り、私智を離るるときは、道の本体たる空虚の理を推し窮むるを得へし、空虚の理を推し窮めて極處に到るときは、心の本然たる靜を守ると甚た篤かるへし、(周子が無極と云ひ、明道の冲莫無朕など云ふも、爰に云ふ所の虚に外ならず)、夫れ宇宙森羅萬象の發生して、生々止まざるは、動なり、動く者は、必ず本初の靜に復らざるを得ず、是れ生者必滅の道理にて、喜怒哀樂の色に作るは、春夏に萬物を發生すると同じく、動くの時なり、喜怒哀樂の内に收るは、秋冬に萬物を收藏すると同じく、靜の時なり、凡て宇宙の事物、動くを極るときは、必ず、本初の靜即ち無に復へるものとす、故に萬物並作吾以觀其復と云へり推して之を論するときは、戰爭は動の極なるを以て、安靜に復る基ひたるを知るべし、現今支那か文明退歩し、萎靡振はす、草賊各處に起るも、未だ大亂に至らざればこそ、周代文明の安靜に復へるを能はざるなれ、

全乃ち覺羅氏の天下を観るに、頗る衰運に属せり、李鴻章か棺を蓋ふて、數年を経過せば、十八省必ず四分五裂し、十四五年も、戰爭大亂を極めたる後大に安靜に復へり、遂には歐米の文明を壓倒するに至ると信ぜり、本邦も戊辰及び西南の大役微りせば、豈に今日の文明を見るを得んや、歐洲の諺に「戰爭は開化の一里塚」と云へるは、社會氣運上の哲理を穿ちたるものと謂ふ可し、

夫物芸々。各復歸其根。歸根曰靜。是謂復命。復命曰常。

芸々は、繁茂生長する貌、復命は、天の命する所の性に復するを云ふ、即ち萬物の天より受けし性の本に復ると、恰も君命を受けて、使に往き、其命を君に復へすか如き意なり、常とは永久變せざるの謂なり、

百花は春日に驕れども、必ず風雨に遇ふて木下に落ち、本の土となれり、凡て天地の萬物は、皆斯の如く芸々として並ひ生ずれども、未は各其根本の靜に復歸せざるものあらじ、人も亦物に接し、事に觸れて、喜怒哀樂起れども、遂には其根本の性に返へるものとす、其靜々名けて復命とは云へり、復命は、永久變るをなきを以て、常と名けぬ、夫れ性は尚ほ狀すへけれども、命は性の妙なるを以て、口之を言ふ可からず、故に易にも「窮理盡性。以至乎命」と云へる如く、聖人の道を學ぶには、理を窮るに始り、性を盡くすに中し復命に終るものとす、宋儒の説に據て、之を論するときは、窮理とは、仁義禮樂等の然る所以の理を窮むるを云ふ、洋學の謂ゆる窮理、即ち電氣、空氣、磁石等の理を窮むるは、窮氣と云ふ可きものにて、眞の窮理にはあらざる也、盡性とは、外物の爲めに蔽はれず、其性湛然、勉めすして中り、思はずして得、物至りて能く應ずるの謂なり、然れども、此れ尙ほ吾か性を、我かもの爲すを免かれず、即ち之を天の命に寄せて、復命するに至ては、毫も物我の隔離あらざるなり、便ち命は、道の本然なり、動極りて靜なるを、本然の命に復へると云ふへければ、靜と命とは分ち難けれども、靜は動に對する辭にして、命は、絶對的名なり、  
知常曰明。不知常。妄作凶。知常容。容乃公。公乃王。王乃天。天乃道。道乃久。没身不殆。

萬物の根に歸するは、永久不易の常道なることを知るに於ては、必らず萬有の本性の虚靜なるを明かに觀念



すへし。故に知<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>と云へり、之に反し、永久不易の常道を知らざる時は、凡て事を爲すに、虚静の理に由らずして、妄りに作し、名利色欲等に溺れ、遂には禍を招き性命をも害するに至るへし、故に不知<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>、妄作<sup>レ</sup>凶<sup>レ</sup>と云ふ、乃ち永久不易の常道を知るときは、其心量の廣大なるを、天地と同一なるを以て、我か心中に萬物を包容して、毫も物を欲視せず、故に知<sup>レ</sup>常<sup>レ</sup>と云ふ、其心廣大にして萬物を包容するときは、其心公平無私にして、彼我の別を立てず、故に容<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>と云ふ、其心公平無私なるときは、乃ち王者の心なり、故に公<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>と云ふ、抑も王者の心は、天下四海を一家となし、率土の濱の賤民まで、凍餒の艱苦を免れしめんと思へり、然ども此處の王は、人爵の上に就て説かず、天爵の上に就て説くものとす、假ひ身は匹夫たりども、其心の貴さと、王者の心と同一なるとき、王と謂へし、其徳か王者の心と同一なるときは、天徳の普及するに均し、其徳か天と合するに至るときは、乃ち虚静の道を得たるものと謂ふへし、故に王<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>、天<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>と云ふ、道は乃ち恒久不易にして、終始變せざるを以て、人能く此虚無の道を身に具ふるときは、畢生其心洋々として、身も亦危殆を免るへし、何んとなれば、虚無の物たる、水火も害を加ふるに處なく、蛇蝎蜂蟻も噬齧するに物なければなり、人の事物に接するも亦斯の如く、我が心虚静にして、一點の物なきときは、易の謂はゆる「震<sup>レ</sup>驚<sup>レ</sup>百里<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>喪<sup>レ</sup>匕<sup>レ</sup>鬯<sup>レ</sup>」の勇氣を得るあり、我心に喜怒哀惡の滿つるあればこそ、外物來りて我を犯すなれ、故に「道<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>久<sup>レ</sup>没<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>殆<sup>レ</sup>」と云へり、

太上章第十七

太上天下不知有之

太上は、猶ほ最上人と云ふかことし、即ち人の最上なる大聖人を云ふ、一説に、太上は太古なりと、余は此説に従はず、之は、最上人を指す、太上即ち大聖人の天下國家を治むるは、天地の化育に於けるが如く、自然の道に循て、毫も作爲の痕なく、謂ゆる無爲なるを以て、下民は大に其徳を蒙りながら、之れ有るを知らず、堯舜の民が環壤鼓腹の樂を爲せども、其上に堯舜あるを知らざるは、頗る之に近し、

古本には知の上<sup>レ</sup>に不<sup>レ</sup>の字なし、蘇子由之れに註を下して曰く「以<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup>育<sup>レ</sup>天下<sup>レ</sup>而未<sup>レ</sup>嘗<sup>レ</sup>治<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>。民不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>其所<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>。故亦有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>而已<sup>レ</sup>」と、斯く説くときは、不<sup>レ</sup>の字なきも、亦解すへし、仍ほ其意を敷衍して講せしは、最上人の世を治むるは、無爲にして、施政の觀るべき迹なく、謂はゆる不言の教へ、即ち天地の化育と一般なるを以て、人民は、何故に天下か斯の如く善く治るかを知らず、只上に天子あるを知るのみ、是れ猶ほ人類萬物が、運轉せる地球の上に生息しなから、只地球あるを知るのみにて、自ら地球の運轉するを知らざるか如きなり、抑も西洋の自由論、及び自治説は、老子の無爲主義より一變し來るもの、如し、

其次親之譽之

其次は、太上より一等卑き君なり、太上の君は、無爲の道、不言の教を以て、天下を化するが故に、下民其化を知らざれども、是より一等卑きもの、即ち其次に當る君は、仁義の教を敷きて、萬民を懐くるが故に、兒子の父母に於けるか如く、天下の者、大に之を親みて、其徳を譽めざるものは無かりき、开は畢竟其功徳の赫々たるものあるを以てなり、則ち老子の目より、孔子流の學問を視るときは、第二等に位する學問と謂はざるを得ず、

其次畏之

其次は、第三章に當るものなり、又下りて第三等に位する君は、其身に仁義の徳なき故に、道徳を以て人民を心服せしむるを能はず、迺ち精密なる法律規則を設け、以て善を勧め、惡を懲らし、に因り、人民己むを得ず、之に畏服せり、五霸、漢武及び獨乙流の國家主義、頗る之に類せり、昔者鄭の子産か死に臨て、其子大叔に謂て曰く、我死せば、子必ず政を爲さん、唯徳あるものは能く寛を以て民を服す、其次は、猛に若くはなしと、夫れ火は烈なり、民望て之を畏る、故に死するもの鮮し、之に反して、水は懦弱なり、民狎れて之を翫ふときは多く死す、故に寛は難しと、第二に位する君は、子産が謂はゆる火烈なり、

其次侮之



更に又下りて第四等に位する最劣等の君は、精密なる法律制度すら設定するを能はず、漫に權謀智術に任じ、安排寛容的政策を以て、天下を統治せんと欲せり、故に人民は、管其智術に服せざるのみならず、之を侮蔑玩弄して、毫も其命令を奉せず、竟に國家をして紛々擾々、の慘境に陥らしむ、洋の東西を問はず、時の古今を論せず、其國を興ふものは、多くは茲に基けり、されは、第二等以上に當る徳なきもの常路するときは、子産の言の如く嚴密なる法律制度を設定し、火烈的の政を爲すに若かさる也、

信不足焉。有不信焉。此處は、「其次侮之」の原因を説きたるものなり、上の信は、人君は屬して死字なり、下の信は、人民に屬して活字なり、

人民の人君を侮蔑玩弄し、狎れて其命令を奉せざるに至るものは、何故なるぞ、开は己れか誠信足らずして徒らに方略を以て、天下を壓服せしめんとすればこそ、人民信服せずして、之を侮るに至るなれ、權弓に云ふ、「有虞氏は、未だ信を民に施さずして、民之れを信ず、夏后氏は、未だ教を民に施さずして、民之れを敬ふ、殷人誓を作して、民始めて畔き、周人會を作して、民始めて疑ふ」と、嗚呼三千年前周代の會盟すら、上下互に疑心を生ずる歎況や今日公正證書等を以て、契約を結ぶに至ては、誠信の足らざるを想ふ可きなり、

悠兮其賞言。功成事遂。百姓皆謂我自然。

此處は、「太上不知有之」の原因結果を述べたるものなり、悠兮は、寛容にして迫らざる貌、其賞言は、言を大切に以て、妄りに發言せざる意にて、法律規則等を煩はしく發布せざるを云ふ、太上即ち大聖人の天下國家を治るは、悠兮として言を重んじ、數、法律規則を出すとなく、人民の自由任に任かすか故に、天下の萬民悉く己れか性分のまゝを爲し、男は耕し、女は織るか如く、農商各其職業上に於て、功成り事遂げ、家々足り、人々給り、皞々として自得す、斯く好果を結ぶも、人皆大聖人徳化の然らしむる所なるを知らず、一に我か天性自然に然るものなりと謂へり、

要するに、本章は、上古大聖人の徳化を頌し、叔世世道の大に衰ふるを歎し、以て世人に計略的の業務を爲すことを戒め、自然の道に依るべきことを示すなり、

大道章第十八

大道廢有仁義

此語は、瞥見すれば、頗る妄言なるか如くなれども、決して然らず、謂はゆる「世亂忠臣見。家衰孝子見」と同一の語氣なり、蓋し上古無爲の大道、世に行はれし時は、風俗厚くして、人心正し、仁を以て、救郵すへき窮民なく、義を以て、矯正すへき惡人も無ければ、仁義てふの名目あらざりしが、世漸く降りて、無爲の大道廢れ、人々有爲の事を爲し、風俗漸く薄く、人心漸く暴くなり行くに従て、窮民惡人益々増加す、是に於て乎、始めて仁義てふの名目を立て、社會を維持するとはなりぬ、現に本朝も應神天皇の時、論語柳めて渡りて、仁義の名目を知りし以來は、却て仁義の實少し、其以前は、仁義の名目は、知らざれども、人々仁義の實を有するもの多かりき、夫の大石良雄も、其主人に事變あればこそ、忠臣てふの名を得たるなれ、則ち世に忠臣の出るは、世の幸福にあらざる也、故に唐の魏徵も、嘗て太宗に對て「使臣爲良臣勿レ使爲忠臣」と云へり、此れと同じく仁義てふの名目は、已むを得ず、社會に現出したる末教にして、社會の不幸と云はざるを得ず、要するに老子の旨意は、末教を逐ふて、本根の無爲の教を忘る可らずと云ふに在るのみ、

我か國學は、別に道と名くへきものは無けれども、國學者か上古の事蹟を研究するを事とするは、神國上古質樸の美風を欣慕するものにて、自ら老子無爲の教と附合するもの、如し、而して此處の論理を推して、之を論するときは、「仁義廢有法律。法律廢有政略」と云ふを得るなり、其理は、下節を見れば、自ら明瞭なるべし、

慧智出有大僞

上古は、上下とも樸質にして、僞りを爲すもの無かりしか、世漸く降るに及んで上たる者、智慧術數を以て



世を統御し、故を、下も亦智術を以て之に應し、竟に欺偽虚誕なる行を爲すに至りぬ、蓋し智慧術數には必ず私欲の付き纏ふものにて、誠實少し、誠實少くして、私欲を帯びたる智略を用ひて、民間の隠れたる事を許さ、微なるものを微ひ、毛を吹き疵を索めて、精密なる法則を布くときは、人民其精密なる法則を倒に利用して、詐偽の材料となす、故に法則愈精密なれば、人民の詐偽も亦愈精密なり、司法省の犯罪表を見るに文字を知る者、即ち教育を受けたる者に、反て犯罪人多くして、文字を知らざる者、即ち曾て教育を受けざる者に、反て犯罪人少なし、又其罪質を檢するに、詐欺取財最も多きに居れり、此れ教育の智育のみに傾きて、徳育の欠缺する結果なりと信ず、教育に従事する者は大に心を用ひざる可けんや、然れども爰に云ふ所の大偽は、必ずしも刑法上の詐欺にあらず、所謂民法上の詐欺にて、人の無筆を奇貨として、已れに便利多き様に、證文若くは委任狀の文字を書き入るゝの類を云ふ、抑偽の字と欺の字との區別は、南華經正釋の講義に譲り茲に略す、

六親不和有孝慈

六親は、父子兄弟夫婦なり、

一家六親團樂して、和合するときは、固より不孝の子、不慈の親あるには非れども、彼は孝子だとか、彼は慈親だとか云ふ名目は、決して起らざるなり、六親の和合せざるに及んで、始て孝慈の名目起るものとす、例へば、堯も禹湯も文武も、孔子か七十の門弟も、聖人若くは聖門の者にあれば、不孝不慈の人なきは論を俟たず、然るに孝を稱するときは、必ず舜と閔子騫を稱するは、繼母の故を以て、六親の和合せざるが爲めならずや、世に傳ふる數多の孝子の碑文を見るに、皆繼父繼母若くは極貧等の不孝に遭遇せざるものはあらず、

國家昏亂有忠臣

此處の事は、第一節に於て、大石良雄の事を引きを説きたるか如く、國家太平無事なる時も、忠臣なきにはあらずれども、著るく忠臣と名づく可きものあらずや、國家昏亂するに及んで、始て忠臣てふの名著は

絶聖棄智第十九

絶聖棄智民利百倍

龍逢比干は、桀紂の昏亂に値へはこそ、忠臣の名を得たるなれ、伊尹周公は、湯武の明君に遭へはこそ、其名を得ざるなれ、此論理を推言するときは、社會の人、悉く善人なれば、善人の名起らず、世の人、皆學者なれば、學者の名起らず、即ち善惡是非等は彼是を比較區分するの名に過ぎず、故に老子の主義は、仁義忠臣孝子等の名目に戀々するよりは寧ろ之を棄て、太古の無名、無爲の道に據るに若かずと云ふに在り、

聖は、としと訓す、智の銳きものを云ふ、詩經の「謂予聖」の聖、是れなり、聖人の聖にあらず、智も亦智慧の智にて、道徳より出てたる聰明睿智の智にあらず、

農民は、耕作に拮据し、町人は商業に従事し、其他百工各その職に勉強するに於ては、天下自ら太平にして、別に聖智の必要あらざるなり、然るに、尙し施政者たる者か、質朴なる道徳の風儀を輕るんし、聖智伶俐を貴ひて、智育に傾くときは、兒童は心を聖智伶俐に走らして、些も道徳の貴ふべきを知らず、長するに及んでは、自己の本務を忘れて、一攫千金の利を得んとて、山師然たる事業を企て、爲めに産を破りて困窮を極む、困窮の餘は、公法を犯して、赭衣を穿ち懲役場裏の鬼となるに至る、嗚呼智育に傾く弊害も亦畏るべき哉、(前章に引きたる犯罪表を見れば此言の虚ならざるを信すべし) 故に天下國家を治るには、聖を絶ち智を棄て、毫も計略的の政を爲さず、無爲の道に據て、人民の自由に一任して教育するときは、馬鹿は馬鹿なりに、大切に其職業を守り、心安くして、身も亦穩かなるべし、諸れを聖智を用ふるものに比すれば、人民の利たるを百倍なり、

絶仁棄義民復孝慈

此處は、誤解し易き所なるを以て、須らく注目して見るへし、仁義は、仁義の形迹を指す、仁義の本體を云ふに非るなり、

孟子も「未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>仁<sub>ニ</sub>而遺<sub>ス</sub>其親<sub>者</sub>也。未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>義<sub>ニ</sub>而後<sub>ス</sub>其君<sub>者</sub>也。」と説く如く、仁義は即ち孝慈たる所以のも



絶巧棄利盜賊無有

のなれども、仁義の名世に著はるゝに及んては、皆々仁義の實の衰ふるのみならず、仁義の名を竊みて已れを利せんと欲し、内に私心を抱きながら、面には和氣を帯ひて仁に偽せ、内に鄙心を持ちながら、色に莊嚴を顯はして義を詐り、子にして親に違ふもの有り、親にして子を虐するもの有るに至りぬ、故に天下國家を治るには、無爲の道に據りて、仁を絶ち、義を棄て、詐偽の型と爲すへきもの無からしめば、人民各その性に具へたる孝慈に復へるへし、仍ほ裏面より之を説くときは、世に仁義てふの名あるときは、人々仁義の理屈を唱ふるか爲め、反て仁義の實を失ふて、孝慈を害むと云ふの意なり、

此三者以爲文不足

世苟くも道徳を顧みず、巧智巧言巧行を好みて、互に利を争ふときは、放僻邪侈至らざる所なく、擅欲詐欺至らざる所なし、其唆は盜賊を爲すに至るは、必然の勢なり、故に天下國を治るには、無爲の道に據り、巧を絶ち利を棄て、天下の氣風をして、純朴を守り、拙に安んじ、利を貪ると無からしめば、邪侈詐欺の行を爲す者なし、況や盜賊を爲すものあらんや、謂はゆる「不貴難得之貨、使民不爲盜」是れなり、西洋各國は、奢侈に走り、奇巧末利を事とする國柄でありながら、其能く邦國を維持するを得るは、畢竟耶穌教の道徳を以て、人心を收攬するを以てなり、該教旨の善惡は暫く擱き、其教へも亦西洋社會には大功ありと謂はざるを得ず、近世の支那も、頗る巧利を追ふの氣風日に長すれども、孔老莊佛の教、僅に存するを以て、人心を維持せり、印度は、佛教の根柢なれども、其教は漸く他國に占領されて、自國は反て其教漸く衰ふるを以て、其國も亦他國に占領さるゝに至り、此に由て之を觀れば、教法の如何を問はず、道徳は邦國の精神たるを知るへし、

聖智、仁義、巧利の三つの者は、徒らに文飾に流れ、朴質無爲の道を失ふを以て、天下國家を治むるに足らざるなり、一本には、文の下に、而の字あり、然るときは、文意最も解し易し、而の字なきも此字を入れて見ざる可らず

故令有所屬見素抱樸少私寡欲

屬は、心を付け寄するの意なり、見素は、虚飾を去りて、素樸を見はすを云ふ、抱樸は、本來性に抱く所の素樸を外に分散せしめざるを云ふ、少私は、私念を省きて、自營の計畫を減するを云ふ、寡欲は、嗜好を節して恬淡に反るを云ふ、

夫の三つの者は、用ふるに足らざるか故に、人民をして茲には心を注かしめず、別に心を付け寄する所あらしむもの四つあり、开は、人民をして虚飾を去りて、天性の素樸を見はしむる一也、天性の素樸を守りて之を分散せしめざる、二也、私念を省きて、山師然たる計畫を爲して、心を傷むると無からしむる、三也、百般の嗜好を節して、無爲恬淡の道に反らしむる、四也、

本章の要旨を撮言せば、聖智、仁義、巧利は、皆有爲の具にして、徒らに紛擾を増し、文飾愈進みて、正道愈退くのみならず人民に詐欺を教へて、犯罪に導くの教へなるを以て、天下國家を治むるには、智巧なる干渉を廢し、無爲素樸の本體に反へるに如かすと云ふに外ならず、

絶學無憂章第二十

絶學無憂唯之與阿相去幾何善與惡相去何若

學は、世俗に學ぶ所の學を云ふ、唯阿は、皆な應答の聲なり、但唯は、父母長者などの呼ぶとき、ハイとかハイとか速に恭しく答ふる聲なり、阿は、ハイイとか、ハイイとか、アーイとか、緩々不遜的に答ふる聲なり、世人は、善とか悪とか、仁とか義とかの區別より、種々様々の事を學問すれども、此等の事を學問し得るときは、己れを是とし、人を非として、争ひを生ずるのみならず、之を學ぶが爲に、心を勞し、神を傷り、氣を耗散して、生命を短縮ならしむ、(此れは極端論にて、信ず可らずと雖も、過度の勉學の身に害あるとは争ふ可らざる事實なり、昔者宋の文帝、晋の鐘繇か作れる千字文の濕損亂麻せるを奮に復せんと欲するも、其人なきに苦み居れり、折から時に梁の武帝請て之を得、此大手筆を煙滅に歸せんとを憂ひ、博學を以て世に聞へたる周興嗣をして、急に其欠損を補なばしむ、興嗣二夕間に編を成すと雖も、一夜の間に、鬢髮悉く白く



なりしと云ふ、中村敬宇先生も、嘗て自己履歴の千字文を作られ、爲めに頗る心を苦め、生命を促かされたるを覺ふ。故に世の所謂學問を絶廢するときは、心に少しも憂ふをなさを以て、自ら此形骸も長く保つとを得るなり、(王陽明か秦の始皇の書を燒くを贊稱し、達磨か不立文字の説を立てしは、各主論する所ありと雖も、絶學の旨意は、皆一なり、余は則ち此等の説は、皆文學を以て心神を養ふの道を知らざるものにて、取るに足らずと信す、然れども、今茲に反駁極論するの要なきを以て之を略す)世學は、人の呼ぶとき、唯も阿も同じ是れ應答の聲なれば、其相去ると幾何ぞや、但遲速の差のみなれば、少し遅ければとて、少し遅ければとて何事かある、此等毫末の事を争ふは、愚も甚しからずや、善惡も亦然り、世學は、善を貴ひて、惡を嫌へども、悟り來りれば、本來善惡なし、善惡は但比較上の假名に過ぎず、例へば、五十錢の品は、四十九錢の品より善なれども、五十一錢の品より惡し、左れば、善惡の相去ると何若ぞや、虛無無極の根原に復歸すれば、善惡等の鎖事は、研究するに足らざるなり、

人之所畏不可不畏

聖人は、公平無私にして、善惡を一視すれども、和光同塵の旨を主とせる故に、世人と俱に世に立たざるを得ず、既に世人と俱に世に立つ以上は、世人か畏るゝ所の法律規則の制裁等は、聖人も亦之を畏れり、夫れ公法は、知らざるを以て、其制裁を免る可らず、既に法律を畏るゝ以上は、之を知らざる可らず、則ち老子は、唯、禮に委しきのみならず、當時の法律をも研究せしと知るへし、(然るに世の漢學者は、迂にして法律の何物たるを知らざるもの多し、畢竟法律の畏るゝを知らざればこそ、心を茲に用ゐざるなれ)

荒兮其未央哉

荒は廣大の意、央は極め盡くるの意なり、老子も周の守藏室の小吏たるか如く、聖人も世の平々凡々たる者と肩を並へて、相交れども、其心の度量に至ては、善惡を同視し、有無を相兼ね、彼我を均一にす、是を以て、其心は廣大無量にして、極め盡す可らざるなり、衆人は我が好む所、我が惡む所に私して畛域を設くるを以て、下に説くか如く、聖人との差異を生ぜり、

衆人熙々如享太牢如春登臺我獨泊兮其未兆如嬰兒未孩乘々兮若無所歸

衆人は、常通一般の人なり、佛書所謂衆生、是れなり、熙々は、和樂の貌、太牢は、牛羊豚なり、泊は、アハシ、又シツカと訓す、水の淡泊にして、無心なるか如き貌、兆は、本と吉凶を下する時の、龜甲の垢の事にて、キザシと訓す、嬰兒は、和訓ミドリゴと云ふ、孩は、笑ふなり、乘々は、一本には、儼々に作れり、ブラ／＼する貌なり、

世味に溺れて、功名富貴等を以て、人間の最大幸福と思惟して、之を悦ぶと、熙々として太牢の饗應を享くるが如く、榮華利達等を樂めると、春の長閑なる日に、高臺へ登りて、遠方の美景を眺望するか如くに思へるは、常通一般の状態なりしが、我獨りは、世味に感ずると、淡泊にして、富貴の念毫も兆さること宛も未だ笑ふとも覺へざる嬰兒か好惡の情なきか如し、我は、富貴利達等に於ては浮雲の乘々として趣き歸する所なきか如く心を留めざるなり、(孔子は「不義而富且貴。於我如浮雲」と云へり、老子は、義不義を問はず富貴の事は、會て念頭に起らず、二番の大意は、略相同しけれども、頗る緩急の差あり、)衆人皆有餘而我獨若遺我愚人之心也哉沍々兮

遺は、忘るゝなり、沍々は、渾沌の沌にて、分別する所なき貌、智惠學問技術其他百般の事に於て、少しく得る所あれば、自ら以て餘りありと爲して、大自慢大天狗の面色を見はすは、天下衆人の状態なりしが、我獨りは、之れに反し、微妙玄通の大徳を具ふるとも、其徳を忘れたるが如く、之を色に見はさるるを以て、恰も愚人の沌々として分別心なきか如き趣をなせり、(所謂大賢似愚是れなり)

俗人昭々我獨若昏俗人察々我獨閤々澹兮其若海颺兮若無止



貌、脱文には、高風なり、又長風の貌なりとあり、

世の俗人は、富貴利達に汲々して、私智を過らすを以て、其外に發するもの昭々として明かなり、(昭々の中には、必ず禍の伏するを知らず)我獨りは、富貴利達を浮雲の如く思ひ、毫も心を茲に用ゐざる故を、其外發するもの昏きに似たり、(昏き中に明福存す)俗人は、萬事に心を付け、氣を配りて、目から鼻に抜け通る程に明察(此中に大禍伏す)あれども、我獨りは、物我を均一視するを以て、悶々として世事に迂暗なるを、宛り痴人の萬事に恍惚たるが如し、然れども、其中心を分拆し見れば、包量廣大にして、勢利に冷淡なるを、猶ほ大海の小流を遠はすして受くるが如し、又其度量の至大にして、津涯の知る可らざると、長風の颯として止る所無さか如し、

衆人皆有以而我獨頑且鄙。我獨異於人而貴。求食於母。

以は、用ふなり、母は、道と云ふに異ならず、道は萬物の母なるを以てなり、

世の衆人は、才智等を用ひて、富貴利達等を求むれども、我獨りは、富貴利達を求めざるを以て、人中に頭を下るとも無く、御世事を言ふとも無さか故に、頑固にして、鄙賤なるか如くに見ゆるなり、(其實は微妙玄通なり、西洋に心酔せる輕薄男兒か、我輩漢學者を目して、頑固とか、迂遠とか云ふも、頗る此に類す)世人は、道と忘れて、外間の名利に汲々すれども、我獨り聖人は、之に異なりて、萬物を脱遺し、道を以て宗と爲すと、嬰兒の雜食する所なく、専ら食を母に求むるが如し、

老子の文章は、概ね時賦の體の如く、同旨を反覆重言し、多く今の字を用ひて韻を踏めり、故に之を弦管に掛けて歌ふ可し、本章の未兆、未絃。若無所歸。若無所止。及び昭々察々等は、字は異なれども、其旨は大差なし、畢竟反覆嘆息するものを知るべし、

孔德之容章第二十一

孔德之容。惟道是從。

孔は、大なり、盛なり、又空虚の意あり、德は、得なり、道を己れに得るを徳と云ふ、道は見る可らざれども、徳は、自ら外に顯はるゝもとす、容は猶ほ様子と云ふか如し、

自然無爲の道を得有したる士は、瞥見すれば前章に説きたるか如く、昏々沌々として愚の如くなれども、其中に自ら孔徳の容の蔽ふ可らざるもの存するあり、开は其人は、世の塵事を抛棄して、常に惟道のみに従ふを以て、其道を心に得有し、自ら之を外に發するなり、

道の本体は、誠に説き難きものにて、之を得有したる人に非れば、知る能はざるものなれども、默々に付し去るときは、標準なきを以て、下節に於て強て之を形容せり、

道之爲物。惟恍惟惚。惚兮恍。恍兮惚。其中有象。恍兮惚。其中有物。

恍惚は、ボツトして、有るか無さか。有無の判明ならざるとなり、此二字を分ちて説くときは、古より恍は「有而似無」と註し、惚は「無而似有」と註しぬ、象、カタチと訓すれども、目に見へるのみにて、手に取る能はざる光色の類を云ふ、

孔徳の士に従へる道てふ物は、恍惚として、目之れを見るへからず、口之れを言ふ可らざれども、其中に象ありて萬有の本根を爲せり、(上は、太陽の光より、下は、水にたゞよふ浮草の花色に至るまで、道より出でざるものは無かりき)實に道は、彷彿として、有無判明せざれども、其中に物ありて、至大至剛の作用を爲せり、(天地の大より、昆蟲の微に至るまで、道の作用によりて生せざるは無し)

窈兮冥兮。其中有精。

窈冥は、シラッ、カスカと訓す、即ち深遠幽渺にして幾知すへからざるを云ふ、精はキツスイと訓す、一切の外物は、假物にて似せものなれども、精は谷神の本體にて、萬物の特有する所のものなり、茶の苦き性を有し、麥の辛き性を有するの類是れなり、佛書の所謂真如も亦精に外ならず、

道は、窈冥として測り知る可らざれども、其中に自ら精の存するあり、

其精甚眞。其中有信。

眞は、偽の反對にて、偽り無く有りの儘なるを云ふ、茶の苦き麥の辛きは、有りの儘にて、偽り無きものなり、信は、マコトありて違はざるを云ふ、去年の麥も辛ければ、今年の麥も辛さか如く、萬物の精は、萬世違はざるものとす、是れ即ち信なり、



道の精は、毫も偽り無く、眞實にして、其中に信の存するありて、永久遠はす、是を以て天地の萬有、其所

に安す、  
自古及今其名不去。以閱衆甫。吾何以知衆甫之狀哉。以此。

閱は、スブと訓す、總括の意なり、或は云ふ、閱は、稟なり、即ち萬物か道より命を稟るなりと、或は云ふ、閱は歴ふるなり具ふるなり、甫も亦古來三説あり、其第一説は、甫は、始なり、萬物の始を衆甫と云ふと説く、其第二説は、甫は父なり、萬有の父たる道を指して衆甫と云ふと説く、其第三説は、甫は美なり、故に衆甫は萬善萬美の意なりと説けり、

右第一説に據て説くときは、凡そ名は、形に因て下すものにて、マルキものは、圓と名け、卵の如く小長く圓きものは、楕圓と名け、四角なるものは、方と名け、細長く四角なるものは、長方形と名くれども、獨り道は、形なきを以て無名を道の名と爲しぬ、凡て形あるものは、年月を経れば廢去すれども、道は形なきを以て、天地未だ開けざる古より今日に至るまで、無名てふ名は、廢去することなく、萬物の始を總括して、萬物を生し出せり、夫れ萬物の始まる有様は、妙(衆妙の妙)なるものにて、寔に知り難し、吾れ如何にして其妙狀を知りしかなれば、只此理の無より生し無より始まるを知り得たるを以てなり、(故に此は、無即ち前の恍惚窈冥を指すなり)

右第二説に據て説くときは、星移り物變りて、古今の變遷窮り無しと雖も、道は萬古一日の如く會て絶へず、道てふ名は、一日も離れ去る可らずして、衆物の父となり、衆物は命を道に稟けて生々せり、吾れ何を以て道か衆物の父たるの狀を知るや、前に形容し述べたるを以て之を知れり、(此は、前の「道之爲物」より、其中有信」までを指す)

第三説に據て説くときは、古より今に至るまで、道てふ名は、常に存して去らず、實に此道は、衆妙の門と云ひし如く、萬善萬美を歴具したるものにて、種々様々の善美を露出せり、男女の和合に由りて、靈智ある人體を作製するより花の咲き、魚の躍り、鳥の飛ぶと等に至るまで、一として善美ならざるは無し、吾れ何を以て、爾き衆甫の狀を知るかなれば、道の中には、精あり信あるを以てなり、(末段は略第二説に同じ)

以上三説の取捨は、讀者の識見に委し、余取て之を專決せず、

曲則全 枉則直

曲則全 枉則直

本章は守柔避強の道を説きたるものなり、聖人の舉動は、理の在る所に循へるを以て、或は直、或は曲、或は枉にして、一に偏せず、只直にして其理にあらざるときは、眞直にあらす、其理に循ふときは、枉曲するも、眞直を失はず、若し夫れ直に偏し、剛直を守りて、屈せざるときは、必ず人に敵視せられ終に其身を全ふすると能はざるは、古今の史傳に徴するも明かなり、殊に本邦人に剛直を以て禍を招くの人多し、故に守柔避強を鄙とせず、身を曲枉して、人に従ふときは、安全に我が眞直を保つを得へし、夫の柳や竹か小雪を受るときは、必しも其枝幹を屈曲せされども大雪を受くるときは大に其枝幹を曲枉せり、然れども雪の解るに及んで其性の眞直に復する如きは、著き一例なり、尺椽の屈する、亦伸ひて直ならんか爲めなり、此れ所謂負て勝つ、即ち勝たざるを以て、勝つと爲すものなり、蓋し此主義を以て、世に處するときは、復た禍害に罹ると無かるへし、孔子が常に子路の剛直を戒められしも、亦此意に外ならず、然りと雖も、穢多士百姓に對しても、低頭屈從せよと云ふにあらす、必ず服從の道に由らざる可らず、子にして父に従ひ、臣にして君に従ひ、婦にして夫に従ひ、弟子にして師に従ひ、下官にして上官に従ふ等は、服從の著名なるものにて、徹頭徹尾服從せざる可らずと雖も同等同輩の者に對しては、守柔避強を主として交るのみ、敵以下の者に對しては、柳竹の小雪を受くるか如くにしてこそ可なれ(則全は、「則得全」の略語、則直は、「則得直」略語と見るへし)

窪則盈 弊則新

弊は、舊なり、弊るものは、必ず舊し、故に舊きの意起るなり、

河海は、地面か窪く下さ故に、水常に盈ちて盡さざるなり、人も亦斯の如く、六根の欲を去り、心を虚にして謙たるときは、谷神常に腹に盈ちて、終始道を離れざるへし、又夫の日月は、舊に依りて、日々其態を改めされはこそ、其光り常に新たなれ、人も亦斯の如く、舊道を守りて、之れと終始するときは、古射神人か、



千歳の術を經るも、其姿は練々然として處女の如くなる趣を爲すべし、故に詩經にも、周麟<sup>二</sup>魯邦<sup>一</sup>其命維新<sup>三</sup>と云へり、當時世の痴人は、漢學を陳腐視して、非常に西洋學を貴へども渠れか陳腐視する所のものは、其實は日新の學なるを知らざるなり、西洋學こそ日腐の學と云ふ過言にあらざるなれ、何んとなれば新發明の學問起るときは先の發明は陳腐に歸するを以てなり、現に近くは、電氣燈の發明ありてより、瓦斯燈の發明は陳腐に歸するに非ずや、  
少則得多則惑

道は、無爲自然に在るか故に、人爲に成れる學問等を爲すと少きときは、其天性を得るなり、人爲的の學問を爲すと多きときは、心に惑ひを生じて、他岐に入り、支離に流れ、遂に其天性を失ふに至るものとす、夫れ西洋學は、人爲的に成るものなれども、之を學ぶ、固より其益なきにあらず、然ども甚だ多く之を學ぶときは、僻洋愛他の心を生じ、竟に自國の貴きを忘れて、賣國の端緒をも發くに至るへし、夫の考證學の如きも、必ずしも費時無益の學問にはわらざれども、二六時中陳腐紙の穿鑿のみに從事するときは、世教を害し、邦國の美跡をも廢滅するか如き考證を爲すに至るへし、此れ猶ほ肉類雞卵は、滋養の功ありと雖も、之を多食するときは、反て腸胃を傷るか如し、

以上六句は、蓋し古語ならん、  
是以聖人抱一爲天下式

一には二個の意味あり、一は、數の最も少きものにて、多きは對する辭なるを以て、少き意を有する一なり、又一は、數の起る所なる故を、原因即ち天性の意を含める、二なり、式は、則なり、手本と云ふか如し、前節に云へる如く、雜博にして多きを貪るときは、惑ひを生ずる故を、聖人は單一無爲なる自己の天性を抱て、天下萬民の手本となれり、則ち華士族平民各單一なる自己の天性を守り、分て安せば、天下復た非圖を企るもの無かるへし、

不自見故明不自是故彰

目は、自分の目を見ず、故に能く物を見るの性を有す、鏡も自己の鏡面を照さず、故に能く物を照し、如く、

聖人は自ら其美を見はすして、深く包めるか故に、其美自ら天下に明かなり、自ら其是を是とせずして、之を蓋ふか故に、其是自ら世に彰るゝなり、

不自伐故有功不自矜故長夫惟不爭故天下莫能與之爭

聖人は、我れに功あるも、之れ無きか如く、毫も自ら伐らざる故を、其功愈彰はる、又我れに才能あるも、自ら之を矜らざるを以て、他より嫉み等を享くるとなきか故に、其才能長く保ちぬ、以上四個の不自は、要するに無我にして、自他の區別を立てざるものなり、夫れ世の紛争は、彼我自他の區別を立つればこそ、起るなれ、聖人は無我にして伐矜の心なく、會て人の相手とならざるを以て、人も亦我れと争ふと莫きなり、古之所謂曲則全者豈虛言哉誠全而歸之

本章首句に述べたる、古の所謂己れを曲けて、人に從へば、全ふして、事を損せざるは、眞實の語にて、豈に虛言ならんや、誠に其言の如くするときは、身全ふして、天性自然の道に歸へるを得るなり、夫れ屈伸往來は、天地至妙の哲理なり、易繫辭傳にも、「往者屈、來者伸、尺蠖之屈、以求伸也、龍蛇之蟄、以存身也」と云へり、本章の所謂曲、枉、窪、蔽、も之を縮言せば、屈に外ならず、曲の全を得、枉の直を得、窪の盈を得、蔽の新を得るは、即ち伸なり、則ち屈するを知らずして、初より伸んと欲する者は、伸ると能はずして、大屈を以て終るものとす、士族の商法家か、山師然たる冒險的の事業を企圖し、忽然失敗して破産の制裁を受けるに至るは、皆屈伸の哲理を知らざるに因るのみ、

希言自然章第二十三

希言自然

希言は、猶ほ寡言と云ふか如し、蘇子由云ふ、「言出子自然、則簡而中、非其自然而強言之、煩而難信矣。故曰、道之出口淡乎其無味、視之不足見、聽之不足聞、用之不可既、此之謂希言矣。」と蓋し聖人の言は寡希渾厚にして、無爲自然の道に協へると、恰も寒暑來往の其序を錯まざるが如し、世の多言にして、雄辯流るゝが如きものは、唯繁冗厭ふべきのみならず、無爲自然の道に乖戾せり、



飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者。天地。天地尙不能久而況于人乎。

飄風は、ツチカセと云へる暴風なり、又之を飄風とも云へり、凡て剛暴過激なる事は、久しきに耐ゆるものにあらず、飄風も永くは吹かず、朝を終へずして吹き止み、驟雨も一日は續きて降らず、必ず速に止むものなり、(暴に立身し、及び暴に倒る、は此理なり) 抑此飄風驟雨を起すは、孰れの所爲なるや、這は天地が陰陽の序を失はしめたる強暴なり、天地すら強暴にして、自然の道に遠ふときは、久しきに耐ゆるを能はず、況や剛暴過激の人にして、安んず永く其身を保つを得んや、則ち守柔避剛は、自然の道なるを知るへし、故從事於道者、同於道。德者同於德。失者同於失。

德は、得と同じ、古は徳得相通用す、是より以下は、二様に解すへし、其第一説は、人君徳化の功用を説きたるものとす、

凡て人君の行爲は、善惡を論せず推及するものなれば、最懼るべきものなり、人君たるものが、自然の道に従事すれば、天下の人民も、亦同じく自然の道に従事す、人君が天性を得れば、人民も亦天性を得、(堯舜の民は、「比屋可封是なり、) 人君が天性を失へば、人民も亦天性を失ふ、(桀紂の民は、「比屋可誅是なり、)

其第二説は、聖人の心術行爲を説きたるものとす、蓋し禍福得喪の來るは、皆由て來る所ありて、人爲の如何ともすべきものにあらざるを以て、聖人は禍福得喪の來るに任せて、敢て之に逆はざるなり、故に自然の道に従事する者は、百般の行爲、皆な道に同ふして、毫厘も道に遠ふこと無し、我若し幸福を得れば、得るに任せて之に同意し、又幸福を失ふも、失ふに任せて、敢て憂と爲さず、

同於道者。道亦樂得之。同於德者。德亦樂得之。同於失者。失亦樂得之。

此處第一説の旨意は、同氣相求め、同聲相應するの旨意にて、樂得之の得は相親しむの意なり、人君たる者が、萬事自然の道に同ふして、之を行ふときは、天下の道を行ふ者も、亦互に相親しむを樂めるを以て、人君が天性を得れば、世の天性を得る者も、亦互に相親しむを樂みて相聚まれり、(堯舜の朝には善人多き所以なり) 之に反し、人君たる者が天性を失ふときは、世の天性を失ふも、亦相親しむを樂みて相聚れり、(桀紂の朝には惡人多き所以なり)

第二説は聖人の行止得失、皆自然の道に同ふして、敢て逆らばざるを云ふ、自然の道に合同一致する者は、斯道を得るを以て樂みと爲せり、則ち我が身は禍福得喪と合同一致するを以て、幸福を得るときは、之を樂み又之を失ふも、亦之を樂めり、

信不足焉。有不信焉。

第一説に據りて説くときは、人君たる者が自然の道に戻り天性に背きて、誠信足らざるときは、人民必ず上を信せずして疑を生じ、天下亂るゝに至るべし、

第二説は、聖人が禍福得喪の來るに應じ、敢て其心を動かさざるは、自然の道に信するの厚きに因るなり然るに斯道を信するを足らざるときは、禍福往來の變に應ずる能はざるべし、這は畢竟斯道を信するを厚からざる所なればなり、

以上兩説の當否は、讀者の取捨に一任し、余敢て之を專決せず、

跛者不立章第二十四

企者不立。跨者不行。

企は、跂と同じ、踵を擧げ、爪先にて立つを云ふ、跨は大またを張るを云ふ

凡そ道を行く、自然に任せて怠らす進まは、千里の遠きも至るべし、然るに、牛歩の遅きを厭ひ、足を企て、疾く進まんとするときは、立つ能はずして倒るゝなり、又跨を一杯に張りて速進せんとするときは、寸歩も行くと能はざるなり、人の功名富貴を貪り躁き進まんと欲するも亦斯の如きのみ、乃ち自然の道は、漸進緩歩怠らざるに在るを知るべし、

自見者不明。自是者不彰。自伐者無功。自矜者不長。其在道也。曰餘食贅行。

餘食は食ひ残りの食なり、贅はダマと訓す、行は、形と同じ、古へは、行形は、相通す、大行山を大形山と記するが如きは、其一例なり、又行は其字の如くオコナフの意と見るも亦通す、



功消滅す、自分の善に於る者は、其善長く保たず、斯く自負する者を、老子の目より視るときは、殘餘の食糞汚る身形に異ならず、殘餘の食は、美味なるも、穢物なり、糞汚る身形は、多肉なるも、無用の長物なり、人の身に美あり、功あり、善あるも、自負するときは、餘食糞行に同じ、

物或惡之故有道者不處

物は猶ほ人と云ふが如し、一説に云ふ、物は物情なり、人情と云ふに同じと、或は、誰れたるを決せざる辭なり、之は餘食糞行の者を指す、

餘食糞行の者は、人或は惡み嫌ふものもあらん、(或の字は、綿裏に針を包むの意あり)故に自然の道を有する者は、かゝる行には身を處ざるなり、

頭を回らして、社會慈徳萬の人を看み、誰れか能く餘食糞行を脱するものぞ、余は未だ其人を見ずと雖も、彼れ此れより輕きは之れあり、要するに自見、自是、自伐自矜すると愈々多ければ、不明、不彰、無行、不長の結果も亦愈多きものと知るべし、

有物混成章第二十五

有物混成先天地生寂兮寥兮獨立而不改周行而不殆可以爲天下母

混成は、混一して萬殊に分れざるを云ふ、寂兮は、聲なき貌、寥兮は、形なき貌、獨立とは、廓然として對偶なきを云ふ、不改とは古今常に一なるを云ふ、周行とは、行き渡りて在らざる所なきを云ふ、不殆とは、所在に流通して窮置せざるを云ふ、

爰に二物あり、其物たる圓にあらず、方にあらず、其形渾然として混成し、有るか如く、無きか如くにして確かに之を解知するを得ずと雖も、萬物は此物より生し出てざるは莫し、爾き混然たる一物は、天地の未だあらざる先きより生し、寂兮として聲の聞かへき無く、寥兮として形の見るへきもの無けれども、常久獨立して之れと對偶するもの無く千古其体を變改せず、天地萬象を周行して、曾て危窮せず、森羅萬象を化育發生すると、恰も母の子を生むに同じ、

吾不知其名字之曰道爲之名曰大

名は元來形狀模樣に因て付くるものなり、五方形の城壁を五稜角と名け、水類を流動体と云ふか如き、是なり、字は、只人の呼び唱へるまでのものにて、其文字には、毫も意義無きものなり、大野太衛と唱ふるも太衛の意義を取りたるにあらず、只他の人と區別する爲めに設けたる符調のみ、然るに後世にては、大野直嶽、字子醇號雲潭稱太衛など記し、如く通稱の外に、別に字を附くれども、本來は、通稱なる太衛こそ眞の字なれ、故に呼び唱ふるの意なり、乃ち精一とか、貫一とか、友輔とか、堂々たる意義ある文字を通稱に附くるは誤りなるを知るべし、諡即ち戒名の如きは、其人の行爲に由て、意義ある文字を附くが至當なる、故に太衛も亡父の遺命に因て、子にして父を諱するの嫌を避く、亡父の戒名を尙武齊弓馬托身居士と名けたりき、

天下の母とされる奇怪の一物は、形なければ、吾れ其名を何んぞ云ふへきを知らず、然れども、森羅萬象一物として是れに由らざるもの無きを以て、暫く之を字で道と曰ふ、道は萬物の由る所にして廣大なるを以て又強て之を名けて、大と曰ふなり、

大曰逝逝曰遠遠曰反

逝は行なり、道の周行普遍なるを云ふ、遠は、普遍の窮らざるを云ふ、反は、盡きんとして、復た始に反り無より有を生し、有より無を生するの意なり此れ皆道体の妙を形容したるものなり、既に道を名けて大と曰ふも、未だ周行普遍の意を盡くさず、故に又之を名つけて逝と曰ふ、逝と曰ふも、未だ普遍の窮らざるを形容するに足らず、故に、又之を名つけて遠と曰ふ、遠と曰ふときは、遠きに及ぶのみにて、本始に反へるを忘るゝの嫌あり、故に又之を名けて、反と曰ふなり、

故道大天大地大王亦大域中有四大而王居其一焉人法地地法天天法道道法自然

亦是、モマタども、略マタども唱ふる如くヤハリと云ふ意味なり、人は天地に比すれば頗る小なるを以て、王



も亦大と云へるなり、域中<sup>○</sup>は、宇宙間又は全世界と云ふか如し、法は則なり、ノットルと訓す、違はざるの意なり、

故に道は固より大なり、天も地も皆大なり、王は世に二人なく之れに匹稱するもの無きを以て王も亦大なりと云はざるを得ず、道、天、地、及び王の四大の外、世に大とし尊ふべきもの無し、實に此四大中に王も亦其一に居れば、王たるものは、尊敬せざる可らず、王も亦自重自愛せざる可らず、凡て人は、地の宜しさに則りて、違ふ可らず、孔子が宋に在ては章甫を冠り、禹が裸國に入て相ぬきし如きは是れなり、故に西洋に往くときは、洋服も着せざる可らず、印度に往くときは、裸體にもならざる可らず、易に於て時と位の宜しさに隨ふを主とするも、此意に外ならず、春夏に天か樹木の芽を生せんとするときは、地これを枯らすと能はず、秋冬に天か樹葉を、落さんとするときは、地これを止むると能はず、此れ地の天に則りて違はざるなり、天は道の儘にして、毫も私を容るゝと無し、此れ天の道に則りて違はざるなり、而して道は、萬物の自然に従ふものとす、自然とは、如何なるものなるが、最も知り易き事に就て云はゞ水の流るゝも自然なり、火の燃ゆるも自然なり、魚の游くも自然なり、鳥の飛ぶも自然なり、蘭梅等に香氣あるも自然なり、道は、自然の儘にして、別に意を加ふるものに非ず、此れ道の自然に則りて違はざるなり、故に人は地に若かず、地は天に若かず、天は道に若かず、道は自然に若かず、是を以て宇宙の事物、自然より貴きものはあらじ、此れ老子の常に自然を主張する所以なり、

仍は自然<sup>○</sup>。Naturalの深旨を一層明かにせんには之れと對當する人為<sup>○</sup>。Artificial 當然<sup>○</sup>。Conquaeatinal 當然<sup>○</sup>。Accidentalの意を對説せざる可らず、例へば、園中の菊に、水をも灌がす、土をも培はす、捨置きたるに意外に美花を發したるは偶然なり、(世の暴富者、及び虚譽を得たる者等は、皆此種に屬せり)、其菊根に土を培ひ、水を灌ぎ、雨除日蔽其他百般の培養術を施して、然後美花を發したるは、人事の當然なり、(因果の説に由て凡百の苦業を積みて、名僧となりたるか如き、是なり)、梅樹を密に入れ暖を興へて、嚴寒の冬日に、美花を發せしむるは、純然たる人為なり、(仁義の説を以て、強て人の道徳を作るか如き是なり)、百花の春日に花さき、楓の秋日に紅葉を呈するは、即ち自然なり、老子は、緊しく人為を惡み、偶然を忌みて、自然を根據とし、當然に心を注げり、故に六十四章にも「輔<sup>○</sup>萬物之自然<sup>○</sup>」と云へる如く、人事の當然を盡くして、その物の自然を全くするを主眼とす、即ち麥の冬生て夏熟し、稻の春生て秋熟するを得せしむるが如きを名けて無爲自然の道と云へり、(雲潭は則ち仁義を人為視せず、是れには、大に説われども、茲に贅せず)、

重爲輕根章第二十六

重爲輕根、靜爲躁君。

本章は、重靜を貴んで、輕躁を戒めたるものなり、凡て重きものは、輕きもの、根本と爲り、靜かなるものは、喧躁なるもの、主君たるへし、試に見よ、草木の枝葉は、根底に比すれば、頗る輕ければこそ毎年零落すれども、草木の根底は、枝葉に比すれば、甚だ重ければこそ、長く存して枝葉の根底となるなれ、人君若くは宰相たる者は、沈重にして威嚴を持し、其心靜かにして、動かればこそ、煩擾喧躁の衝に當りて、善く之を鎮定するを得るなれ、

本章を前章の「人法<sup>○</sup>地<sup>○</sup>」の句より生し來ると見るも亦通すへし、凡そ天下の至重、天下の至靜は、地に如くものはあらじ、而して萬物一として地より出てざるものなく、又地に飯へらざるもの無し、王者たるものは、茲に則りて、重きに居りて、輕きを制し、靜を守りて、躁かしきものを制するときは、地道の自然に協へるを以て、天下輕躁のもの、自ら收歛歸藏して、根の地に飯へる理なり、(凡そ喧躁を制するに、喧躁を以てするときは、倍<sup>○</sup>喧躁を増すのみ、故に天下の執權者たる者は、重靜以て喧躁を制するの法を知らざる可らず)、

是以聖人終日行不離輜重、雖有榮觀、燕處超然。

輜重は、武器兵器を積む車にて、甚だ重きものなるを以て、重靜の義に取れり、榮觀は美女美服美屋等の外物にして、人の心を動かし易きものなり、燕處は、安んじ居る意なり、超然は、高く飛び抜けて、上に居る意なり、

重靜は、人の根據なるを以て、聖人は、終日百般の行爲に於て、外物に動かされて、毫も輕躁の行ひを爲さず、輜重の重きか如き心の本然たる重靜を離れず、假ひ美女美服美屋の如き榮觀を見るを有りと雖も、少し



も心を動かすを無く、谷神を安宅として、燕處し、一切の外物の上に、超然として獨立せり、  
然るに、古來の註釋者は、右の如く説かず、左の如く説く者多し、

輜重は、行者の衣服器械を載する車を云ふ、榮觀は、壯觀奇觀即ち立派なる見物なり、聖人は、旅行の輕易なるにも似ず、貴重なるものを載する所の輜重の傍を離れず、假ひ奇觀壯遊の樂むべきものに遭ふも、爲めに其神を亂すと無く、安居沈靜して、事物の外に超然し、曾て重靜を失はず、斯く説くときは、輜重の意義を盡さるゝか如し、

奈何萬乘之主、而以身輕天下、輕則失根、躁則失君。

奈何が貴き萬乘の君主にして、其身を以て、輕がるしく人の先に出つ可けんや、輕がるしければ、根底の道を失ひて、衆を制する能はず、躁がしければ、君主たるの道を失ひて、臣下を御する能はず、  
右の如くは、通常讀老者の見解なりしが、此れにては、未だ以て老子を道德哲學者視するに足らず、因て之を哲學上より解するときは、身は血肉の身にわらず、佛氏の謂はゆる法身、即ち谷神と看する可らず、根も君も亦谷神なり、但辭を換ふるのみ、即ち萬乘の君たるものは、四大の一なるを以て、奈何が心を外物に走らして、大切の法身を天下より輕かるしく思ふ可けんや、若し輕躁にして、耳目口鼻等の欲の爲めに、心を動かすときは、根底たる谷神を失ふへし、

善行無敵述章第二十七

善行無敵述、善言無瑕譴、善計不籌策、善閉無關鍵、而不可開、善結無繩約、而不可解。

善は、自然に順ふの意、助も毫も私智の作爲を用ひざるを云ふ、敵は、車輪の通りたるあとなり、故に敵述は、行迹の赫然著明なるを云ふ、瑕は、玉の沾なり、譴は、責むるなり、答むるなり、籌策は、善の如き竹にて造り、此とりに用ふ、後世の十籌策に類するものなり、關鍵は、カンヌキと訓す、門を閉る木なり分て之を言は、關は、横に刺したる木にて、鍵は、堅に刺したる木なり、又カギとも訓する如く後世にては

金屬にて作りたるを通常とす、一本には、鍵を鍵に作れり、

凡そ人の行爲は、張九齡か詩にも「美服患人指、高明避神惡」とある如く、敵述の如く觀るべきものあるは、自然に従へる善行にあらざる也、冬にして通常の裘を衣、夏にして通常の葛を衣る如きは、自然に従へる行爲にて、毫も赫々たる所なければども金齒を入れ、金時計を下げ、其他奇異任侠の著行を爲すは、冬日に葛を衣夏日に裘を衣るか如く甚だ人の目に立つものとす、言語も亦自然の道に因り、言ふへくして言ひ、言ふへからずして黙し、是を是と言ひ、非を非と言ひて、敢て人に逆らはざるときは、瑕玷の、譴むべき無し、又自然の數理に精通するものは、十籌策等の器械を用ひざるも、胸算にて計算せり、自然の道に因て、門戸を閉つる者は、關鍵を用ひされども、開くへからず、何んとなれば、民皆其徳に化し、家々人を給足して、盜賊徘徊せされはなり、自然の道に因て、人と結託する者は、證書證文等の繩約を用ひされども、其契約は解くへからず、何となれば、人々互に道德信義を以て交際すればなり、

是以聖人常善救人、故無棄人。

常善は、自然に任して、何時も變ぜざるの意なり、  
聖人は、自然の道を體し、公平無私にして、愛憎好惡の心なく、賢愚彼我に畛域を立てず、一切平等にして何時も天性自然の善に順て、人を救助使用するか故に、天下に廢棄すべき人なかりき、例へば、體格は六七尺もある大男子なれども、何の技倆もなく、何の知識もなき人は、其人の天性自然に有し、腕力を使用して貨物の運搬等を爲さしめ、其他性の柔き者は、文官と爲し、性の剛なる者は武官と爲し、饒者は火を司らしめ、盲者は、樂を掌らしむるか如し、次節の謂はゆる善明是れなり

常善救物、故無棄物、是謂襲明。

襲は、因るなり、明は、人物の天性自然に具はりたる明智あるを云ふ、即ち人の長所なり、物に在て云ふときは、犬の夜を守り雞の晨を報するか如し、或は云ふ、襲明は明光の外に顯はるゝを襲ひ隠すを云ふ、猶ほ外套を衣て、內衣の美を蓋ふか如し、詩經の謂はゆる、「衣錦尚絀、是なり」と亦通す、



聖人は、唯々人を使用濟度せるのみならず、宇宙の萬物をも、それく救ひ用ひらるゝ故、廢棄すべきものなかりき。例へば金銀は、本來天下の無用物なれども、之を實用品の代理、即ち貨幣と爲して、天下に通用せしむるか如し、糞尿は、食物の消化し去りたる腐廢物なれども、之を利用して穀物類を培養せしむるか如し、斯く人物の明處に因るか故に、之を名けて發明とは云ふなり、  
或者の説に據て、之を説くときは、凡そ人を救ひ物を救ふの功、彰々として明かなるものは、天下皆之れを仰ぎ見れども、必ず一方に於て棄てらるゝあり、聖人が自然の道に従て、人物を救ふは、救はざるを以て救ふと爲せり、故に之を救ふの迹なく、其見るべき所を掩蔽し、人をして之を知らしめざるを以て發明と云へり、

故善人者不善人之師。不善人者善人之資。

資は、資本の資にて、助の意なり、取る義にあらざ、

世には、棄物なく、棄人なき故、善人か不善人の師範となるは、素より論を突たすと雖も、不善人も亦善人の善人たる資本となれり、若し世に孔子做せば、三千の徒弟も、君子とならず、世に釋迦做せば、五百の羅漢も、凡夫を以て終るへけれども、孔子や釋迦か之れが師となればこそ、三子と五百の尤物を出たすなれ而して、此反對を説かは、明智光秀の反逆は、豊臣秀吉が關白となるの資本となれり、足利尊氏の不忠は補正成の忠臣を著はす資本となれり、桀紂の暴戻は湯武か天下を得るの資本となれるか如く、天下には棄つべき人はあらざるなり、

不貴其師。不愛其資。雖智大迷。是謂要妙。

世人は、我が師と爲すべき善人は忌み避けて、之を貴んを知らず、又我が善を著はす資本と爲すべき不善人は、畏れ嫌ふて、之を愛するを知らず、此の如きは、如何なる智慧ありと雖も、迷惑せるものと謂ふ可し、故に善不善を問はず、其長所に就て、之を利用するを、簡要妙妙を待たるものとこそ謂ふべけれ、

智其雄章第二十八

知其雄守其雌爲天下谿。爲天下谿常德不離。復歸於嬰兒。

雄は、牡鳥にて、強き性質を有するを以て、剛強の義に取る、雌は、牝鳥にて、弱き性質を有するを以て、

柔弱の義に取る、谿はタニ訓する字にて、土地の低き處なるを以て、謙遜して高きに居らざる義に取るなり、

常德は、天より我に賦與したる自然の徳なり、此徳は、永久變せざるを以て常德とは云ふなり、

内には充分に剛雄なる勇氣を蓄養し、剛強の道を辯へ知りながら、外は極めて柔順温和にして、雌弱を守り、毫も人に向て高亢するを無く、身を天下の最も低下なる谿の如き處に置くべし、既に身を天下最抵の谿地に置くときは、常德を保ち得て、無欲なる嬰兒の如き本心に復歸するを得べし、

人或は云ふ、老子が表を柔らかに見せかけて、内に剛勇を持てとの旨意は、頗る意地悪き教へにて、恰も綿裏に針を包むか如しと、斯の如く見るときは、老子の教は、或は人をして姦智を養成せしむるの具となるべし、老子の趣意は、決して左にわらず、剛強の道を知りて、只管に剛強なるときは、身を保つ可らず、即ち

周易乾の用九の所謂「見群龍无首吉」の意なり、此周易の辭の深旨を知らんと欲せば、余か拙著朱子學に就て見るべし、

知其白守其黒爲天下式。爲天下式常德不忒。復歸於無極。

白は、明白の白にて、知識才能の明白なるを云ふ、黒は、白の反對なり、式は、ノリと訓す、手本の意なり、

無極は、天地未有の前に、形も無くして極り無き理あるを云ふ、儒書に於ては、此理を名けて太極と云ふ、列

子は、之を太易と云ふ、洋儒の所謂 Agnosticism 不可思議は、頗る之に近し、

人の世に在る、漫に我が才智を露はすときは、決して此身を保ち得るものに非ず、故に内には、充分に知識

を養ひ、才智を蓄ふるも、(知其白)外には毫も知識才能を顯はす、(守其黒)然るときは、天下の人の手本

となるべし、其身が天下の人の手本となる程なるときは、我が常德忒はすして、無極の本原に復歸するを得

べし、

知其榮守其辱爲天下谷。爲天下谷常德乃足。復歸於樸。

榮は、富貴榮華なり、辱は、榮の反對にて、貧賤汚辱なり、樸は、猶ほ天性と云ふか如し、樸は本來山に生

ずるべし、

六五



したる儘にて、毫も人為の功を加へずして萬善を備はるものなり、  
富貴榮華は、俗人の希ふ如く寔に樂むべきものなれども、終には、必ず禍を招くものなり、故に富貴榮華の  
樂むべきを知れども、之を辭して、貧賤汚辱を守り、天下下谷の位地に身を占むるに如かず、既に下谷の位  
地、即ち判任官とか、雇員とかに、身を托するときは、誰れも之を羨むとも無ければ、我心に苦慮するを無  
きを以て、常徳を具足して、本然の樸質に復歸するを得べし、

樸散則爲器。聖人用之。則爲官長。故大制不割。

大制は、大なる制度法律の意なり、不割は無跡と云ふに同じ、

山に生ずる所の木材が散るときは、或は梁となり、或は柱となり、或は棟となり、椽となり、其他百般の  
器となるか如く、萬善を具有する樸質即ち天理が散るときは、或は人となり、或は獸となり、或は鳥とな  
り或は魚となり、蟲となり、其萬殊の器となるものを、聖人が採りて、之を用ひらると、恰も官廳の長官か  
屬吏を使役するか如し、故に聖人が國を治め、家を齊へ、身を修むるの大なる制度は、混然として、一も痕  
跡の見るべきもの無し、亦和光同塵の旨意なり、

將欲取天下章第二十九

將欲取天下而爲之者。吾見其不得已。天下神器不可爲也。爲者敗之。執者失之。

神器は、神妙にして測る可らざる機器なるを云ふ、

天下を取らんと欲して、善行を爲すは、其欲心より起りたる僞詐の善行にして、毫も誠なきを以て、萬民心  
服せざる故也、天下を得ると能はず、假ひ天下を得るとあるも、王莽が漢を奪ふたるか如く、暫く得るとあ  
るも、忽ち失ふが故に、得ざるに同じ、凡て尋常一様の器物にても、非道不當の智力にては得へからず、况  
や天下の神器に於てをや、漢の高祖は、戰爭には、負け通したれども、終に天下を掌握し、西楚の項羽は、七  
十餘戰勝ち通したれども、終に天下を得る能はざるか如く、實に天下は、神妙不思議の器なるを以て、智力

腕力を執て、天下の事を爲すものは、必ず失敗を免るゝと能はず、這は、畢竟之れを自然に任かすを知らざ  
るを以てなり、蓋し聖人の天下を有つは、之を取るに非ず、萬物之れに歸し、已むを得ずして之を受くるな  
り、聖人の天下を治むるも、亦之を爲すに非ず、萬物の自然に因て、其害を除くのみ、若し強て天下を取ら  
んと欲し、強て天下を治めんと欲するときは、必ず之を遠くるとを得ざるものとす、

故物或行或隨。或响或吹。或強或贏。或載或隳。是以聖人去甚去奢去泰。

响は息を掛けて暖むるとにて、暖氣と云ふに同じ、吹は急に吹きて、さますとにて、寒氣と云ふに同じ、

此處は、物の自然に任かすと云ふなり、試に社會の現象を見よ、陰陽相薄し、高下相傾け、大小相使ひ、或  
は前に行くものあれば、或は其後に隨ふものあり、或は响して之を暖むるものあれば、或は吹きて之を冷す  
ものあり、或は益して之を強くするものあれば、或は損して之を弱くするものなり、或は此に載成するもの  
あれば、或は彼に墜毀するものあり、此れ物の自然にして、勢の免る能はざる所なり、(此有様は政事社會を  
最も甚しとす、是れ天下の神器なる所以なり)然るに、世の愚人は、私智を逞しくして、得とを務めり、故  
に禍を免るゝと能はず、唯々聖人は、天下自然の大勢に任して、自然の則に違はず、一分にても自然の則に  
過ぐるは甚なり、奢なり、泰なり、故に聖人は、此三つの者を去れり、(此三つの者は、事に依り物に依り、場  
所に依りて辭を異にするまでにて、其實は一なり、總へて自然の中庸を過ぐる行爲を云ふ)

以道佐人主章第三十

以道佐人主者。不以兵強天下。其事好還。

好還は、返報の意にて、善を爲せば善來り、惡を爲せば惡來るの謂なり、

無爲自然の大道を以て、人主を佐くる者は、漫に兵力を強くして、天下に強威するを務めず、何んとなれ  
は、天道は還を好むものにて、我若し兵力を奮ひて、人を害すれば、人も亦來りて我を害すればなり、強兵主  
義を主張し、假ひ一旦兵威を擅まゝにして、勝を制するも、必ず還報の來るは、古今の歴史に徴するも明か  
なり、本邦に在ては、木曾義仲、武田勝頼、今川義元、漢土に在ては、楚の靈王、齊の湣王、秦の始皇の如



六八  
き、皆一時は火の畑々たるか如き勢にて、他國を蹂躙せしか、或は直に其國を亡ぼし、或は禍を子孫に遺すに非ずや、

師之所處、荆棘生焉。大軍之後、必有凶年。

師旅を用ふる處は、農夫も耕作の業に就くと能はざるを以て、田地も荆棘を生じ、茫々たる曠野となるへし、又一方より云へば、殺氣勃々として起るときは、天地の和氣を傷ふか爲め、大軍の後には、必ず凶年の返報あるは、争ふ可らざる事實なり、凶年は、穀類の不作のみならず、疫病の如きも、其中に包含す、本邦昨年來物價の騰貴するは、征清大戰の返報なるへし、實に戰は逆徳、兵は凶器、慎まざる可けんや、

故善者果而已不敢以取強焉。

果は、斷決の意なり、

聖人も絶對的に兵を用ひざるにわらず、政徳を以て、綏服すると能はざる場合には、已むを得ず兵を假て之を果決せり、故に善く邦國を維持するものは、兵力を用ふれども、一時に果決して、亂を定むるまでにて、永く強兵の術を謀らず、

右は蘇吳兩氏の説に基きて、講し、ものなりしか、果の字を一層深く解するを得へし、果は名利色欲等に克ち果たすなり、即ち克己と云に異ならず、夫れ兵力の強きは、外強なるを以て、人と兵力の強を争ふときは、我れより弱きものに遇へば、勝ち得るも我れより強きものに遇ふときは、勝つと能はず、故に無爲の道を善くする者は、内部の欲に克ち果すの勇氣を養ひ、外部に於て敢て人と強を争ふとを爲さず、

果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕、果而不得已、果而勿強。

私の果斷を以て、一時の難を救ふも、其能に矜ると勿れ、其功に伐ると勿れ、其勢に驕ると勿れ、畢竟我が果斷の兵力を用ひたるは、好んで事を興すにわらず、已むを得ざるなり、一旦は兵力に依るも、決して強く兵威を奮ふと勿れ、夫の平氏が一時京師の難を濟ひたるは、果決に近けれども、其終ひに一族西海の魚腹に葬らるゝは、此の四勿の戒めを守ると能はざるを以てなり、

前節第二段の説に因て説くときは、矜伐驕強は、外部の競争なるに因り、我れ矜伐驕強を以て得意然たるも、我れより上手の矜伐驕強者に遭ふときは、得意然たると能はず、故に我か内部の欲心に克ち果て、我か才智に矜ると勿れ、我か功業に伐ると勿れ、我か富貴に驕ると勿れ、兵力を強くすると務ると勿れ、凡そ人の行爲は、已むを得れば則ち已めよ、已むを得ずして然後之を爲せとの趣意なり、

物壯則老、是謂非道、非道早已。

凡そ物壯んにして老いさるものはわらじ、殊に上文の矜伐驕強は氣か十分に、壯なるを以て、必ず老いて、終には亡ふるものとす、實に矜伐驕強は、凶器にして、道に非ず、既に道に非る以上は、早く之を已めて、内部の欲心に克ち果たし給へ、(本節の辭に據て見るときは、前二説も余か第二段の説、可なるか如し、)

夫佳兵章第三十一

夫佳兵者、不祥之器、物或惡之、故有道者不處。

佳は嘉と同じ、佳兵者は、戰爭を嘉し好む者と云ふ、一本には、之器の二字なければども、之れあるも文意に害なきを覺ふ、器は、形よりして下なるものを云ふ、物は人を指して云ふ、或の字は玩味して見るへし、戰爭を嘉し好みて、兵を用ふると愈巧なるものは、人の國を亡ぼし、人の生命を損すると愈多し、則ち爾は人は、不祥不吉の器なるを以て、人或は之を惡めり、或とは、佳兵不祥の人を惡まぬ者も有る可れども、或は之を惡む者もあらんどの意にて、眞綿で首を括るか如き語氣なり、斯く兵は、或人も惡めるか如く、殘忍不仁なるものなるか故に、有道の士は決して身を此に處かざるなり、

是以君子居則貴左、用兵則貴右、兵者不祥之器、非君子之器、不得已而用之、恬淡爲上、故不美也。若美必樂之、樂之者、是樂殺人也。夫樂殺人者、不可得志於天下矣。

恬は、シヅカと訓す、淡は、アワシと訓す、恬淡は無味冷淡にして、其事を好まざるを云ふ、

君子は平居事なき時は、陽なる左を貴へども、兵を用ふるときは、之に反し、陰なる右を貴へり、(凶禮を用



ふるなり、夫れ兵は、不祥の器にして、君子の用ふ可き器にあらす、已むを得ずして、之を用ふるときは、大舜の四凶を伐ち、禹の三苗を伐ち、湯武の桀紂を伐つか如く、唯兵事に熱望せざるのみならず、恬淡無味にして、之を悦はざるを最上と爲す、假ひ戦ふて勝つと雖も、之を美事と爲さず、夫の戦國の諸侯の如きは、戦勝を美事と爲して、之を樂めり、之を樂めるは、即ち人を殺すを樂むなり、人を殺すを樂む者にして、争でか志を天下に得て王者となるを得んや、

七〇

故吉事尚左凶事尚右是以偏將軍處左上將軍處右言居上勢則以喪禮處之殺人衆多以悲哀泣喪戰勝以喪禮處之

偏將軍は、副將軍なり、喪禮は凶禮なり、故に冠婚の如き吉事には、左の方を貴へども、喪葬の如き凶事には、右を貴はるを以て、副將軍は、左に處りて、上將軍は、右に處れり、本と上將軍は、貴き陽なる左に居り、副將軍は、卑き陰なる右に居る可き筈なるに、古人は反て、副將軍をして貴き左の上に居らしむるものは、畢竟喪葬同様に、不祥不吉の禮を以て、兵事を處置すはなり、此に由て之を觀れば、兵事の尙ふ可からざるを知るへし、然るに世人は、漫に此不祥不吉の凶器を弄して、志を天下に得んと欲するは何事ぞ、古人は己むを得ずして、戰を爲し、敵人を多殺するときは、唯之れを悦はざるのみならず、大に悲哀の情を發して、之を吊泣す、故に戰つときは、喪禮と同じく不祥不吉の事として、之を處置せり、要するに本章は、斯く兵は、不祥不吉なるもの故に、世人濫りに甲兵を起して、隣國を奪ふことを爲す勿れと戒めたるものなり、孫吳か兵法の秘術も亦茲に外ならず、故に兵法に有名なる唐の王真は、老子の書は、兵學の爲めに作れるものなど云へり、

道常無名章第三十二

道常無名朴雖小天下不敢臣侯王若能萬物將寶

朴は、山より伐り出したる儘の素木、即ち未だ削りて柱棟等の木どりを爲さざるもの、這は、混然として萬善を具有し、未だ萬殊に分れざる道、即ち天性に譬ふるなり、

道の本然なる常体は、聲もなく、形もなければ、方とも圓とも名の付すべきもの無し、夫の柱とか棟とかの如きは、方圓長短の形あればこそ、隨て其名もあれども、山より出たるまゝの素木は、方圓長短の定まれる形なきが如く、本然の道、即ち天性は、未だ一偏に偏するの形を顯はす、仁者は仁に偏するを以て、仁の爲めには、天下の人より臣とし役はるべく、勇者は勇に偏するを以て、勇の爲めには、天下の人より臣し役はるべく、其他一偏に偏する人は、偏する所のもの、爲め役はるべけれど、朴即ち天性の道は、未だ萬殊に分れざるを以て、小なりと雖も、(其小、内なし)偏する所なきを以て、天下の人、之を臣とし役ふを能はず、侯王たる者若し能く朴即ち天性の道を守るときは、偏倚する所なきを以て、天下の人民、賓客の來るが如く、自ら歸服すべし、凡て一偏に偏するものは、天下の人をして服せしむるを能はず、文人は文人を服せしむるも、武人を服せしむるを能はず、武人も亦武人を服せしむるも、文人を服せしむるを能はず、唯斷々として他技なく、其心休々として、天性の朴を守るものにして、始て天下を歸服せしむへし、

天地相合以降甘露民莫之令而自均始制有名名亦既有夫亦將知止知止所以不殆譬道在天下猶川谷之於江海也

吉瑞なる甘露の降るは、天地和合の徵なり、甘露は物を育するものにて、天地和合し、甘露降るべきは、人類は言ふに及ばず、萬物を育せられて、各其生を遂く、所謂「致中和、天地位焉、萬物育焉」是れなり、侯王若し能く朴の道を守りて、天下の賓服するを甘露の降るか如くなるべきは、別に法令規則を施さざるも、天下自ら平均に治るべし、此れ即ち無爲の政なり、無爲の政も、物に事に、名目を付せざるを得ず、山より伐り出せる素木も、之れを削りて、梁と爲すもあり、楫と爲すもあり、棟と爲すもあり、榑と爲すもある如く、天下の萬民か各萬理を具有する天性、種々に分れて、勇者と爲るもあり、仁者と爲るもあり、身分に在ては、華族と爲るもあり士族と爲るもあり、商人と爲るもあり、農民と爲るもあるか如く、其名目の多き、千差萬別、争でか枚擧に堪ん、既に事物の名目ありて、尊卑貧富等の區別あるときは、卑き者は、尊からんと欲し、

七一



貧しき者は、富まんと欲するか爲め、純糾争亂の基を開くに至るへし、故に尊卑等の名目、既に定る以上は、各人をして分限に安んじ止るを知らしめざる可らず、人々分に安んじ止るを知りて、欲望を杜絶せしむるは天下の危殆ならざる所以、即ち太平の原因なり、是を以て無爲の道を得たる人主の天下に在るは、恰も許多の川谷の水が、自ら大河大海に赴くが如く、招かす召さすして、天下の人民、自ら賓服すへし、

知人者智、自知者明、勝人者有力、自勝者強。

此四句は、比較的の文章にて、第二句及び第四に重きを掛けり、人の善惡賢愚能否及び才不才等を知るは、固より智なり、然れども、諸れを自己の人柄を知るものに比すれば、甚た末なり、我が天授の才は、如何なる事に適する乎、文人たるに適する乎、將に武人たるに適する乎、抑文武を兼備するを得る乎、と云ふ如く自ら顧みて自己の性質を知るに於ては、明者と謂ふ可し、(國藩嘗て凡そ人の性質には、事を解する者と、事を辨する者との二種ありと云へり、事を辨する者とは、所謂事務家、即ち官吏質の人物なり、事を解する者とは、學者質の人物なり、學者質の人物にして、官吏となり、官吏質の人物にして、學者と爲るは、皆自ら知ると明かならざるものなり、凡そ人の終身を誤るは、自ら知らると明かならざるに因るもの多し) 人と角力して勝を得るは、腕力多しと謂ふべく、人と口論して勝を得るは、辨力多しと謂ふ可し、然れども諸れを

自己の私慾に勝つ者に比すれば、亦易々のみ、甚麽に腕力あればとて烏獲たるに過ぎず、甚麽に辨力あればとて、蘇秦張儀たるに過ぎず、王陽明も「破山中之賊、易、平心中之賊、難。」と云へる如く、自己の慾心に勝つとは、賊に易からず、故に自己の慾心に勝つ者は、眞の強者とこそ云ふべけれ、  
吳子云「或曰。老子之道。以味爲明。以弱爲強。而此章言。明言強。何也。曰。老子内非不明。外若味。内非不強。外示弱爾。其味其弱。治外之藥。其明其強。治内之方。並行而不相悖也。」と個は、實に老子の神髓を穿ちたるものと謂ふべし、

知足者富、強行者有志。

大無にも「適有」一復少一とあり、後漢の光武帝も「得隴望蜀」と云ひし如く、有るが上にも、猶ほ其上を望

不失其所者久、死而不亡者壽。

ひは、塵世の情態なりしが、此の如くなるときは、假ひ既に百萬圓の財産を保つも、猶ほ自ら富めりとせず終身不満足を以て世を送るのみならず爲めに或は災害に罹るをあり、故に我が今現に有する所の財産を以て充分なりと諦らめ、些しも欲望を起さず、勤儉に倚りて身を立つるときは、現有の財産も失ふを無く、心常に満足するを以て、此れこそ眞の富有者と云ふ可けれ、夫れ天下の人は、均しく是れ人なり、聖人も人なり、我も人なり、爲すあるものは、皆聖人なるに、聖人たるに至らざるものは、志氣の懈怠するに因るなり、故に強め行ふて聖人たらんとする者は、志氣あるものとこそ云ふ可けれ、

此處は二様に解するを得へし、其第一説は、夫れ心は、外物の刺激の爲めに移り易く、然ら難きものなるに泰然として其安んずる所を失はざる者は、永久我が心を以て安宅と爲へし、既に我が心を以て安宅と爲す以上は、假令我が臭皮袋即ち肉體を喪ふも我が心は道と合體するを以て(佛氏の所謂法心不生不滅即ち壽命存すと云ふ可し、蓋し我が肉體を喪亡するときは、我が心性も隨て消亡すると云へは、假ひ千年の命を保つも千年の後は、我が心性も消亡すべし云はざる可らず、然れども、靜に之を懸解ときは、(懸解の意味は南華經の講義に就て見るへし) 我が肉體は、我が物にあらず、天よりの借り物にて、我が心性を寓居せしむる逆旅に過ぎず、則ち我が肉體は、空蟬の蛻に同じ、蛻は本の處に結果るも、蟬は亡ひす、早くも他の木に移りて、美辭を發せり、我も亦右の趣の如く、肉體は枯るも、心性は千萬世も消亡せざるものなれば、豈に之を壽と云はざる可けんや、

其第二説は、右の如く哲理上より説破せず、人の處世法を説くものとす、我が天授の才か巡査の任に勝ゆる者は、巡査となり、大臣の任に勝ゆる者は大臣と爲る如く、其場所即ち位置を失へず、相當の所に居れば、必ず長久安泰に其躬を保つを得へし、便ち第一句は、易にも「負且乘致寇至」とある如く、天授劣才なるものが、僥倖的若くは電信を以て、不相當の高位高官に登る時は、久しく其躬を保つを能はざるのみならず、必ず禍を蒙るとの旨意なり、第二句は、大道徳大著述等のある者は壽なりとの意にて人の生命は、長くて三萬六千日に過ぎざりしが、孔老其人の如く大道徳大著述の千萬世に傳ふべきものあるに於ては、其人の體軀



は死するも、其人は亡ひず、故に壽とは云ふなり、  
老子の文章は、極めて深遠なるを以て、右の如く二様に解釋するを得るのみならず、仍は深く之を考ふれば  
更に復た卓説を得るともあらん、請ふ讀者之れを再思せよ、

大道汎兮兮章第三十四

大道汎兮兮。其可左右萬物恃之而生。而不辭。功成不名有。

汎は、ヒロシと訓する字にて、水の氾濫洋溢する貌、即ち道の萬物に普遍周行するの意なり、  
道の廣大なるを、水の氾濫洋溢するか如く、處として事として在らざるは無し、故に道は左にも右にも用ふ  
へし、萬物は之に依り恃みて生を化育す、人の生るゝも、道の力なり花の開くも、道の力なり、宇宙の事一  
として、道の作用にあらざるは無し、實に道は間斷なく勉強すれども、其勞を辭せず、斯く道は萬物化育の  
功を奏すれども、己れか高名として占有せざりき、(不名有)を永樂大典には「而不居」に作れり、然るとき  
は、最も解し易し、凡そ人の功に矜りて禍に罹るは、大道不名有の意を知らざるに因るなり、則ち善く老子  
を讀む者は、終身禍に罹るを無かる可し、故に老子は、富貴の者身を保つ對症の良藥とこそ、  
衣養萬物而不爲主。常無欲可名於小。

衣は活讀してキルと訓す、被及の意なり、

道は、宇宙の主人公にして、其功用は、萬物に被及して、育養を盡せども、道自らは曾て主宰たるの痕迹を  
顯はさず、常に湛然として無欲なるを以て、其作用の廣大を示さず、故に他より之を見れば道は小と名く可  
きもの、如し、蓋し萬物各其所を待て、些も道の功用、我れに關係なきが如くなるを以て斯く云ふなり、例  
之我に病なき時は、藥の功用を知らざるを以て、藥の功用は、小と名く可しと云ふが如し、  
萬物歸焉而不爲主。可名爲大。以其終不自爲大。故能成其大。

萬物一として道の妙用に歸せざるもの無し、而して道自らは萬物を主宰するの心あらず、然ども其妙用の窮  
り無き、世に之を大と名けざる可けんや、畢竟道は常に無欲にして、至大を以て自ら居らざればこそ、萬物

をして其所を得せしめ至大の妙用を成すなれ、聖人も亦斯の如く、尊大を以て自ら居らず、謙虛卑遜なれば  
こそ、聖人の聖人たる所以なれ、然るに世人は、自然の道に従ふを知らず、智に趨せ、功を弄し、自ら高ぶ  
りて人を卑下せるが故に、人も亦我を鄙めり、此れ自ら我か身を小にする所以なり、

執大象章第三十五

執大象。天下往而不害。安平泰。

大象は、大道と云ふに同じ、蓋し道の象たる千種萬様も管ならず、無形中に許大の象跡あるを以て、大象と  
云ふ、十四章の謂はゆる「無象之象」是なり、往は即ち來るなり、上章の歸の字と同じ、但韻を叶へる爲めに  
、往の字を用ゐたるのみ、

國政を掌る者か國家主義を執るときは、國家主義の者來り、自由主義を執るときは、自由主義の者來るも、  
其他の者は來らざるへし、迺ち無象の象即ち大道を執るときは、自由主義と國家主義とを問はず、天下の者  
悉く來り服すべし、何んとなれば、大道を執るときは、之を主宰する心無く、常に無我無心なるを以てなり  
常に無我無心なるときは、自由主義の者來るも、國家主義の者來るも、文人來るも、武人來るも、害する所  
あらずして、天下常に安平泰穩なり、

樂與餌。過客止。道之出口。淡乎其無味。視之不足見。聽之不足聞。用之不可既。

樂は、音樂なり、餌は食物なり、

音樂の聲、食物の味は、人の耳口を悦はしむるものなるを以て、過客も一時は、足を止めて之を聴き、之を  
食ふも、永久その美聲美味を止む可きものにあらず、何んとなれば、音樂聞り食物盡くれば、復悦ぶべきも  
のあらざればなり、凡べて外物の恃むに足らざるを皆斯の如し、假ひ身は大政大臣となり、一族の田園天下  
に半ばするも、運盡くれば西海の蟹となりぬ、小野小町が「花の色は、うつりにけりないたつらに、我身よ  
にふるながめせしまに」と詠し、如く、其美色も見る間に變し、屍をも犬に食はるゝに至れり、實に富貴利  
達、美聲美色美味等は總べて一時の花にして、常久不變のものにあらざる也、獨り大道の如きは、之に反し、



大道の口より出つるを聞くに、淡泊にして味なきと、水を飲むが如し、之れを視るも見るに足らず、之を聴くも聞くに足らざれども、之を用ふるに至ては、古今に用ひて既さず、萬世に亘りて、窮りあらざるなり、

將欲喻之章第三十六

將欲喻之必固張之將欲弱之必固強之將欲廢之必固興之將欲奪之必固與之是謂微明

喻は、欲むと訓す、弛むを云ふ、微明は、微妙なる道理に明なる意なり、

夫れ天道には、泰否復剝の理あり、人事には吉凶倚伏の理あり、物には消息盈虚の運あるを以て、盛なる者は必ず衰へ、衰なる者は復た盛なるとあり、張弛強弱、興廢與奪等皆然らざるは莫し、弓を以て之を譬ふれば、弓は、常に張りつめて置けば、喻み弱くなりて、用を成さぬものとす、故に強弓を喻めんと欲せば、常に固く之を張り置くに如かず、又之れを相横に譬ふるに、相手を弱くせんと欲せば、一旦相手の力を強くせしめざる可らず、我れは力を養ふて之を用ひず、相手のみに力を入れさせて、骨を折らせ、一旦彼を強くすれば、卒には草臥れて自ら仆る、穢になるものなり、我れ之に乗るときは、必ず勝つものとす、此れ謂はゆる「不爭而勝」の理なり、興廢與奪に於ても皆斯の如し、鄭の莊公か其弟共叔段に於ける如きは其適列なり、莊公が「多行不義必自斃」無庸將自及（此事は左傳の隱公元平に出つ、此事は茲に細録せず、該書に就て見るへし）など云へる如く、其機を匿くして、之を狎れしめ、其欲を縱にして、之を放たしめ、其惡を養ふて、之を成さしめたるは、陰險は即ち陰險なれども、之を廢し、之を奪ふの術に於ては、亦智と謂ふ可し、此術を兄弟の間に用ひたるは、寔に惡む可しと雖も、之を政敵等に用ふるに於ては、何の不可か之れ有らん、兎に角此等の智は、微妙中に至明の存するを以て、微明とは云ふなり、右の如く説くときは、老子の學問は陰險にして教と爲す可らざるの嫌ひあるを以て、之を保護して説くときは左の如し、

人の世にあるは、收歛退讓して、強盛榮華を避けざるへからず、夫の弓の如きも、強く張るときは、必ず弛

ひの理あり、強きものは必ず弱くなる理あり、興るものは必衰ふるの理あり、得るものは必ず失ふの理あり、然るに世人の強盛榮華に汲々して、己まざるは、畢竟屈伸消長、禍福往來の道理を知らざるに坐するのみ、實に此道理は、微妙玄遠にして、知り難けれども、自ら其中に至明の存するを以て、是を微明と謂ふなり、斯く説くときは、老子の退讓主義に能く協ふと雖も、文學の解釋甚だ分明ならず、第一説に従ふときは、章句は、分明なれども、義理未だ正確ならず、因て之を讀者の取捨に委す、

柔勝剛弱勝強魚不可脱於淵國之利器不可以示人

此處も萬般の事に適用すへけれども、老子時代の形勢に着眼すれば、國と國との關係を説きたるもの、如し、世人は、強國は必ず弱國に勝ち、剛者は必ず柔者に勝つと思惟するが故に、彼れ大に武力を養へば、我も亦大に武力を養て抗抵す、是れ猶ほ茶碗と茶碗と打合ふか如し、彼れを打ち破るも、我も亦傷つかざるを得ず、策の得たるものに非るなり、是を以て、我は箭の鋭さも幕の鋭めるは、貫かざるが如く、柔弱を守りて、強剛國に抗衛せざるときは、反て彼を制すへし、即ち秦楚齊晉等の強國か、互に自ら其強を恃んで、相戦ふとさ、我は渤海遼東灣の如き所に遯走して、暫く之を避け、強國等互に噛み合ふの餘、互に矢盡き力盡き共に斃れんとするに及んで、我れ出て、其弊を制せば、諸強國に勝つと必然なり、而して我れ柔弱を守るの法は、魚の淵中に潜むか如くならざる可らず、魚の物たる、爪牙等の利器ありて、物に勝つにあらざり、但淵中を脱せざるに在るのみ、魚若し淵中を脱出して、游泳噴喇するときは、必ず強剛者の爲めに捕獲せらるが故に、淵中に潜居するに於ては、強剛者も之を如何ともするを能はざる也、強剛者若し自ら其強剛を恃み、魚を捕んとて、淵中に入るときは、水の爲めに溺死すへし、此理に均しく、我か強武を恃んで妄りに干戈を弄し、人の國を侵伐せば、反て我國を失ふものを、現に西楚の項羽は七十餘戦一回も負けざる程の強武なれども、最後の戦に其國を失へり、武田勝頼の武勇は、其父信玄に勝れども、天目山に身を果せり、故に國の利器は、人に示す可らず、

右の道理を他の事に用ふるも同一理にて、身を守り家を守る等にも、柔弱を以て自ら處し、進んで事を爲す



可らず、進んで爲すは、失敗を招くの原因と知るへし、退て守るは魚の淵中に潜むに均しく、決して禍に罹るをわらず、凡て我か威權を弄し、我か才智を恃んで事を爲すは、國の利器を人に示すと同じとなり、程子曰く「予奪欲張。於理有之。然老子之言。權詐也。」と道は千古の確評と謂ふ可し、李中堂の政略は、老子主義を取れるもの、如し、陰險も亦甚し、彼れ陰險を以てせば、我は之に應ずるに中正不偏の正道を以てせば、何の懼るとか之れ有らん、

道常無爲章第三十七

道常無爲而無不爲。

道は、本と寂然不動、漠然として其迹を見はさず、此れ即ち無爲なり、即ち道の體なり、其感して動くに及んては、周行普適、氾濫横行、大自在の妙用を有す、此れ即ち無不爲なり、即ち道の用なり、例之は、火の燃ゆる性を見ふるは、道の體にて、其燃ゆるは、道の用なり、水の流るゝ所以のものは、體にて、其流るゝは用なり、物皆斯の如く、道の體は無爲なれども、其用は爲さるゝ所無し、木葉の茂るも、鳥の啼くも、其他天地間に所有事は、一として道の作用にあらざるなしと知るへし、

侯王若能守之。萬物將自化。而欲作吾將鎮之以無名之朴。

朴は、前に説きたる如くアラ木にて、一毫人爲を加へざるものなり、故に無名之朴は、無我無欲の意にて即ち無爲の道を云、

侯王若し能く無爲の道を守らば、勞せずして、天下の人民各々其堵に安んじ、物自ら化育す、然れども動き易く、恃み難きは人の心なり、既に化したる民も世漸く降れば、外物に誘はれて、或は起て權謀詐術の事を作んと欲するは、勢の免れざる所なり、此れ猶ほ赤心なる嬰兒の漸く長するの際、人偽の日に起るか如し、此場合に在て、之を制するに法律規則等を以てするも、制止し得るものにわらず、只無爲の道を以て、之に當らば、鎮め得るを必然なり、

無名之朴亦將無欲無欲以靜天下將自定。

無名の朴、即ち無爲の道行はれば、人皆無欲にして、一點の私心なし、人既に無欲にして一點の私心なきとせば、世に騷はがしきとも無く、自ら靜かにして天下の定らざるを欲するも定らざるを得ず、畢竟世に紛糾騷擾の絶へざるは、人々私心の絶へざるを以てなり、試に天上に坐して、下界を下瞰せば、蟻蝻の往來するか如く、老弱男女、東西に奔走し、二六時中生を貪り、利を求めて已まず、爲めに人々互に相噛み、互に相打ち、騷擾會て休む時なかりき、盡そ此貪欲界を放却して、無何有の郷に遊はさるゝ、老子無爲の道、行はれて、人々無何有の郷に遊ふときは、天下の定ると、論を竣たさるなり、

下篇

緒言にも説きし如く、唐の玄宗は、上篇は道を説き、下篇は徳を説くと言へども、上下篇とも、道徳を混説したるものにて、截然たる區分あるに非ず、但上篇の首句に「道可道」の字あるを以て、道徳と爲し、下篇の首句に「上徳不徳」の字あるを以て、徳徳と爲すに過ぎざるのみ、

上徳不徳是以有徳下徳不徳是以無徳。

人能く道を悟りて、自然の徳を有するときは、己れに徳ありと爲さず、其徳を忘れて、我れあるを知らざるを、天地の無心なるか如し、是を以て、其徳終始其身を離れざるなり、下徳の者は、即ち然らず、自ら徳の貴さを知り、務めて之を失ふを恐るゝ程なるを以て、天地自然の徳と同様の徳を有するを能はず、

上徳無爲而無不爲下徳爲之而無以爲。

蘇注本には「無不爲」を「無以爲」に、「無以爲」を「有以爲」に作れり、今古本に據て之を改む、以は重く看る、用と同じ、

上徳の人は、天と同一なり、天は無我無心にして、一毫の所爲あらず、此れ即ち無爲なり、然れども四時行はれ、百物生する等、一として天の所爲にあらざるは莫し、此れ即ち無不爲なり、上徳の人も亦斯の如く、上に居て垂拱するのみなれども、天下一人として其化を被らざるもの無し、下徳の人は、仁政を施して、民を愛せり、此れ即ち爲之なり、然れども、仁政を施すに心を用ひて、之を爲すにあらず、此れ即ち無以爲な



り、譬へば、雨露の如し、雨露の草木を潤すは、雨露の恵なり、即ち爲之なり、然ども、雨露に心ありて、之を爲すにあらざ、此れ即ち無以爲之なり、

上仁爲之而無以爲上義爲之而有以爲上禮爲之而莫之應則攘臂而扔之。

上仁は前の下徳に隣するものなり、上義は仁より一等下り、上禮は又義より一等下るものなり、而して下仁下義下禮は言ふに足らず、又推して知る可きを以て、之を省くなり、扔は強て率引する意なり、

上仁は、下徳の如く、仁政を施して民を愛すれども、心を用ひて之を爲すに非ず、其次は義を以て世を治むるものなり、義は宜なり、事を處して宜しきを得るを云ふ、凡そ事の宜しきを得ざる事あるとき、義以て之を處置し、柱を抑へ、直を助くる等の爲めには、邪曲を殺すともわらん、此れ即ち上義爲之なり、其之れを爲す、一として心を用ひざるをなし、此れ即ち有以爲之なり、又其次は禮を以て世を治むるものなり、乃ち貴賤上下の間に於て、周旋登降、揖讓恭敬等の式を定め、尊卑相犯すと無からしむ、此れ即ち上禮爲之なり、然れども、禮は、往來を尙ふものにて、我往けば彼來り、彼來れば我往かざる可らず、則ち我往きて禮を行ふも、彼應禮を爲さざるときは、怒を發し、臂を擡て、扔き寄せて毆打するか如き結果に至るは、必然の勢なり、

故失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮。夫禮者、忠信之薄、而亂之首。

夫れ道は、無にして萬物の本たるものなり、其中より各人その道を資り得て、己れか徳と爲す、故に徳は天地の道の各人に分散したるとき、即ち一塊たる道の形を失ふて、而後徳てふ名を生しぬ、各人その徳を全ふして、無爲ならば、故らに仁愛を施すの必要なれども、其無爲なる徳を失ふに及んで、而後仁を以て民を愛すととなりぬ、仁を以て民を愛する能はざるに及んで、而後義を以て、正邪を矯正し、是非を辨するとなりぬ、義を以て物を正すと能はざるに及んで、而後禮を以て外部の虚飾を爲し、善人にも悪人にも、程能く交るととなりぬ、則ち禮を以て世を治るは、下の下なるものなり、元來禮は、忠信の薄きより起るものにて、争亂の由て起る首なり、試に看よ、兄弟の足を履めば、之を撫げれば濟めども、他人の足を履むるとき

は、禮に於て必ず其放恣を謝せざる可らず、以て禮の忠信に薄きを見る可し、我れ敬禮を行ふも、彼れ應禮を爲さざるときは、臂を擡けて毆打するに至る、以て禮は争亂の首なるを知る可し、

前識者、道之華、而愚之始、是以大丈夫處其厚、不居其薄、處其實、不居其華、故去彼取此。

前識者は、通常人より知識の速く發達したるものなり、丁年未滿にして、或は大學校を卒業し、或は勅奏任官となる如きは、俗眼より視るときは、榮譽の至りなれども、深く之を考ふれば、這は榮花の一旦輝くのみにて、毫も實なきを以て、中年以後に至れば、榮花散して、一點の實なく、通常人にも及はざる愚人となれり、則ち前識者は、道の華にして、愚人となるの始めなるを知るべし、程伊川が「人有三不幸。少年登高科。一不幸。席父兄之勢。爲美官。二不幸。有高才能。文章。三不幸也」と云へるは、是れか爲めなり、是を以て、大丈夫たるものは、身を忠信の厚きに處きて、禮の薄きに居らず、道の實に身を處きて、道の華に居らず、故に彼の華禮を去りて、此忠信を取れり、

昔之得一者章第三十九

昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一以爲天下正。

昔は始めの意なり、一は、道なり、上篇の謂はゆる「抱一」の一、莊子の謂はゆる「太一」の一、是れなり、凡そ物の始を爲す根本は、唯一の道あるのみ、故に物各其一を得て、其功用を爲すものとす、便ち天の清明にして、日月星辰の象を垂る、所以のもの、地の寧靜にして、萬象を載する所以のもの、鬼神の幽明にして、出沒變化の威靈ある所以のもの、谷の中間空虚にして、衆流を容れて、竭きざる所以のもの、其他萬物の生々發育して已まざる所以のもの、王侯の能く天下を正し、人民を保すんする所以のものは、皆一なる道を得るを以てなり、斯の如く、宇宙の事物、一なる道を得ずして、其功用を遂くるものあらざるなり、



其致之一也。天無以清，將恐裂地無以寧。將恐發神無以靈。將恐歇谷無以盈。將恐竭萬物無以生。將恐滅侯王無以正。而貴高將恐蹙。

天の清き、地の寧き、神の靈なる、谷の盈つる、萬物の生ずる、侯王の天下を正すと致す所以のものは、皆な一なる道を得るを以てなり、然るに、若し天か一を得て、以て其清を保つと無きときは、日月星辰も恐くは裂けて飛はん、地も一を得て、以て靜寧を保つと無きときは、地盤恐くは、激發せん、神も一を得て、以て幽明を保つと無きときは、威靈恐くは、休歇せん、谷も一を得て、以て空虛を保つと無きときは、衆流恐くは、乾歇せん其他萬物も、一を得て、以て生育を保つと無きときは、總ての動植物恐くは、亡滅せん、侯王も一を得て、以て天下を正すと無く、徒らに位の高き貴ひに傲るときは、恐くは顛墜して、其身を保つと能はざるべし、(竟に重きを結末に歸す、)

故貴以賤爲本。高以下爲貴。

天子ありて、然後人民あるに非ず、人民ありて、然後天子あるものとす、故に貴きは、賤しきを以て本と爲すなり、樹木も下なる根抵わればこそ、高き枝葉を生ずるなれ、兵隊も下なる兵卒わればこそ、高き將校を要すなれ、故に高きは、下を以て貴しと爲すなり、則ち天地の大も、侯王の尊きも、皆な賤且つ下なるものより生ずるなり、賤且つ下なるものは、天下の至微なり、天下の至微は、前段の謂はゆる一にして、目之れを視るを得ざる也、

是以侯王自謂孤寡不穀。此非以賤爲本耶。非乎。

孤はミナシゴと訓す、獨夫の意なり、寡は、寡徳の意なり、不穀は、不善と云ふに同じ、是を以て、侯王の貴きも、自ら謙遜して、或は孤と曰ひ、或は寡人と曰ひ、或は不穀と曰ふは、何故なるぞ、畢竟人爵の貴きを忘れて、一なる道を奉し、下賤を以て本と爲すが爲めに非ずや、左様には非ずや、前には、清、寧、靈、盈、生、正の六を並言したれども、茲は上文の貴高の二字のみ承けて言ひたり、丹は、重きを侯王の上に措けはなり、

故致數車無車。不欲碌々如玉。落落々如石。

珠々は、玉の美麗なる貌、落落々は、醜惡なる貌、凡そ宇宙萬物の區別は、千種萬葉も管ならずと雖も、道の本根より觀察し來るときは、彼我均一にして、均しく是れ人なれば、貴賤上下の別ある無し、試に看よ、車は孰れか車なるぞ、一々之を數へみれば、輶なり、軾なり、輶なり、輪なり、輻なり、軸なり、何くにも車と云ふへきもの無し、貴人も亦然り、孰れか貴人たる所なるぞ、孤なり、寡人なり、不穀なり、何くにも貴人たる所なし、故に一なる道を信する者は、玉の碌々として美なるか如く、石の落落々として醜なるか如く、貴賤高下の別を立つるを欲せざるなり、玉は貴く、石は賤しと云ふと雖も、深く之を考ふれば、均く是れ土中の塊物なれば、貴賤高下の區別あらざる也、(是れは哲理上の眞理を説きて、上たる者の傲驕を戒めたるものにて、下たる者に、上を無視せよと云ふに非ず、下たる者の處世法に於ては、固より玉は玉とし、石は石とせざる可らず、毫も此に注意なく、老子を誤讀するときには、虛無黨、無政府黨の如き説に陥るへし、戒めざる可けんや、)

反者道之動章第四十

反者道之動。

反は、前の假性復命の謂にして、至靜の時なり、動とは能く動きて物に應ずるを云ふ、夫れ無は本なり、有は末なり、靜は本なり、躁は末なり、便ち道の本體は、虛無至靜なるが故に、虛無至靜の本源に反るときは、寂然不動にして、能く物に應ずるを得るなり、試に思へ、人の心靜なるとき、事を處するに於ては、決して事を誤またざるに非ずや、是れ即ち靜の本に反りて道の動を得たるものなり、心の躁かしき時、事を誤るは、靜に反ると能はざるを以てなり、

弱者道之用。

道の體は、虚にして、其用は甚だ弱きものなり、甚だ弱ければこそ、永久存して滅せざる所以なれ、試に看よ、齒は堅き玳瑁質なるを以て、早く脱落し、舌は、溫柔なるを以て、永く存するに非ずや、凡て人の世に在る



柳枝の如く柔弱なるとき、禍を受くると無かるべし、(永存の點より言ふときは、至弱は、乃ち至強なる所以なり)

天地萬物生、于有、有生、于無。

天地萬物は、必ず氣より生ず、氣聚りて形を成す、其氣は道より生ず、道は聲もなく、臭もなく、無なるものなり、故に無とは、道と云ふに同じ、有とは、氣と云ふに異ならず、周子が太極圖にも、主静を論じ、如く、心静かならずして、躁がしむるときは、何事にも爲し得ざるを、猶は鏡を動搖して、影を寫し得ざるが如し、故に心静かにして、本然の無に反るときは、眞智湧出して、道の用を爲すを得べし、

上士聞道章第四十一

上士聞道、勤而行之、中士聞道、若存若亡、下士聞道、大笑之、不笑不足以爲道。

勤は、常に行ふて惰らざるの謂なり、上士即ち天稟高き者か、自然の道を聞きたるときは、之を信するを厚く、眷々服膺して惰らず、(孔子か「語」之而不惰者、其回也與」と云へるは、頗る之に近し)、中士即ち天稟の較下れる者か、道を聞きたるときは、半信半疑、半は道を以て存するか若く、半は道を以て亡しか若く、思惟し、遂に深く之を信するを能はず、下士即ち天稟の最も悪しき者に至ては、道を聞くと、荒唐不經のものと爲し、之を笑ふて顧みず、夫れ道は沖澗無朕にして、聲も無く、臭も無きものなれば、小人凡眼の容易に覺り得るものにわらず、故に下士にして嘲笑輕侮せざるは、覺り易きものなれば、道として貴ふに足らざるなり、下士か之を侮りて笑へばこそ、道の道たる所以を知らるれ、

故建言者有之。

建言者は、猶は古の立論者と云ふか如し、道は、甚だ高遠なるか故に、世の小人凡眼にては、観る可らざるのみならず、却て反對に見ゆるものなり故

明道若昧。

に古の立言者か道を説きし語を擧げて、之を證せり、(下の明道の句より大象の句までは、建言者の言なり)、道の宇宙を照すは、周流普遍にして、照さるる所なけれども、其光明甚だ至大なるを以て、凡俗の目より観るときは、昧さが如く見ゆ、例之は、電氣燈や瓦斯燈の如きは、著しく其光輝を放つを覺ゆれども、太陽の光明に至ては、其光輝至大なる故を、場所によりては、反て其光輝を覺へず、殊に曇天などには其昧さを覺ふるが如し、便ち明道を有する人は、其光を輒み、俗塵に同ふして、自ら其明を見はざるを以て、其光輝終始減せざるなり、

進道若退。

道は、常に駁々として進んで息まされども、俗眼より之を見るときは、退歩して毫も進まざるが如し、是れ尺椀の屈する状のみを見て、信て進まんとするを見ざると一般なり、凡そ學問技藝にても、眞に能く進む人は、謙遜にして、人と争はざるを以て、退くが如くに見ゆるもの也、

夷道若類。

夷は、タイラカと訓す、公平砥の如きを云ふ、類は、アライト、又イトノフシと訓す、絲の平らかならずして、高低の節あるを云ふ、

道は本來公平無私にして、彼我公私の別なく、平等に澤を萬物に及ぼすを砥の如くなる所よりして、夷道とも云ふ程なるに、世の俗人は斯に、目を注ぐを知らず、物に幸不幸等のある所に着眼するを以て、道は、絲の平かならずして、高低の節ある類の如く見ゆるなり、

上德若谷。

谷は、中の空虚なるを云ふ、上徳は、萬古に涉り、四表に光被するも、尙ほ餘りある程に宏大無量なれども、俗眼を以て、之を見るときは、曾て其宏大を見ざるのみならず、谷の空虚なるか如く、其中に實あるを見ざるなり、



太白若辱

辱は、汚穢不潔の意なり、  
太潔白なる者は、敢て倏々として、自ら異別を表せず、汚塵中に同居する故を、汚穢なる物の如く見ゆるなり、

廣徳若不足

其徳の一方一局に止る者は固より以て廣徳と謂ふ可らず、普天の下率土の濱も、其徳を被らざる莫きものにして、始て廣徳とこそ謂ふ可けれ、斯く徳の廣大窮り無き者は、一方一局のみに、其徳を施さるるか故に、俗眼を以て瞥見すれば、徳に足らざる所あるか如し、

建徳若儉

此れは、古來二説あり、第一説は、建は健なり、スコヤカと訓す、徳の間斷なく普く物に及ぶものを建徳と云ふ、儉は、儉安苟且の儉にて、ヌスムと訓す、便ち徳の間斷なく衆物に普及するものは、俗眼より視るときは、儉安苟且にして、惰る所あるか如しとの意なり、第二説は、建は、書經の「皇建有極」の建にして、タツと訓す、儉は匹なり、ナラブと訓す、蓋し眞に我か性徳を建つる人は、決して人に矜り高ふるをも無く、温順にして、常に人に遜たる故を、俗眼より之を視るときは、尋常一樣の人に匹ひて、毫も過れたる所を見出さずとの意なり、

質貞若渝

渝は、カハルと訓す、變更の意なり、  
朴質無偽の徳を備へ、物に隨て、能く變化し、會て其貞を失はざる者は、俗眼より視るときは、其心渝りて信を守らざるが如く見ゆ、譬へば、四時の氣候、の如きも寒來暑往、温暖貞一ならざるが如くなれども、這は、自然の朴質無偽を、其變化の時に隨て其貞を盡すなり、然るに俗人は只其變化の様のみを見て、其質貞を失ひ、心の渝る如く思ふなり、

大方無隅

物の極めて大なるものは、東西南北を分つと雖も、其方隅の孰れに在を知る可らず、譬へば、大太平洋の中心に立つが如き、是れなり、道の圓滑平等にして、一方に拘らず、圭角なきと此の如し、

大器晚成

凡そ物の甚だ大なるものは、許多の年月を経るに非れば、決して成就するものにわらず、聖人の道に由て、天下を治むるも、自然の秩序に隨て、速成を要せず、凡そ天下の事愈々久しければ、愈々大功を奏するは、事實に徴して明かなり、氷も千年消へざれば、水晶と成り、松津も萬年結べば、琥珀と成ると云ふ、書生の業務も、多年の星霜を積むに非れば成らず、夫の少年の夙に才名を得る如きは、果して大器にはわらざるなり、

大音希聲

希は、マレナリと訓す、無に異なり、音は、聞ゆれども、太鼓の聲ども、鐘の聲ども、分つ可らざるを希と云ふ、  
雷霆や大砲の如き大音は、耳に入るも、何の聲とも聽き分くると能はず、即ち聲に希なるなり、道の功用も亦此の如く、餘り大なる故を、其功用孰れに在るか、辨すると能はざるなり、

大象無形

象は、形なり、  
天地の如く、形象の宏大無偏なるものは、如何なる形體を成せるか形體の見るべきもの無し、自然の道も亦此の如く、凡眼を以ては、之を見るを能はず、  
以上は古の建言者の語なり、斯く并言すと雖も、之を撮言すれば、俗眼を以て、道を見るときは、其小を見て、其大を見んと能はずと言ふに外ならず、  
道隱無名夫唯道善貸且成



道は、建言者の言へる如く、萬象の大作用を爲すものなれども、形色の見るべき無く、聲音の聞くべき無きを以て、隠れて名づくべき無し、故に俗人は道を見て冷笑すれども、其作用を物に、貸し與へて、森羅萬象の形を見はす、一として道に由て成らざるは莫し、天の天たる地の地たる、其他人獸草木等の物たる、道の作用に非ずして何ぞ、

道生一章第四十二

道生<sup>レ</sup>一<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>萬物<sup>ヲ</sup>負<sup>テ</sup>陰<sup>ヲ</sup>而<sup>テ</sup>抱<sup>ク</sup>陽<sup>ヲ</sup>冲氣<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>和<sup>ヲ</sup>

本章及び次章は、老子下篇中の主眼にして、弱は道を用なるを云ふなり、抑々道は、無中より冲虚の一氣を生出す、冲虚の一氣は、陰陽の二氣を生出す、陰陽の二氣は、冲虚の一氣に合して三となりぬ、故に三を生すと云ふ、陰陽二氣と、冲虚一氣との外、別に三あるにあらざる、三を指して天地人の三才など云ふ説は、取るに足らざる也、凡そ萬物は、此一氣と、此二氣との三に因て生出す、故に其生出するや、後へに陰を負ひ、前に陽を抱き、冲氣その中間に在て、和を爲しぬ、陰は背に屬す、故に負ふと云ふ、陽は前に屬す、故に抱くと云ふ、斯く宇宙の萬物は、虚無なる道より生するに於ては、既に生したる後も、亦虚無なる道の働きを爲さざる可らず、左すれば、人の行爲も、虚にして實たす、即ち柔弱なるこそ、道の本體に適ふなれ、殊に王侯其人たるものは、柔弱謙遜を以て、自ら守らざる可けんや、

人之所惡唯孤寡不穀而王公以爲稱

孤即ち獨夫とか、寡徳の人とか、不穀即ち不善の人とか云ふとは、皆な人の惡み嫌ふ所なり、然るに、人の上に立てる王侯は、孤寡不穀を以て自ら稱せり、蓋し前節にも説きたるか如く、宇宙萬物は、皆な虚無の道より生じ、冲虚和氣の和合に倚て生育するものなるが故に、有道の王侯は、此意を體認して、卑賤に處り、虚靜を貴べばこそ世人の惡み嫌ふ所の稱號を以て、自己の代名詞となすなれ、迺ち道眼より看破し來れば、本

來彼我均一にして、貴賤上下の區別なく、物の一盛一衰、一損一益は、自然の道理、亦怪むに足らざる也、故物或損之而益或益而損

損はヘラスと訓する字にて、卑賤を云ふ、益は、マスと訓する字にて、富貴を云ふ、凡そ天地間の物、賤しきは、貴さの階梯を爲し、卑きは、高さの基を爲すものなるが故に、己れを損して、却て益を受くるとあり、迺ち王侯か孤寡不穀など稱するは、自ら損するに似たれども、却て人の尊敬を受け、愈々王侯の尊榮を益するものとす、之に反し、王侯か自ら其貴さを益さんとて、威權を弄し、人民を視ると土芥の如くなるときは、人民に惡み疎んせられて、大損を招くと必然なり、是を以て、人たる者は、虚無なる道の本體を體し、陰陽消長の理を悟り、損の益となり、賤の貴さを來たす所以に着眼せざる可けんや、書經に「滿招損謙受益」とあるも此理に外ならず、

人之所教我亦教之強梁者不得其死吾將以爲教父

人之所教は、蓋し孔子の教ゆる所を指すならん、強梁は、棟梁の強さを云ふ、又橋梁の強さのもの云ふ、孰れにしても、甚だ剛強なるものを云ふ不得其死とは、身を全ふして終ると能はざるを云ふ、強梁者不得其死の七字は、孔子流の教旨なり、教父は、教本と云ふに同し、孔子流の教ゆる所の主義にも甚だ善みすべきものあり、我も亦其主義には同意して、人を教へんとす、其説に曰く、強梁の者は、其死を得ずと、(孔子嘗て子路の剛強を戒めて曰く「若由也不得其死然」と、果して子路は、孔俚の難に身を亡はせり)我は此主義を以て、教旨の根本を爲さんとす、(此處の解釋には、古來種々の説あれども、皆な老子を看破し得ざるもの、説にて、取るに足らず)本章の要旨は、道の本體は、虚無なり、至柔なりと云ふに在り、蓋し虚無至柔は、至強の基ひにして、自ら損するは、自ら益するの礎なり、人能く此理を知るときは、安全に身を保つとを得へし、

天下之至柔章第四十三

天下之至柔馳騁天下之至堅無有入無間吾是以知無爲之有益

馳騁は、騶騶使役と云ふか如し、無有は、査滓の質ある無さを謂ふ、幾んど無と云ふに同し、無間は、中間



御隨の入る可き處なきを謂ふ、  
夫れ堅きを以て、堅きを制するときは、互に碎折するのみ、只其れ天下の至柔なるものは、却て天下の至堅なるものを使役すへし、夫の至柔なるものは、炎上する烈火を防止すへく、又查洋の質も有る無く、至柔なる氣のみなるときは、金石牆壁の隙隙にも透入すへし、牙は有を以て、有に入らば、相捍りて受けされども、無を以て、有に入らば、容易なるを以てなり、吾れ是を以て、無爲即ち至柔の内に益あるを知れり、  
不言之教無爲之益天下希及之。  
頌文緻密の教を立て、朝に仁義を講し、夕に禮讓を説きて、天下を誘導するは、抑末なり、狭く且つ淺しと謂ふ可し、唯ち言はずして、教へ行はれ、至柔無爲の益を受けて、天下自ら治るこそ、至道の妙用なれ、然るに、天下の俗人は、此理を知るに及ぶ者甚だ希れなり、  
本章は、上章を承けて、至柔無爲の益を説きて、至道の妙用は、言はず語らざるの間に在ることを示したるものなり、

名與身章第四十四

名與身孰親。身與貨孰多。

名は、名譽なり、親は、愛するの意なり、多は、重んずるの意なり、  
名譽と身體とは、孰れか親愛なるが、世人には精神を勞し、形體を勞し、以て、名譽を得んとして、爲めに一身を喪ふ者あり、這は、名譽の小と、一身の大との輕重を知らざるものなり、又身體と貨財とは、孰れか重んずべきものなるが、世人には、一身の重きを忘れ、財貨の輕きに役々して災禍に墮るものあり、是れ亦身體と財貨との輕重を辨せざるものなり、畢竟世人の名譽財貨に汲々するは、我身の貴ふ可きことを知らざるを以てなり、細く説くときは、身體性命は大切なるもの故に、戰爭等の際にも、名譽を捨て、逃遁せよと謂ふに似たれども、決して左にあらじ、前章に「知貴身而不知忘我」とあるを忘る可らず、蓋し身體を先にして、名譽を後にし、身體を貴んで、財貨を賤むは、猶ほ未だ我を忘ると云ふ可らず、我を忘る者は、我か身體を有りとせず、況や名譽と財貨とに於てかや、夫の我か身を以て、天下の爲めに犠牲に供し、國難に殉ずる如きは、我を忘るものに非れば能はざる也、故に天下の人をして、名譽は愛するに足らず、財貨は重んずるに足らざることを知らしめて、而後真に我か身を貴ふを知る、真に我か身を貴ふを知て、而後我れを忘るを知る、我を忘るゝを知て、而後王帥に従て忠死するを得へし、(余は我が征清幾萬の難難は、皆我れを忘れたる忠士なりと惜す)  
得與亡孰病。

得與亡孰病。

前節に説く如く、名譽財貨に役々して、之を得んとすれば、其身を亡はさるを得ず、左すれば、之を得んとして、其身を亡はすと、得ずして其身を全ふるとは、孰れか病み患ふ可きことなるが、只其れ有無を齊ふし、得喪を均ふして、而後病み患ふることを免る可し、

甚愛必大費。多藏必厚亡。

愛は、名譽を愛するを謂ふ、費は、精神を費勞するを謂ふ、藏は、財貨を貯藏するを謂ふ、亡は、財貨を亡ふを謂ふ、

茲に實體あれば、日光燈火之れを照して、其影を生ず、名譽も亦人の影なり、人に實徳ありて、名譽の之れに伴ふは、自然の勢理なれども、實徳を忘れて、名譽を慕ふは、影を捉ふるに同じ、愚も亦甚しからずや、實其愚なるのみならず、名譽を愛するを愈甚しければ、精神心力を費勞するを愈大ひなり、竟には身體をも喪ふに至る可し、夫れ財貨は、必要缺く可らざるものなれども、徒らに多くの財貨を貯藏するときは必ず乘人に攻撃されて厚く之を亡ふに至る可し、殷の紂王か一朝にして、鹿臺の財、鉅橋の粟を亡ひしは、其大例なり、かゝる暴君ならざるも、貪婪奢靡の高利貸や守銭奴か、或は家屋を燒燬され或は子孫の浪費に遭ひ、或は其身を殺害されて、一朝に其財産を失ふもの、例は、古今抄からず、

知足不辱。知止不殆。可以長久。

世の間はゆる英雄才子等か身の終りを全ふするを能はざる所以のものは、名利に役せられて、足ると知らず、其欲心を増長するを以てなり、故に人尙し其分に安して、足ると知るときは、辱しめを受くるを無し、欲心の増長を制し止むるときは危殆なく、長く其身を保つを得へし、



之を要するに、名利は生を損するもの故を、之を戒めて、我を忘れ、止足を知るの幸福なるを説きたるものなり、本章も句中に韻を踏みたる所あり、注目して見るべし。

大成若缺章第四十五

大成若缺。其用不弊。大盈若冲。其用不窮。

弊は、ヤブルと訓す、冲は虚なり。

此處は、二様に解するを得へし、其第一説は、盛満即ち高位高官の者の身を持つる法を説きたるものとす、「三日見る目も櫻かな」と言ふ如く、無情の花すら、久しく盛満に堪ゆると能はず、况や有情の人に於てかや故に君子の世に在るや、盛満に處するの道を講せざる可らず、君子尚し志を得て、大成大盈の位地に立つに際し、謙遜して缺く所あるか若く、其中空虚にして、一片の徳なきか若く、人に下るときは、其作用弊るゝとなく、窮り無く、久しきに堪ゆるを得べし、程子の謂ゆる「聖人有三元之時。無元之心。是れなり、其第二説は、大器は晩成するもの故を、俗眼より大成の道を見るときは、遲緩にして缺くる所あるか如くなれども、其作用は幾年を経るも、決して弊れ熄むとなし、而して、道の萬物に充實するや、自ら盈てりとするの意なきを以て、俗眼より之を見るときは、其作用虚なるか如くなれども、萬物之れを酌みて竭くると無く、其作用實に窮らざるなり、右兩説の取捨は、茲に斷言せず。

大直若屈。大巧若拙。大辯若訥。

味噌の味増臭きは、上味噌にあらず、學者の學者臭きは、眞の學者にあらずと云ふ諺は、此處の意味より一變し來るものと知るべし、甚だ大直なるものは、屈曲する所あるか如く見ゆるものなり、例へば、父は子の爲めに隠し、子は父の爲めに隠くすは、人の眞情、即ち大直なれども、他より之を見るときは、父子互に屈曲する所あるか如く見ゆるか如し、又美術の大巧を極めたる者の物を彫刻するは、物の形の自然の儘に従ひて曲りたるものは、曲りなりに、缺けたるものは、缺けなりに彫刻するか故に、拙劣なるか如く見ゆれども、其實は天工の巧妙を盡しぬ、左り甚五郎の細工の如き是なり、又孔子や老子の言の如き大辯は、蘇秦や張儀の如く、喋々喞々せざるを以て、訥にして雄辯ならざるが如くなれども、其實は千萬世にも傳ふるべきものなり。

躁勝寒。靜勝熱。清靜爲天下正。

身勝かしく勞動するときは、冬の寒に堪へ勝ちて相を脱くにも至るへし、又身體を靜かにして、動かさざるときは、夏の熱さに堪へ勝ちて、汗を出たすとも無かるへし、斯く人爲も天地自然の氣候に勝つとある中に就て、躁は勞して勝ち、靜は逸して勝つとなれば、勞して勝つは、逸して勝つに如かず、故に清靜は天下の正たり、便ち上たる者清靜を以て、天下に示せば、下たる者も、亦清靜にして、天下自ら無事なる理なり。

老子の目より視るときは、孔子の仁義禮智を以て、天下を脩むる説は、「躁勝寒」ものと認むるに似たり、況や法律を以て天下を統治するの論は、躁の最も躁なるものと爲し、と知る可し、之を要するに、孔子は進取主義に傾きしものにて、老子は退守主義の甚しきものなり。

天下有道章第四十六

天下有道。却走馬以糞。

却はシリゾクと訓す、屏去の意なり、走馬は善く走る馬にて、戰場に用ふる所のものなり、糞は田に肥料を施すとなり、一本には、糞の下に、車の字あり、

天下道あるときは、上下共に其分に安んじて、毫も争ふ心なく、謂はゆる清靜無爲なれば、復た戰場に用る所の走馬の必要なし、故に之を却けて、但其生計に必要なる田畝に糞養するを以て事と爲せり、

天下無道。戎馬生於郊。

戎馬は軍馬なり、郊は原野なり、戎馬生於郊とは戦争の起るを云ふ、

天下に清靜無爲の道行はれざるときは、人々忽ち欲心を萌す、欲心一たひ萌すときは、各其分に安ずると能はずして言論相争ふ、言論相争ふの曉には、必ず戎馬を以て、廣原平野の間に相見ゆるに至るなり、

罪莫大於可欲。禍莫大於不知足。咎莫大於欲得。故知足之爲足常足。罪の種類は、數多あれども、欲望より大なるものは有らじ、禍の種類も數多あれども、足るを知らざるよ



り大なるものは有らじ、谷の種類も数多あれども、欲心の増心より大なるものは有らじ、試に懲役場裡を見よ、囚徒か苦役に呻吟して大辱を受くるは、畢竟渠れか欲心増長して、足るを知らざるの結果ならずや、故に我か現有する所の財産身分にて、充分なり不足なしと云ふを知らば、常に足りて心に不足の感念を起すとなし、不足の感念起らざる時は、外に求むる所なきを以て、身自ら安泰なり、天下の人々皆斯の如くなるときは、天下清静ならざるを得んや、  
仍は茲に一宵すべきをわり、欲心の爲めに戎馬を原野に弄するは素より本文論する所の如くなれども、兵も亦絶對的に廢止し得べきものにあらす、暴を禁し、亂を除く爲めには、已むを得ず、之を用ひざる可らず、湯武の帥、是なり、輒近本邦に征清の師を起すも、亦之に屬せり、

不出戸章第四十七

不出戸知天下不窺見天道

天地の理は、即ち我身の理なり、我身の理は、即ち天地の理なるを以て、天地の理を知らんと欲せば、之を我身の理に求むべく、我身の理を知らんと欲せば、之を天地の理に求むべし、要するに、我性は宇宙に充遍して、遠近古今の差異なきが故に、我身は、戸を出てすして、天下の事を知るべく、窺を窺はすして、坐ながら天道の妙用を見るべし、這は、聖人の心性は、萬物と一體なるを以てなり、

其出彌遠其知彌少

出は、心の外に走るを云ふ、即ち事物の爲めに心の迷ふとなり、故に前節の出は、身體に屬し、本節の出は、心に屬せり、

聖人の心は、外に走らざるが故に、戸闢の中に在て、天下の理を洞看するを得れども、衆人は、富貴聲色等の爲めに、心を奪はれ、迷ひを生じて、身は空禪の境となり、斯く心の外に出ると遠ければ、遠きほど、本然の智は、彌減少して、遂には全く之を失ふに至るべし、莊子の謂はゆる、螳螂か蟬を捕へんとして、身後に雀の己れを狙ふを知らず、雀は、螳螂を捕へんとして、身後に人の己れを狙ふを知らず、人は、雀を捕へんとして、身後に吏人の己れを咎むるを知らずとは、此れの謂なり、夫の明智光秀か叛を謀りしとき、端午

是以聖人不行而知不見而名不爲而成

の糲を包めるまゝ食へりとか、楚の白公か亂を興さんと謀りしとき杖を倒に植て、其銳にて願を傷つけ、血の流るゝを知らずとか云ふ如きは、本然の智の滅盡したる一證なり、  
是以聖人不行而知、不見而名、不爲而成。  
名は、名目を付くるを云ふ、韓非子には、名の字を、明の字に作り、  
前節に説きたる理由なるを以て、聖人は心を外に馳するをなく、道理に明かなるが故に、行か出づるを待たずして、偏く其處に至るが如く、其事を知れり、(此れは首句の不出戸の句を承く)、又聖人は、或る物の實物を見ざるも、其語を聞かば、道理に由て、之に名を付けり、(凡そ物あれば、名の有らざるもの無し、(此れは、前の不窺見の句を承く))故に聖人は、作爲する所を待たずして、事皆完成せり、(此れは、上の二句の効果を含むなり、)

爲學日益章第四十八

爲學日益爲道日損損之又損以至於無爲無爲而無不爲

孔子も「多聞擇其善者而從之。多見而識之。知之次也」と云へる如く、道を知らずして、學を務むるときは、聞見日々増益するも、道理の一貫せざるを以て、徒らに累ひを爲すのみ、苟も道を知りて、萬物を願視すれば、一として妄にあらざるは無し、其妄を去りて、以て性に復へるを求むるを損と名く、故に爲道日損と云へり、孔子謂子貢曰。女以予爲多學而識之者與。曰然非也。曰非也。予一以貫之は、粗之れに類せり、乃ち妄作有爲の事を減損して、性に復へるを求め、之を損したる上、又之を損し、損し盡くして復た損すべきもの無きに及へば、爲す無きに至るべし、爲す無きに至れば、反て天下の事々物々、爲さざる所なきなり、蓋し爲す有るものは、一事を爲せば、一事に過ぎず、十事を爲せば、十事に過ぎず、凡て天下の事、一々之れを爲さざる可らず、然るに、妄を去り、性に復へりて、無爲の道を得たる者は、天下の事に手を下さずして、天下自ら治る、己れは、無爲にして、手を拱するも、善く人に一任して、各其職に稱ふべきは、天下自ら治るべし、帝堯の舜禹益稷契皋陶を用ふるが如き、是なり、漢の高祖の良平等を用ひ、唐の太宗の房杜等を使ひしも、較之に近し、



取天下常以無事。及有事不足以取天下。

無事は、事とすると無さの意、即ち無為なり、有事は、其反對にて、作爲の痕迹あるを云ふ、物の性に随ひ、自然に任せて、毫も人為的の智術を事とせざる時は、百姓皆其徳に感化す、古來聖帝の常に天下を治むるの心なくして、天下自ら服するは、此れか爲めなり、爾き虚無自然の道を體するを能はずして、天下に事とするの心あるときは、作爲的痕迹、外に見はるゝを以て、天下を服するに足らず、況や天下を取らんとするの私心あるに於てかや、

聖人無常心章第四十九

聖人無常心。以百姓心爲心。善者吾善之。不善者吾亦善之。德善矣。

聖人の心は、適なく莫なく、進取主義とか、守舊主義とかの一方に偏する常心なく、唯百姓の心、即ち輿論公議を以て、己れが心と爲す、例へば、輿論公議か征清を唱ふれば、吾れも亦之を唱ふ、輿論公議か西洋美術の擴張を否認すれば、吾れも亦之を否認するか如し、而して、百姓の善者は、吾れ固より之を善とす、其不善も亦之を善として棄てず、玉石をして俱に其用を爲さしむるは、畢竟吾れ心徳の純粹潔白にして、一毫の私意なく、純善なればなり、

信者吾信之。不信者吾亦信之。德信矣。

世の信者は、吾れ固より之を信として敬待す、不信者も吾れ亦之を信して除かず、例へば、誠心より出てたる忠臣は、固より吾れ之を忠待す、名利の爲めに忠臣の様を爲す者も、吾れ亦之を忠臣視するか如し、何となれば、吾れ心の信誠は、彼の信不信に因て渝らざればなり、諸れを鏡に譬ふるに、清澄虚靈にして、一點の曇なきは、鏡の本体なり、鏡は、物の美醜を問はず、其来るに順應すれども、其物の去るに及んては、其本体に反へれり、聖人の心は、斯の如きのみ、

聖人在天下。儻儻爲天下。渾其心。百姓皆注其耳目。聖人皆孩之。

儻儻は、恐懼の貌、渾は、マロキと訓す、圭角なきを云ふ、又混同の意あり、孩は、嬰兒の僅に笑ふとを知るものなり、

るものなり、

世人は、各自ら是として、相非り相賊ひて、争論の止む時なかりし、聖人之れを憂へ、儻儻として其心を渾同圓活にし、善と無く悪と無く、信と無く偽と無く、皆同一に待遇せるを以て、天下の百姓は、皆その耳目を聖人の行爲に注げるも、聖人は、之を嬰兒視して、善に於ても、喜ふ所なく、悪に於ても、嫉む所なかりき、是の故に、善者は矜らず、悪者は憚らず、皆釋然として化成し、相争ふと無くして、天下自ら治りぬ、

出生入死章第五十

出生入死。生之徒十有三。死之徒十有三。動之死地亦十有三。

本來物性は、不生不死なるものなるに、世人の十中の九は、不生不死の理を辨せずして、或は生に出て、或は死に入れり、中に就て、平素間斷なく汲々役々形神を勞し、幾年も生即ち臭皮體を保つとを願へるものを生之徒と云ふ、斯の如きもの十中三に居れり、又其身の慾を恣にして、酒色に溺れ、精神體力、俱に衰耗して、死に至るものを、死之徒と云ふ、斯の如きもの十中三に居れり、又我れ無病健康なるにも拘らず、我れ生を保ち、壽を延はさんとして、漫に藥など服して、却て死地に陥り、天壽を損するものを動之死地と云ふ、斯の如きもの十中三に居れり、故に不生不死の理を知るものは、十中の一に過ぎざるのみ、

茲に不生不死の理を講せん、余嘗て莊子の「指窮於爲薪。火傳也。不知其盡也」を講し、とき、説きし如く、天地開闢以來千萬年の後に至るまで、上天下地の間に所有物の經續して絶へざるは、譬へば火の薪を得て相傳はるか如し、彼の薪を指て觀よ、薪此に盡れば、彼に續き、古より今に至る迄、火の盡くるを見ざるにあらざるや、此薪と彼の薪とは、一なりとは、云ふ可からざれども、火は一元氣なるを以て、此火と彼の火とは別なりとは云ふ可からず、故に火の傳るや、其盡くるを知らずと云ふ、死生の理も、斯の如く、我れ形骸は盡くるも、我れ精神は、盡くるものに非るなり、

夫何故以其生々之厚。

世人は、右の如く生を保たんとして、反て死を促すは、夫れ何の故なるぞ、這は其生を保たんとすると厚きに過ぎて、死を恐るゝを以てなり、裏面より説かば、生死を自然に任かすを知らざるを以てなり、



蓋聞善攝生者陸行不遇兕虎入軍不避甲兵兕無所投其角虎無所措其爪兵無所容其刃夫何故以其無死地

攝は、攝政の攝にて、カヌルと訓す、生は我が有にあらす、暫く之を管攝するの意なり、此處は、莊子の「入水不濡、入火不熱」と同旨にて、自然の道を悟りたる趣を形容し、ものなれば、文字に拘泥しては解す可らず、聞くか如きは、善く生を攝する者即ち十中の一に居れる聖人は、不生不死の中に在て、斯生を以て我が物と爲さず、虛静を以て、裏と爲し、柔弱を以て、表と爲し、塊然木石の無知なるか如く、侘然嬰兒の無欲なるか如くなるか故に、陸行しも兕虎に遇はず、軍に入り、戰に臨みても、甲兵を避けず、假令兕に遇ふも其角を投する所なし、虎も亦其爪を措く所なし、兵も亦其刃を容る、所なし、彼れ却て辟易するは、夫れ何の故なるが、是れ他なし、常に不生不死の中に在て、死地なきに因る、世人は妄に生を愛し、此等の物に對し恒怖の念を生じ、其害を避けんとすればこそ、反て死地に陥るなれ、

道生之章第五十一

道生之德蓄之物形之勢成之

道は、萬物の母にて、無なるもの故を、自見る可らず、口言ふ可らざれども、天地萬象皆な之に由りて往來すると、宛も人の道路を往來するが如くなるを以て、暫く之を名のけて道とは言ふなり、德は得なり、萬物の道より得たる性を云ふ、火の物を燃す性を得有し、水の物を潤はす性を得有するが如く、是れなり、勢はハツミと訓す、物の自然に成る趣を云ふ、

宇宙の萬物は、無なる道の力に據て生じ、各一德を蓄へて、それ／＼の物の形となり、勢に由て成就するものとす、一例を擧げて之を言は、山に木を生じ、水を生じ、鳥獸を生じ、水は魚類を生ずるは、道生之なり、既に生したる物には、燃ゆる性德を蓄ふるものあり、潤はす性德を蓄ふるものあり、飛ぶ性德を蓄ふるものあり、遊ぶ性德を蓄ふるものあり、是れ德蓄之なり、燃ゆる性德を蓄へたるものは、火の形となり、潤はす性德を蓄へたるものは、水の形となり、飛ぶ性德を蓄へたるものは、鳥の形となり、遊ぶ性德を蓄へたるものは、魚の形となる、此れ物形之なり、斯く漸々に物の形をなすに至るは、全く自然の勢に由て成就するものとす、此れ勢成之なり、仍は當時の事に就て、之を言は、我が琉球臺灣を略取し、仍は西進南略するの勢力あるも、我れに道德の蓄養あるに因りて、爾る形を假し、自然の勢に因りて、之を成すなり、故に此等の事を名けて形勢と云ふ、

是以萬物莫不尊道而貴德道之尊德之貴夫莫之命而常自然

形は物に出で、物の成るは、勢に由ると雖も、道に非れば生せず、德に非れば蓄ふを得ざるを以て、萬物の本つく所は道と德とに在り、是を以て萬物は道を尊びて德を貴はると莫し、夫れ人の尊貴は、必ず之を命するものあり、天子の尊きは、上帝之れを命して然後尊く、諸侯の貴きは、天子之れを命して然後貴く、獨り、道の尊き德の貴きは、之を命するに非ずして、常に自ら尊貴なり、

故道生之德蓄之長之育之成之熟之養之覆之生而不有爲而不恃長而不宰是謂玄德

覆は、オホマと訓す、庇蔭を蒙らしむる意なり、

故に道は萬物を生ず、萬物は各一德を蓄ふ、道は一德を蓄へる萬物を長育成熟して愛養庇覆しぬ、例へば、道か蓬は蓬たらしめ、麻は麻たらしむるは、長之育之なり、又た蓬は灸すべく、麻は績むべくならしむるは、成之熟之なり、又之れを養ひて覆ひたすは、蓬の地に横布し、麻の地に直立するの生を遂げしめ、梅兩の浸潤にも腐れず、六月の炎熱にも枯れしめざるは、養之覆之なり、萬物皆な此の如く、一として道の力に因て生せざるものは莫けれども、道は己に其勢有りとせず、實に萬物の生するは、道の爲す所なれども、道は恃んで以て、己れか功とせず、固より萬物の長するも、道の力なれども、道は其主宰とならず、斯く道は萬物に對し、恩徳ありながら、道自ら茲に居らざるは、玄深なる徳とこそ謂ふ可けれ、人若し斯道を理會し得て、人に恩徳を施し、毫も之を色に顯はさるるときは、亦以て玄德と謂ふ可し、舜を稱して、玄德升聞すと云ひ、湯を稱して玄王桓撥と云ふは、乃ち是なり、



天下有始章第五十二

天下有始以爲天下母。

始は、「無名天地之始」の始めにて、道と云ふに異ならず、母は、養ひ育つるの意にて、「有名萬物之母」の母と同意なり。

凡そ天下のもの其始め有らざるはなし、其始めは、即ち道に外ならず、道は聲も無く、形も無く、色も無けれど、天下萬物の元始となりて、之を生成化育する所の母となり。

既知其母復知其子既知其子復守其母沒身不殆。

前に論したるが如く、道は造化の始にして、萬物の母なり、我々萬物は、總て造化の一分子、即ち道の子なり、故に人既に無爲自然の道を辨知したれば、又能く萬物萬事の道理を辨知せざる可らず、(易の謂はゆる「智周萬物」とは是なり)既に能く萬物萬事の道理を辨知したるときは、萬事に手を下すと無く、退て萬物の母たる無爲の道を守らざる可らず、斯の如くなるときは、身を没するまで危殆の事に遇ふと無し、蓋し萬物萬事の道理を辨知せざるは、固より愚なれども、之を辨知したるか爲め、萬事に手を下すは危し、之を辨知しなから、手を束ねて退守すること、身を保つるの要なれど、猶ほ人能く法律を知るは可なれども、漫に之を使用するは不可なりと云ふか如し、之を要するに、世人か無爲の道を知らずして、權謀百出の行爲を爲して危殆に陥るを戒めたるものなり。

塞其兌閉其門終身不勤開其兌濟其事終身不救。

兌は、口なり、或は云ふ、兌は、詩經の註にも「成蹊也。通也。」とあるか如く、トホルと訓す、いさ抜けの路なり、人欲の限りなく生ずると、いさ抜けの路の如くなるを以て、心のとを兌と云ふと、亦通す、門は人の出入する處なり。

人能く欲心の口を塞ぎ、欲心の出入する處を閉つれば、終身勤勞せずして、常に安泰なり、若し之に反し、欲心の口を開き、欲心の出るまゝに其事を濟せば、欲心愈々出て、愈々止まず、終に救ふ可らざるに至る

見小曰明。

なり、無住國師の謂はゆる、「一生遺希望不盡」とは、是れを謂ふなり、

小とは、微小の意にて、カスカと訓す、事の未だ巨大ならざるを云ふ、

事物の顯然巨大なるに及んで、其利害得失を見るは、誰れにても爲し能ふとにて、未だ以て明と云ふ可らず、我心に一念起りたるを、其心の良否善惡を看破するを明とは云ふなり、物皆然り、凡そ事物の顯然巨大に至らざる時、即ち微妙なる場合に於て、其利害得失を看破すること明なれ、

守柔曰強。

「北宮黝之養勇也。不膚撓。不目逃。思以一毫挫於人。若撻之於市朝。不受於褐寬博。亦不受於萬乘之君。視刺。刺萬乘之君。若刺褐夫。無嚴諸侯。惡聲至。必反之。」斯の如きは、強は則ち強なれども、智を以て之を役すれば、亦以て役すべく、反て折れ易きに依り、未だ以て眞の強と云ふ可らず、夫の柳枝か甚麼なる大雪を受くるも、折れざるか如く、善く柔を守るものこそ、眞の強なれ、曾子の謂ゆる「自反而不縮。雖積寬博。吾不懼焉。」は、至柔なれども、其「自反而縮。雖千萬人。吾往矣。」は、亦至強に非ずや、則ち至強は、至柔中に存するものと知るへし、

用其光復歸其明無遺身殃是謂習常。

光は、外に於て光輝を放つを云ふ、耳の能く聴き、目の能く見、鼻の能く臭き、口の能く嘗むるか如きは是なり、明は、心の本心の本體にて、謂はゆる虚靈不昧なるものなり、習は重ぬるなり、一本に製に作れり、其意は相異ならず、便ち習常は、幾萬年を重ねるも變せざる意なり、聖人は外物の爲めに役せられずと雖も、耳目口鼻の作用を拒絶するにあらず、唯我神を以て外物に應し、其光を用ふるも、其欲に流れざるのみ、美色の目に觸れ、美聲の耳に入るに應すと雖も、我心の明猶ほ、毫も役せられず、嘗へは、鏡の物を照らすか如し、鏡は外物の來るに應して、之を照らすと雖も、鏡の本體たる至明を損せず、其物の去るに及んては、少しも其痕跡を存せざるなり、聖人も亦此の如く、外物に應して、



其光を用ふるも、本體の明徳に復歸して、外物の痕跡を胸裏に止めざるを以て、一身の殃を遺すと無し、爾  
きとは、徹頭徹尾幾萬年を重ねるも變ぜざるか故に、之を名けて、習常とは云ふなり。

使我介然章第五十三

使我介然有知行於大道唯施是畏

介は、一介の介にて、微少の意なり、翼註に「介然猶言微也」と註し、は當れり、知は易繫辭傳の「乾知大  
始」の知にて、ツカサトルと訓す、即ち知事の知と同じ意なり。

世人か天下國家を治むるは、法律規則、若くは仁義禮智等に據て、種々百般の政事を施せども、我(老子)を  
して、天下の事を知りて、大道を行はしめは、無爲自然の道を根據と爲すか故に、人爲的の政事を施すとを  
畏れり。

大道甚夷而民好徑

夷は、平なり、私曲なきを云ふ、徑は、邪路、即ち路の狭く近くして、大道に反するものを云ふ、

大道は甚た平夷坦直にして、毫も邪曲ある無し、之に由りて世を治め、之れに由りて身を保つときは、復た  
慮を焦し、心を苦しむるを無かる可し、然に世人は此大道を捨て、曲徑邪路を好み、

朝甚除田甚蕪食甚虛服文綵帶利劍厭飲食財貨有餘是謂盜夸非道哉

朝は朝廷なり、除は、掃除の除にて、清潔の意なり、夸は誇と同じ、盜夸は盜賊か人の物を竊取して、身を  
飾りて、人に誇る意なり、

世の人は、邪路曲徑に由りて、自然の大道に由らざるか故に、諷に租税を課し、民の膏血を絞りて、我か  
朝廷の建築等を甚た消除美麗にするを以て、田疇は甚た荒蕪し、倉庫府庫も、甚た虚ぶして、凶年の備へを  
爲すを能はず、然るに己れは、文綵華美の衣を服し、銳利の名劍を帯ひ、飲食美味に飽き、財貨を貯ふると  
餘あり、道は皆な民財を收斂して、奢侈逸樂を極むるものなれば、盜賊か人の財物を竊取して、其同類に誇  
示するに異ならず、故に之を名けて、盜夸とは云ふなり、(韓非子には、盜夸を盜竿に作り、竿は、音樂を

奏するとき、先づ唱ふるものなり、人君か民財を掠めて、奢侈逸樂を極むるは、人民に盜賊の所爲を唱へ示  
すに同じとの意なり。

善建不拔章第五十四

善建者不拔善抱者不脫子孫祭祀不輟

一木を平地の上に植ゆれば、必ず抜けて倒仆するの時あり、一物を兩手の中に持すれば、必ず脱して離去す  
るの日あり、然るに、善く建つる者は、不建を以て建と爲すか故に、永く抜けず、善く抱く者は、不抱は以  
て抱と爲すか故に、永く脱せず、保國保家の延祚に善き者も、亦之れと同じく天命を留むるは心なくして、  
天命自ら留まり、其子孫世々斷續して、祭祀輟まざるなり、

脩之於身其德乃眞脩之於家其德乃餘脩之於郷其德乃長脩之於邦其德  
乃豊脩之於天下其德乃普

之は、前節不建不抱の道を指す、眞は、誠實にして、偽ならざるを云ふ、餘は、多き意なり、長は、大の意な  
り、邦と豊とは、叶韻なり、一本には、邦を國に作り、漢人高帝の諱を避けて、之を改めしと云ふ、

不建不抱の道を以て、其身を脩むるときは、其徳純朴にして偽り無し、之を以て其家を脩むるときは、十二  
分の餘徳ありて、一家和合す、之を以て其郷を脩むるときは、其徳長大にして一郷親睦す、尙ほ一層進んで之  
を一國に用ふるときは、其徳豊博にして、家々足り人々給して、一毫の不足ある無し、更に進んで之を天下  
に用ふるときは、其徳普偏して一夫一婦も其所を得ざる無し、不建不抱の道とは、辭を替へて之を云はば、  
自然の常道と云ふに異ならず、夫の仁義の道の如きも、老子の目より見るときは、人爲建抱的の道に屬す、  
仁義てよの美名を得るこそ、之を假りて、天下を治むるの具と爲すなれ、

故以身觀身以家觀家以郷觀郷以國觀國以天下觀天下

以<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>身とは、吾か身に於て自然に具はりたる道、即ち不建不抱の道を以て、吾か身を觀て脩むとの謂な  
り、之を裏面より解くときは、外物即ち仁義等の教を以て、吾か身を脩めずとの謂に外ならず、以<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>家



以下皆な然り、便ち一家を治むるには、自ら其家に具はりたる道あり、一郷を治むるにも、自ら其家に具はりたる道あり、一國を治むるにも、自ら其國に具はりたる道あり、天下を治むるにも、自ら天下を治むるの道あり、決して隣家他郷外國等の道に頼らず、只自然の道に任かすのみ、

吾何以知天下然哉。以此。

此は、上に云ふ所のとを指すなり、

天下の廣き、萬民の多き、千差萬別も管ならされは、一身を脩むるの理を以ては、天下は治む可らざるに似たり、故に天下を治るも、一身を脩むると同然なるやと自問を發して、前に説きたる道理と同一理なりと自答せり、第四十七章にも説きたるが如く、天地の理は、即ち我身の理なり、我身の理は、即ち天地の理なるを以て、天地の理を知らんと欲せば、之を我身の理に求むべく、我身の理を知らんと欲せば、之を天地の理に求むべし、要するに、我性は宇宙に充偏して、遠近古今の差異なきか故に、我身は、戸を出てすして、天下の事を知るべく、隅を窺はずして、坐ながら天道の妙用を見るべし、道は聖人の心性は、萬物と一體なるを以てなり、

含德之厚章第五十五

含德之厚。比于赤子。

含德は、徳を内に包有して、外に顯はれざる意なり、比は、ヒトシと訓す、赤子は嬰兒と云ふに同じ、凡そ物の絶へて無きを赤と云ふ、故に心に絶へて私欲なきを赤心と云ひ、家に絶へて財産なきを赤貧と云ふ、嬰兒は無我無心にして、絶へて思慮なきを以て、赤子とは云ふなり、道徳を包有すのの厚きものは、其心中澹然として、毫も外に求むるを無きと、宛も赤子の無我無心なるに比し、孟子が「大人者不失赤子之心」と云ひしも、亦同一意なり、

毒蟲不螫。猛獸不據。攫鳥不搏。

毒蟲は、蜂蠆の類を云ふ、螫はサメと訓す、尾端の鋒を以て其毒を移すを云ふ、猛獸は虎豹の類を云ふ、據

はツカムと訓す、爪足を以て攀むと云ふ、攫鳥は、鷹鷹の類を云ふ、搏は、ハツツと訓す、翼距を以て攀つと云ふ、

凡そ人の災害に罹るは、我に求むる所ありて物を犯せばこそ、物來りて害を我に加ふるなれ、無我無心なる含徳の人は、外に求むる所なく、物を敵視せざるが故に、毒蟲猛獸攫鳥の如きものも、妄りに害を我に加へざるなり、(第五十章も參看す可し、)

骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而峻作精之至也。

牝牡之合は、男女の交接を云ふ、峻は威反、赤子の陰莖なり、

道徳の本體は、柔弱なるものなれども、其中に自ら強精なるもの、存するあり、譬へば、赤子の骨格筋脈は頗る柔弱なれども、赤子か物を握り特つときは、甚だ強固にして、大人も及ばぬ程なるか如し、又赤子は、柔軟にして、未だ男女交接の情をも知らざれども、其陰莖の勃然として作つものは、發育の精氣強ければなり、聖人は、至柔にして、物に抗抵するの心なければども、其能く剛を制するものは、至柔中に剛精の氣あればなり、

終日號而嗷。和之至也。

號は、叫ひ啼くなり、嗷は、ムセブと訓す、嗚咽して啼き入るとなり、嗷は、聲の乾るゝを云ふ、

赤子か終日號泣して嗚咽歎歎するも、其聲嗷々に至らざるものは、其心に一毫の逆氣なく、至和純一の氣の存するを以てのみ、即ち外物の刺激に因り、憤怒悲哀する所ありて然るに非ればなり、朱子云ふ「赤子の心は、未だ知る所わらず、故に純一にして偽なし」と信なる説言や、含徳の人も、亦斯の如く、至和純一にして、外物の爲めに動搖せられざるか故に、毒蟲猛獸等にも害を受けざるなり、

知和曰常。知常曰明。

赤子の如く至和純一は、道徳の根柢なり、之れを知るは、常久不變の道を知りたるものと云ふ可く、常久不變の道を知りたるものは、湛然至明の道體に明かなりと云ふ可し、



益生曰祥。心使氣曰強。

祥は、ツヅクといふ訓す、殃の意なり、本来祥は吉凶の總名にて、分て之を言へば、吉事を祥と云ひ、凶事を妖と云ふ、然とも吉凶を混して祥と云ふとあり、左傳傳公十六年の「是何祥吉凶焉在」是れなり、此處は凶事のみを用ひたるものとす、氣は血氣の氣にて、身軀の奔走運動するものを云ふ、強は強梁の強にて、強暴狂剛の所爲を云ふ、

凡そ生を天地間に禀け、其生を保つには、自然の適度あり、其の適度を過きて、生を益養するときは、却て殃を招くものとす、赤子に大人同様の滋養物を與ふるときは、其發達を害すると必然なり、大人にても、牛乳鶏卵は滋養の功われはどて、度外に之を飲食すれば、必ず衛生に害あるへし、(富貴の者に疾病多きは、生を度外に益するの殃なると知るべし) 夫れ心は、全身の主人にして、神明の宿る所なれば、赤子の純一無爲なるか如くならざる可らず、若し然らずして、外物に役せられ、血氣を使ひ、肉體の欲を、恣まゝにするときは、至和柔順の道に反するを以て、強暴狂剛の所爲とは云ふなり、(癩積又酒氣に乗して事を爲す如きは、其最も甚しきものなり)

物壯將老。謂之不道。不道早已。

夫れ赤子の如く至和純一にして、柔弱なるときは、折るゝと無く、挽ひと無く、永く其終りを保つを得へし、若し然らずして、生を益し、氣を使ひて、強壯を極むるときは、必ず老ひ必ず折るゝものとす、斯の如きは、至和至弱の道に反するを以て、之を不道と謂ふ、既に不道なる以上は、常久不變なる能はずして、早く已み難るゝものとす、

知者不言。言者不知。

人あり、東洋の食王たる米の味を問は、甘ひとも辛ひとも、其の妙味言ふ可らず、道も亦た斯の如く、眞の道を知る者は、之を言ふ能はず、故に之れを言はざるなり、臆にも味増の味増臭きは、上味増にあらす、

塞其兌。閉其門。挫其銳。解其紛。和其光。同其塵。是謂玄同。

塞其兌。云々の六字は、第五十二章の註を見るへし、

聖人は、不言の教を行ふか故に、言語の出づる口を塞ぎ、欲心の入る門を閉ちて、一切出入を禁せり、凡そ鋒の鋭きもの折れ易きに因り之を挫きて、心の紛糾悶亂を解きぬ、己れか才能を世に見はすときは、必ず人に惡されて害を蒙るもの故に、其光を混和して輝かさず、世塵と共に推し移り、俗に隨て獨異するを無きとすは、玄妙自然の道に默契するを以て、之を名けて玄同とは謂ふなり、

故不可得而親。亦不可得而疎。不可得而利。亦不可得而害。不可得而貴。亦不可得而賤。故爲天下貴。

親疎利害貴賤等は、彼我比較的の名目にして、哲理上より觀察し來れば、此等の區別あるべきものにあらす、畢竟我れ此物を親めはこそ、他の物に對しては、疎の名を生ずるなれ、我れ此に利を得るとあればこそ、他に於て害なる名を生ずるなれ、貴賤等も亦斯の如し、獨り自然の道は、親疎彼我の別なく、利害貴賤の差なきか故に、得て親む可らずれば、亦得て疎んず可らず、得て利す可らずれば、亦得て害す可らず、得て貴ふ可らずれば、亦得て賤む可らず、此れ道の天下に於て、無比的に貴き所以なり、迺ち無比的の道を體認したる者の眼中には、貴賤上下等の區別は無かるへし、然れど、人は俗塵中に生息せざるを得ざるを以て、其光を和し、其鋭を挫きて、之れを口外に出たさず、故に之を名けて、玄同と云へり

以正治國。以奇用兵。以無事取天下。

古の聖人か、遠きを柔け、遠きを能くするに於て兵を用ふるの意なし、唯已むを得ざるの場合に、征伐を爲せり、故に國を治むるを以て、正と爲し、兵を用ふるを以て奇と爲す、便ち奇は、僅に兵を用ふるに施す可



まも、以て國を治む可らず、正は、備に國を治むるに施す可きも、以て天下を取らざる可らず、無事即ち三皇無  
爲の治は、天言はすして四時行はれ、百物生ずるか如し、人の服従を期せずして、天下服従せざる無し、是  
を以て、無事は、以て天下を取らざるべし、

吾何以知其然哉、以此

其然は、「以無事取天下」の句を指す、此は、「天下多忌諱」以下八句を指す、或は云ふ、以上の句は、  
前章に屬す、故に此は、空同を指す、又一本には、說以此の三字無し、

天下多忌諱而民彌貧

忌諱は、イミキヲフと訓する字にて、法律禁令を云ふなり、  
世の漸く降るに従て、天下を治むるは自然の道に由らずして、人の忌諱すへは法律禁令を以て、人民を屈服  
せり、法律禁令愈々増加すれば、人民愈々束縛せられて、手足を措く處なく、自由なる生計を營むる能はざ  
るを以て、彌々貧境に陥るに至れり、(余は此論に服せず)

民多利器國家滋昏

利器は、武器の便利なるものを云ふ、即ち今日の鉄砲、軍艦、水雷等の如きものなり、  
兵器は、文明の利器と云ふ如く、愈々巧みにして愈々多きときは、國家愈々強盛なるか如くなれども、老子の目  
より視れば、國家滋々昏亂するものと爲せり、蓋し上古先王が矛戟、戈、矟、矢等を作りしは、之を以て、天下を  
威し亂を防ぐの旨意なりしが、後世鉄砲等の利器漸く増加するに従て、戦争強暴漸く増加し、國家滋々昏亂す  
との意なるん、(余の所見は此れと相反す)

人多技巧奇物滋起

凡そ器物は、衣食住の日用品に供するに足れば可なり、然るに世の漸く降るに従て、人民本務を忘れて、末  
技の巧利のみ走りぬ、故に田疇荒蕪して、無用の珍物滋々起れり、昔者周の太保か武王を戒めて、「不貴  
異物、賤用物、財乃足」と云ひしも此旨意に外ならず、(西洋の經濟論より視るときは必しも然らず)

法令滋彰盜賊多有

法令は、本と人の奸詐を防ぎ盜賊を止めんが爲の具なれども、人民本務を忘れ、末技の巧利のみに走るときは、  
國家衰弊して、盜賊起らざるを得ず、盜賊起るときは、法令を以て之を禁せざるを得ず、其甚しきは、偶語  
を禁し、齋灰を刑せり、故に下民動けば法に觸るゝを以て、手足を措く所なく、遂に窮して盜賊多く有るに  
至るなり、(本來法令は、人民の生命、財産、及び自由を保護するものにて、暴法禁令に非ざるべし)如何  
に多ければとて、盜賊を生ずるの原因を爲すものにあらず、故に此處の法令は、刑法的の法令を指したるも  
のを知るべし、

故聖人云我無爲而民自化我好靜而民自正我無事而民自富我無欲而民  
自朴

故に古聖人の教に云ふ、我れ無爲にして、智巧を用ひざるときは、人民自ら善に化すべし、我れ靜を好みて、  
躁かざるときは、人民自ら正を守るべし、我れ無事にして、事を起さざるときは、人民自ら富饒なるべし、  
我れ無欲にして、世に求むる無きときは、人民自ら質朴なるべし、乃ち上の好む所は、下必ず従ふの理を知  
るべし、(政治は、人民品行の反射の説と正に相反するものとす)

其政悶悶章第五十八

其政悶々其民醇々其政察々其民缺々

悶々は、暗き貌、醇々は、厚き貌、薄情ならざるを云ふ、察々は、明かなる貌、悶々の反對なり、缺々は、  
不満足の貌、

無爲自然に任せる聖人の政は、施政の形迹なきを以て、悶々として暗きか如くなれども、其民は忠信朴實に  
して、其分に安んじ、弊を醇々として、毫も巧詐の風なかりき、刑名法律等を主とし、道徳を重んぜざる政  
事は、其政迹察々として著明なれども、其民は本を忘れて、末に走るか故に、缺々として、常に不満足



禍兮福之所倚、福兮禍之所伏、孰知其極、其無止。

の想を爲して、分に安んずるを能はず、  
「人間萬事塞王馬」と云ふ如く、禍福の往來は、晝夜寒暑の相倚るに均しきものなれば、禍あるも憂ふるに足らず、福あるも喜ぶに足らず、然るに世の俗物は、禍福貧賤の相倚伏するを知らざるか故に、禍福は永續するものと思ひぬ、實に禍福は、日月の盈虚消長の理と同一にして、福極まれば、禍となり、禍極れば福となり、其理相倚伏して止むを無かりき、試に本邦の近史に就て看よ、嘗て長州が朝敵の汗名を蒙り、幕府の討伐に遇ひ、四境を圍まる、其危殆なること累卵の如く、其困難想ふ可し、然れども、其禍中には、明治維新の福を倚寓し、遂に其臣下は、天下の政柄を掌握し、其君は、公爵の榮を受けらるゝに至れりと雖ども、政黨樹立するに及んで、憲政黨の爲めに其福を剝奪さるゝに非ずや、又安政年前舊幕の旗本か、大祿を食みて、逸樂に太平を送りしは、人生の大福なれども其福中には、伏見大敗の禍を伏し、竟に徳川氏の瓦解となり、故に今日旗本が車夫となり馬丁となる者あるは、其祖父か安逸素養せし報ひと云はざる可らず、然りと雖も、此禍は、異日如何なる禍の原因となるを知らんや、現に會津の士族は、王帥に抗したるか爲め、家祿を召し上げられ、非常の困苦を窮めしが、其困苦窮りとなりて、非常の勉強心を起し、今日にては、他縣の士族よりも、反て活途の方法を立てしと云ふ、之を要するに、本節は、禍福吉凶は、循環なきものゆゑ、齒牙の間に積くに足らすとの意なり、况や夫の三日大臣の若きは、福を爲すに足らざる也、(以上哲理)と雖、幸福即ち富貴の位地に在る者は、能く其身を謙遜するときは、久しく其位地を保つべく、災禍即ち貧賤に生れたる者も、能く儉勤するときは、幸福の春に遭遇すべし、(以上道德)

正復爲奇、善復爲妖、人之迷、其日固久。

奇は、正の反對にて、イッハリと訓す、正奇の字は、本と兵法より出てたる字なり、妖は、善の反對にて、ワザハイと訓す、  
政の言たる正なり、即ち天下の不正を正す意なり、天下の不正を正すは、不惡的の故、之を善とも云へ

是以聖人方而不割、廉而不剌、直而不肆、光而不耀。

り夫れ自然の道に任ずるを知らずして、作爲的の政事を施すときは、民その政事に堪へずして、奇僞妖智を弄し、人々相欺き、竟に國家を争擾するに至れり、斯く正の奇となり、善の妖となるを知らざるは、今日の人に始まるにわらず、往日よりの迷ひなり、  
是以聖人方而不割、廉而不剌、直而不肆、光而不耀。  
割は、ケヅル、又サツと訓す、毀損の意なり、割はヤブル、又ソコナフと訓す、  
凡そ方正なるものは、人の不正を矯めんとて人を毀損し易きものなれども、聖人の徳は、玉の如くにして、察々たる鋒芒なきを以て、方正にして毀損するを無し、凡そ物の稜角あるものは、他物に觸れて、傷害し易きものなれども、聖人は清廉なるも、其中に和氣を含み、清廉に拘束されざるを以て、他物を傷むを無し、凡そ直なるものは、人の不直を容るゝを能はざるを以て、肆に人の惡を發きて彈劾するものなれども、聖人の直は然らず、人の不直は、不直に任せて、必しも直不直の別を立てず、決して己れか直を肆にして、人の惡を露發せざりき、而して、聖人の光りは、尋常一般の光りに殊なり、所謂和光同塵にて、其光は大に耀かず、一見すれば、光りに乏しきか如し、譬へは月光の如し、月光は、電氣燈の光の如く、輝々然たらされども、五大洲照さる所なし、聖人の政は、閃々として暗く、察々の光輝は有らされども、其民淳々として、其光澤を被ひれり、世人は此理に暗ければこそ、察々たる作爲的の政を爲すなれ、

治人事天章第五十九

治人事天莫若嗇。

天は、心の天、即ち精神の事なり、嗇は、ヲシムと訓する字なれども、金錢等に吝嗇なる謂にわらず、精神氣力を齎みて衰耗せしめざるを云ふ、朱子學の所謂存養は、頗る嗇に類似す、  
世人は、天下の人民を治るに、法律政略等を以てし、人の天に事ふるには、種々の宗教等を以てすれども、皆其効なきものとす、唯効なきのみならず、却て害あるものとす、故に人を治め天に事ふるには、我が精神を勞するを無く、我が氣力を耗する無く、之を自然に任ずるに若くは莫し、



夫唯齋是謂早服。早服謂之重積德。

服は服膺の服にて、行ふの意なり、  
凡て世人は、壯年の時には、身體血氣の盛なるに任せて、毫も養生に心を用ひざりしか、年老ひ身衰へ精神氣力乏きに及んで、始て衛生に注意せり、這は六日の葛蒲、十日の菊に同じ、嗚呼、亦晚ひ哉、是を以て壯年より精神氣力を蓄みて、修養を服行するを名けて、早行とは云ふなり、斯く早くより修養を服行するは、自然の道徳を内に積み重ねるを以て、重積徳と名く、  
重積徳則無不克。無不克則莫知其極。莫知其極可以有國。有國之母可以長久。

母は、根本の意なり、即ち重積徳を指す、  
自然の道徳を、内に積み重ねるときは、萬事萬端に應じて、克くせざるを無し、萬事萬端に應じて、克くせざると無き程なれば、其蘊奥甚だ深きを以て、大海の水の如く、渺々浩蕩として、其極る所を知るを無し、其極る所を知る所を知るを無き者にして始て國家を有つを得へし、畢竟國家を有つる母本たる重積徳のればこそ、國家を長久に維持するを得べけれ、  
是謂深根固柢。長生久視之道。

根は、横に廣がる根なり、柢は、堅に深く入る根なり、  
前に論ずるか如く、精神氣力を全ふして、自然の道徳を重積するを、根を深くし、柢を固くすと謂ふ、根柢既に深固なるときは、長壽を保ち視力を久しく衰へしめざるの道を得たるものとす、夫の滋養物を食ひ、運動を爲すか如きは、養生の末にて、未だ根を深くし、柢を固くしたるものと云ふ可らず、又夫の仁政を施し、法令を善くするか如きも、經國の末にて、長生久視の道を得たるものに非るなり、

治大國若烹小鮮。

治大國章第六十

小鮮は、小魚なり、

小魚を烹るに、匙箸等を以て、掻き刺はすときは、必ず亂れ碎けて、骨も肉も辨す可らざるに至る可し、故に小魚を烹るには、其形の儘にて、安然烹るを要す、大國を治むも亦然り、政府が許多の法令等を設け、人民の事に關涉して騒ぎ廻はすときは、國家錯亂して收拾す可らざるに至るべし、故に大國を治るには、自然に任して、人民の事に關涉せざるを善しとす、  
以道蒞天下。其鬼不神。

鬼も亦神なり、分て之を云ふときは、天の神を天神と云ふ、地の神を地祇と云ひ、人の神を人鬼と云ふなり、不神の神は、神威を弄して、崇爲すを云ふ、

凡そ人に不正の所爲あるときは、鬼神は災を降して崇りを爲し、君主は刑を施して罰すべきものとす、然るに虛無自然の道を以て、天下に蒞むときは、一毫の不正なきを以て、人鬼も世に神威を降して罰を當つる所なし、

非其鬼不神。其神不傷人。

唯人鬼か神を爲さざるのみならず、天神も亦災を降して世人を傷害せず、

非天神不傷人。聖人亦不傷人。

唯天神か災を降して世人を傷害せざるのみならず、聖人なる王者も亦不正の所爲なき者には刑罰を施して、其人を傷害するを得ず、

夫兩不相傷。故德交歸焉。

兩とは、鬼神と聖人とを云ふ、

夫れ天地の間、幽に在ては則ち鬼神あり、明に在ては則ち聖人ありて、不正の人を罰し給へしものなれども、今鬼神も聖人も兩ながら世人を傷ひ給ふを無く、天下の人民、心泰く身安くして、無事に世を送るに至るは、畢竟人君か虛無自然の道を以て、天下に蒞み、小鮮を烹るか如く、天下の事に關涉せざればこそ、天下の人



民、交々其德に歸服せる結果を來たすなれ、

### 大國者下流章第六十一

#### 大國者下流

小國の人に下るは、固より其所なれば、人に下るも、著しる功も見されども、大國にして人に下るときは、較然たる効驗ありて、人の感服すると、恰も水の流るゝか如し、夫の清國の亂れて治まらざるは、畢竟自ら尊大に構へて毫も人に下るの度量なきを以てに非ずや、

#### 天下之交。天下之牝。

交は人の我に交り求めて、歸服する意なり  
天下の各國か、交りを我に求めて歸服するは、我れ兵馬の力を假りて、他を壓服すの心なく、柔順なると、牝獸の如くなればなり、(米國頗る之に似たり) 我れ即し十二分の兵力を蓄へ、剛勇を誇示するときは、必ず對抗の敵を招き、決して他をして心服せしむるを能はず、斯の如きものは、天下の牡獸とこそ謂ふ可けれ、  
(英、佛、獨等頗る之に似たり)

#### 牝常以靜勝牡以靜爲下。故大國以下小國則取小國。小國以下大國則取大國。

取小國の取は、奪ひ取るの意にあらす、取り懐くるの意なり、取大國の取は、取り入るの意にて、愛顧らるゝを云ふ、  
牝の常に能く靜柔を以て、剛勇なる牡に勝ちて、自由自在に引き回すは、其能く牡に下りて高ふる様子なく、靜かにして躁がしからざるを以てなり、(高尾か仙臺の殿様に殺されたるは、高ぶりに下るを能はざるを以てなり、福地源一郎氏か、吉原青樓の類に「柔能制剛」と書きたるは、老子の眞髓を穿ちたるものと謂ふ可し) 此道理に依り、我れは大國でありながら、高ぶるとなく、能く小國に下るときは、其國を取り懐くるを得へし、我邦の朝鮮に於けるは、朝鮮人の性質等の關係に由りて、純然此主義は取る可らされど、高慢

#### 故或下以取。或下而取。大國不過欲兼蓄人。小國不過欲入事人。

不遜にては彼れを服せしむ可らず、小國の大國に事ふるには、蕪娼妓か客人に接するか如く、尾を垂れ頭を下げて、其意を迎ふるときは、大國に愛顧されて、其國を保持するを得へし、(我邦の西洋諸強國に交る漫に無禮の禮を盡すときは、唯々我か國威を損するのみならず、却て彼の侮りを受くるを以て、卑屈なる可らずと雖も、傲慢以て彼の歎心を失ふ可らず、清人は常に自ら尊大に構へて中華と稱し、我邦を夷狄視して、倭主倭奴倭會など呼へり、何を其れ傲慢無禮の甚しきや、此れ其請降の恥を受くる原因なる歟、老子は其國土に生れたる人でありながら、清人は曾て老子の趣意を辨せらるものと謂ふ可し)

#### 夫兩者各得其所。欲大者宜爲下。

夫れ大國小國の兩者とも、謙遜下降すれば、各々其欲する所の目的を達するを得へし、就中小國か謙遜下降の得策たるは、人の知り易きことなれども、大國は兎角干戈甲兵の威力を假りて他を壓服せんと欲し、却て自ら滅亡を招くの例、古今珍しからず、是を以て大國たる者は、宜しく殊に謙遜下降の禮を盡して、邦國を維持すへし、

蓋し本章は、老子當時大小の國が攻撃傲慢の狀あるを見て述へたる國際法なれども、人々相互の關係亦此理に均しく、尊卑上下を問はず、謙遜下降なるときは、長く其身を保つへし、易繁辭傳の所謂「謙也者、致恭、以存其位者也」も、亦此意に外ならず、

#### 道者萬物之奧。善人之寶。不善人之所保。

道者萬物之奧。善人之寶。不善人之所保。  
奧は、室の西南隅、即ち未申の方にて、尊長の居る所なり。善人、不善人は、主として資質上の善惡に就て云ふ、故に善人も、未だ聖人に至らざる者なり。不善人も未だ罪人惡人には至らざる者なり、



虚無自然の道は、事物の由て出る所にして、萬物の大源なり、之を家室に譬ふれば、玄關、客室、臺所の如き、見易き處にあらすして深遠なる奥を占め、主人公の常居する所なり、而して、斯道は廣大無比にして善不善の別を立てざるか故に善人は固より斯道を尊敬實視す、不善人も亦斯道に由て以て其身を保つを得べし。

美言可以市、尊行可以加人。

美言は、商人が商品を譽め立つる口上なり、尊行は、尊ふべき行ひ、即ち善行と云ふに同じ、加人は、人の上に立つ意なり、

道の誰れ彼れを問はず、必要なる例を擧ぐれば、商人も商品を譽むればこそ、市ひもあるへけれ、是れ商法の自然の道なり、若し自ら其商品を悪しく云ひたれば、誰れか之を買ふものあらんや、郷黨中にて、忠信篤實の尊ふべき善行あるときは、郷黨の人、皆之を尊敬して、人の上に加へ置くべし、是又自然の道なり、人之不善、何棄之有、故立天子置三公、雖有拱壁以先駟馬、不如坐進此道。

拱壁は兩手を以て擁へる程の大壁なり、駟馬は、四匹立ての馬車なり、

畢竟人の不善なるは、自然の道知らざるに因り、人若し斯道を知りたる以上は、不善は即時に消滅するものとす、則ち人は不善なればとて、何の棄るとか之れ有らんや、只斯道を知らしむるのみ、故に古より天子を立て、三公を置きて、斯民に斯道を知らしむるを務めり、凡そ貴人の初めて相見するには、先づ進物を出して、然後駟馬を進めて相見ると古今の禮と爲すと雖も、這は表面的の事のみ、縦ひ貴重なる大壁を贈るも亦虚禮に過ぎず、故に駟馬に先ちて、貴重なる大壁を進むるよりは、寧ろ斯道を進むるの愈れるに如かるなり便ち斯道の金銀珠玉等より貴重なる幾百倍なるを知る可し、然るに今人は、斯道の貴ふべきを知らず、徒らに金銀珠玉等を貴ひ、爲めに身を保つと能はざるもの多し。

古之所以貴此道者、何也、不曰以求得、有罪以免耶、故爲天下貴。

古の人か、此道を貴ふ所以は、何の故なるか、富貴利達は求むるも、容易に得へからざれども、此道は求むれば、直に得へく、縦ひ罪あるも、此道に據るときは、其罪を免ると曰ふを以てなり、故に此道は、天下に

並ひなき貴きものと爲せり、求むれば直に得るとは、孟子の所謂操れば存するものにて、上文の「善人之寶」是れなり、罪あるも免るとは、罪あるも、此道に據て改むるときは、其罪消滅すとの意にて、上文の「不善人之所保」是れなり、

爲無爲章第六十三

爲無爲、事無事、味無味、大小多少、報怨以德。

凡そ人と智巧を戦はし、是非を争ひ、技能を競ふ等は、皆有爲の事なり、爲無爲は、其反對にて、水の下に流るゝか如く、物の自然に任かすを云ふ、凡そ功名を慕ひ、事業を企つる如きは、皆有爲の事なり、事無事は、其反對にて、我より進んで事を爲すと無く、物の來るに應じて之を爲すと云ふ、夫れ富貴利達は甚だ味の濃きものなり、道の味は、之に反し、其味の淡泊無味なるも、水の如く、米の如し、有道の君子は、爾き淡泊無味なるものを味ひ樂みて、富貴利達の如き濃味は好まざるなり、蓋し凡情に於て忘れ難きものは、怨みなり、甚しきは、身を棄て、家を亡はして怨を報ゆるものあり、我より怨を報ゆれば、彼れも亦之を報ゆ、互ひに報怨の心、止む時無く、畢生間その心に安んずると無かるへし、故に君子は、大怨小怨多怨少怨を問はず一切之を忘れ、反て怨に報ゆるに恩徳を以てせり、怨に報ゆるに徳を以てせば、徳ある者に報ゆるに何を以て之を報ひんとは、論語に於て孔子が或人の問に答へらるゝ辭なり、則ち孔老の説、正に相反するが如くなれども、禮記に孔子の辭なりとして、載せたる、語に曰く、「以德報怨、怨寬宥、身之仁也。以怨報怨、德刑戮之民也」と、此に由て之を觀れば、孔老の説、全く相反するにあらず、想ふに、孔子の説は、怨の大小多少に因て、區分するもの、如し、禮記に説く所の報怨は、小怨を指したるものならん、君父の讎の如き大怨は、共に天を戴かざる難なるを以て、之を寛假するの理なかる可し、此れ老子の説と異なる所なり、

圖難於其易、爲大於其細、天下難事、必作於易、天下大事、必作於細。

此六句は、第三句以下を先きに説きて、上の二句を、後に説かば、解し易し、凡天下の難事は、始めより難事にあらず、必ず易きとより作るものとす、天下の大事は、始めより大事にあらず、必ず細きとより作るも



のどす、故に君子は、難事の易き中に圖りて、難事に至らざらしむ、大事も細き中に工夫して、大事に至らざらしむ、征済の大役の如きも、李鴻章にして先見の明ありて、朝鮮談判の日に調理せしめは、連戦連敗の大辱を受くるとも無く、讓地償金の損害を受くるとも無かるへし、物皆斯の如し、養生上の事にても、病氣の起らざる前、即ち平素より飲食等を謹めば、虎的の大患に罹るとも無かるへし、借金にても、利子の少き中に拂へば、身代限に遇ふとも無かるへし、

是以聖人終不爲大故能成其大

不爲大の意味は二様に解すへし、其第一説は、聖人は終始自ら尊大に構へて、其大を爲し恃まず、凡ての事に扣目にするか故に、反て能く其大を成せりとの意なり、其第二説は、聖人は凡ての事を大事に爲し致すと無く、少事の中に處置し給ふか故に、能く大事を成就し給ふとの意なり、右二説の取捨は、讀者の意思に任かす、

夫輕諾必寡信多易必多難

凡へて人の依頼を輕易に承諾するものは、必ず信實寡くして、其事成らず、又事に當て、多く容易に心得て、之を重んぜざる者は、多く難事を引起して、爲めに困めらるものなり、此等の事は、各人事實に徴せば、其事の虚ならざるを知るへし、

是以聖人猶難之故終無難矣

輕諾多易は、信寡く難多きを以て、聖人は天授の才徳あるも、猶同事を易しとせずして、難しと爲し、甚た丁寧に注意せり、故に其結果は、終に易く成りて難きなし、深く戒めざる可けんや、凡そ人の事を誤るは、輕諾多易に在らざるは無し、

其安易持章第六十四

其安易持其未兆易謀其脆易泮其微易散爲之於未有治之於未亂

萬事危くなるに及んで、維持するは、寔に難きとされども、其安易時に於て、維持すれば維持し易し、疾病

國難等の已に生ぜし上は、之を謀り治むると、寔に難けれども、其未兆兆れざる時に於て、之を謀れば謀り易し、禍根等の堅く凝結するに及んては、泮け難けれども、其脆き時に於て泮けは泮け易し、弊竇等の已に顯はるゝに及んては、散し難けれども、其隱微なる時に於て、散するときは散し易し、凡そ禍は、未た有らざる時に早く之を處置し、國家も未だ亂れる時に早く治めは、終に禍亂を免るへし、之を要するに、本節の旨意は、前章の「圖難於其易」の意に外ならざるなり、

合抱之木生於毫末九層之臺起於累土千里之行始於足下

物皆な始めより大なるものはあらじ、必ず細微なるものより成れり、兩手を以て合はし抱く程の大木も、毫末微小の嫩芽より發生し、遂に合抱の大木となりぬ、九層の高臺も、一實の土を累ぬるより起りぬ、千里の遠路を行くも、足下の一步より始められり、凡そ天下の事、皆斯の如く小を積んで大に至るものなり

爲者敗之執者失之是以聖人無爲故無敗無執故無失

爲の字は、強く見る、大に心を用ひて爲すと成り、執は、固執の執にて、持守の堅執を云ふ、

世人は、禍を未だ來らざるに治めて、自然に任すを知らず、事の起るに及んて、種々に心を用ひ、智慧を施らし、強て彌縫を爲するか故に夫敗せり、或は又我意を貫かんとして、固く執拗して變せざるか爲め、自然に逆んで事を失へり、是を以て、聖人は、事の易き時に於て、自然に従て、早く之れか處置を爲し、智慧を頼み心を用ひて爲すと無か故に、失敗するを無し、又一方に凝り固まりて、自然の理に違ふて無さを以て、失策すると無し、

民之從事常於幾成而敗之慎終始則無敗事

俗民の事に從ふや、其事幾んど成るに垂んくとして、心に懈惰を生し、遂に事を敗るに至れり、故に終を慎むと始の如く、戦々競々として、終始一の如くなれば、決して事を敗るを無し、謂はゆる「官怠於官成、病加於少愈、禍生於懈惰」の格言も亦同一の旨意なり、

是以聖人欲不欲不貴難得之貨學不學復衆人之所過以輔萬物之自然而



不敢爲。

是を以て、聖人は、衆人の欲せざるもの即ち無欲を欲しぬ、又衆人の頗る貴重せるもの即ち容易に得難き寶貨を貴ばざりき、又世人の學はざるもの、即ち道を學ひぬ、又衆人の通り過ぎたる天性を本とに復せり、以上四個の學問を以て、萬物の自然を輔け、花さくもるものは花さき、實るものは實る如く、天性の自然を遂けしめて毫も私智を其間に環らすと無く、敢て作爲的の事を爲さざりき。

古之善爲道者非以明民將以愚之

古之善爲道者、非以明民、將以愚之。

愚とは、白癡頑妄の謂にあらず、狡黠邪智の反對、即ち質朴無欲の意を知るへし、論語の「其愚不可及」の愚、頗る之に近し。

古の善く道を爲す者は、人民の才智を明かならしむるを務めずて、反て人民をして朴直無欲ならしむるを欲せり、蓋し才智明かなるときは、巧詐に長して言論等を好むか爲めに國家を紊亂するに至り易すけれども、人民をして朴直無欲ならしむる時は、人々皆な分に安して、非望の企を爲すを無く、萬天時代の安樂世界に復すを得へしとの旨意なり、(秦の始皇が經書を燔きて黔首を愚にするは、始皇自己の欲心を達せんか爲めなり、故に人民を愚にすと云ふも、始皇の黔首を愚にすと云ふは、其意思大に異なり) 民之難治以其智多、以智治國、國之賊、不以智治國、國之福。

人民の治め難きは畢竟人民に猾智狡計の多きを以てなり、猾智狡計多きときは、魯、質朴淳素の美風を散するのみならず互に法網を潜りて巧詐を事とし、相欺きて、政化を紊亂するに至るは近史に徴して之を知へし乃ち治者たる者か、知術に托して國家を治むるときは、被治者たるものも亦智術を以て、之に應じ、上下交々猾智巧詐に長し、竟に國家を賊害するに至る故に善く國家を治むる者は、自然無爲の道に由りて純樸を旨とし、毫も智術を其間に用ひず、是を以て、上安く下泰にして、曾て風波を社會に生せず、斯の如きは、實に國家の幸福に非ずや。

知此兩者、楷式常知、楷式是謂玄德。

楷式は、原則若くは手本と云ふに同じ、楷は、模楷の楷にて、ノリと訓す、式も亦ノリと訓す、智術を用ひて、天下を治むれば、天下亂れ、智術を用ひずして、自然無爲の道に由り、天下を治むれば、天下治るとの兩者を知るは、亦老子學の原則なり、常に此原則を知るに於ては、虛無玄妙の道を悟得するを以て之を玄德とは謂ふなり。

玄德深矣、遠矣、與物反矣、然後至大順。

玄德は、深くして淺からず、遠くして近からざるものとす、夫れ吾の貴ふ所のものは玄德なり、外物の貴ふ所のものは狡智なり、玄德と狡智とは、固より相反す、猾智の順ふ所は小にして、玄德の順ふ所は大なり、故に之を大順と名く。

江海爲百谷王章第六十六

江海所以能爲百谷王者、以其善下之、故能爲百谷王。

江海の能く百谷の王たる所以のものは、其大を頼みて高きに居らすして、自ら卑きに居るを以てなり、故に百谷の水、晝夜滾々として、江海に流歸す、人も亦卑きに居りて、自く高ぶらざる時は、人民その謙徳に感して歸服するを必然なり。

是以聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之。

前節に説く如く謙虚の徳は、能く衆民を歸服せしむべきを以て、聖人は、民に上たらんと欲せば、必ず壓制的の驕言を發せず、自ら呼んで孤とか不穀とか言ふ如く卑下せり、又聖人は、民に先せんを欲せば、我が高位等の特みて、輿論公議に逆ふを無く、身を以て之れか後となりて、決して自らは天下の先導者とならず、言路を開きて、愚夫愚婦の言をも聞き、先つ人民をして事を唱へしめて、已れば、其言を用ひて、自然に人民の先と爲る主義なり。

余恒に言ふ、老子の學問は、意地の悪しき教にて、其謙遜は、眞の謙遜にあらず、一種の手段なりと、「欲



上民欲先民の欲の争を玩味せば、吾か恒言の虚ならざるを知る可し、  
是以聖人處上而不重、處前而不害、是以天下樂推而不厭、以其不爭故天  
下莫能與之爭。

重は、ハヤカルと訓す、又肩や頭の上より重荷を推し付ける意あり、害は邪魔にする意なり、  
凡そ上に在る者か威權を弄して、驕慢なるときは、人民之れを憚りて、邪魔視するは、人情の當然なり、然  
るに聖人能く謙遜するを以て、人民の上に處り、人民の前に處るも、人民は唯々聖人を憚り忌みざるのみ  
ならず、唯々聖人を邪魔視せざるのみならず、聖人を悦び樂みて、推し崇め、永久厭はざるなり、抑々聖人  
は、事の大小を問はず、人と争ふと無きか故に、天下の者、誰れ一人聖人に抗争するもの無く、人々戴きて  
心服せり、  
要するに本章は、謙徳の尊きを説きたるものなり、

天下皆謂章第六十七

天下皆謂我道大似不肖夫唯大故似不肖若肖久矣其細也。

肖は、似なり、

天下の愚人が老子の廣大にして通常一般の物に似ず、即ち迂愚に似たりと謂へるこそ道理なれ、我が老子の  
道は、形状の見るへき無く類然として名くるべき無く、萬物に充遍しなから、萬物に似たる所なし、此れ其  
大なる所以、乃ち其不肖に似たる所以なり、若し我が道にして通常の物に肖たるならば、亦細小なる一物た  
るや久し、何ぞ夫と爲すに足らんや、

夫我有三寶持而保之。一曰慈。二曰儉。三曰不敢爲天下先。

抑々我が老子の道に於て、三つの寶あり、此三寶は、必ず奉持して保尊せざる可からず、其第一は、人を慈  
愛するとなり、其第二は、萬事に着り着るを無く儉約收斂するとなり、其第三は、萬事に謙讓卑下して、敢  
て天下の先とならざるとなり、實に此三寶は老子學の大主眼なるを以て、先づ之を掲げ、下節に於て一々之

を詳説せり、

慈故能勇

慈仁なれば、怯にして、勇氣に乏しきか如く思はるれども、深く之を考ふれば、決して然らず、世人の謂は  
ゆる勇氣は、兎角中途にして折け、反て柔弱に流るゝもの多し、這は畢竟慈仁の徳に充分ならざるを以てな  
り、眞に慈仁の徳あるに於ては、必ず大勇あるものとす、試に禽獸の子を鞠育するを見よ、人わり其子を捕  
へんとするは、其親は人に向て怒れり、丹は其子を慈愛するの念深きを以て、斯く勇氣を發するに非ずや、  
物みな斯の如く、大勇は必ず慈仁に基因す、士卒の勇氣を發して強敵を犯すは、將校の慈に基く、人の老年  
に至り勇氣の衰へざるは、壯年の時より其躬を慈愛して、善く養生を加ふるに基くなり、故に韓非子も「子  
を愛するものは、子に慈あり、生を重んずるものは、身に慈あり、功を貴ぶものは、事に慈あり、慈母の弱子  
に於けるや、務めて其禍を致す、務めて其禍を除くを事とす、其禍を除くを事とすれば、  
則思慮熟す、思慮熟せば、則事理を得、事理を得れば、則必ず功を成す、必ず功を成せば、則ち其之を  
行ふや疑はず、疑はざる之を勇と謂ふ、聖人の萬事に於けるや、蓋く慈母か弱子の慮りを爲すか如し、故に必  
らず行はるの道を見る、必ず行はるの道を見るときは、則ち明かなり其事に従ふも亦疑はず、疑はざる之  
を勇と云ふ、疑はざるは慈より生ず」云々と云へり、

儉故能廣

儉は、必ずしも財物を節儉するのみを言ふにわらず、必上の收斂をも兼ねて説くべし、希逸は、専ら心上の  
みに就て説けども、偏するに似たり、人或は儉約を以て、拙陋狹隘の事の如く思へども、決して然らず、蓋  
し廣く物を施さんと欲せば、必ず多く貯蓄せざる可らず、多く貯蓄せんと欲せば、必ず平素儉約せざる可ら  
ず、是れ儉は廣く物を濟ふ所以なり、夫の海水の廣深なるも、一點水の儉約より成る、春日萬物を開發する  
は、冬日に於て、收斂閉藏の徳あるに因る、斯く儉徳は、無盡藏とも言ふ可き美寶なるに、世人は多く此理  
を知らず、一旦志を得るときは、奢侈を極め、金錢を糜費し、唯々人を濟ふと能はざるのみならず、竟に其  
身をも失ふに至れり、哀まざる可けんや、昔者楚子か晋の重耳を稱して其志廣大にして体儉なりと云へるは



蓋し其心に收斂節制する所ありて、天下の覇者となり得るの風采自ら外貌に顯はるゝを以てならん、  
不敵爲天下先故能成器長。

成器は、或形と云ふに同じ、即ち地上に於て形を爲せるものを云ふ、推して之を言は、萬物と云ふに異ならず、韓非子には、器の字を事の字に作れり、又能の字の下に、爲の字あり、

世人は、進銳を以て能と認め、人に後るゝを以て耻と爲して、進銳率先の害なるを知らず、獨り聖人は、卑下謙虛にして、敢て天下の率先者とならざるを以て天下より推尊せられて萬物の長となれり、前の「江海爲百谷王」の意と略々相同し、

今捨慈且勇捨儉且廣捨後且先死矣。

慈の徳は、勇を産生する母なるに、世人は慈を捨て、勇ならんと欲せり、儉は廣く施すの母なるに、世人は儉を捨て、廣ならんと欲せり、人に後るゝは、人の先たる所以なるに、世人は人の後たるを捨て、人の先たらんと欲せり、斯の如きは、身を全ふする能はずして、死せんのみ、

辭子由は、此處に「勇廣先、三者、人之所共疾也、爲乘所疾、故常近于死矣」と註せり、此説に據るときは、「今捨慈且勇捨儉且廣捨後且先死矣」の如く訓點を附する意なるへし、

夫慈以戰則勝以守則固天將救之以慈衛之  
今三寶中の第一位に在る慈の徳を、世人の好める戰の上に出で、之を述べん、將校たる者か父母の子に於けるが如く、平素士卒を慈愛するときは、一朝事起るに及んで、士卒たる者みな其恩に感し、身命を抛ちて戦ふか故に、敵に勝つと必然なり、(近くは征清の役に於て、其事の虚ならざるを證すへし)、倘し又魯西亞の如き大敵か幾百の軍艦、舳艦相卸んで、我國を攻め來るも、我か 天皇陛下は、慈心を以て、國民の心を得給ふを以て、國民の邦土を守るを金錢よりも固し、渠れは決して一步武の地をも攘奪する能はざるへし、蒙古の來襲は、其實例なり、) 斯く戰の一事を以ても、慈徳の功能の深きを見るへし、其他の事に於ても、皆然らざるは莫し、抑々天の福運を降して、我々を救ひ祐け給ふは、我れ傲頭徹尾慈徳を離れず、慈徳を以て斯躬を保衛すればなり、

茲には、三寶中慈徳のみを説きて、他の二徳を説かざるは、慈徳の中に包含するものとす、此れ孔子か仁の一字を説きたる中に、義禮智の三を包含すると一般なり、抑々孔子の仁を説き、釋迦の慈悲を説き、老子の慈を説く、各々其旨を異にすと雖も其行爲に於ては、甚だ相同し、

善爲士者不武善戰者不怒

善爲士者不武善戰者不怒

士は、法官と解する説もあれども、本章は、前章を承けて、兵の事に就て論するものなれば、將士の士と見る可とす、武は、強暴の意なり、

平素強暴にして、動もすれば憤怒する將校は、實戰の場合には、必ず怯にして逃走するものとす、清國の將校に於て、之を見るへし、古の善く兵を用ふる者は之に反し、内には批駟勇壯の氣象あるも、深く藏して外に顯はさず、大敵に遇ふに及んで、然後始めて其氣象を外發す、恰も鷲鳥の博擊せんとするときは、必ず先づ其翼を斂むるか如し、斯く眞の士たる者は、平日其眞武を外發せざるか故に、強暴の所爲あらざるなり、而して、聖人即ち善く戰ふ者の心は、道と均一なるを以て、無道の國を征討するに際しても、毫も憤怒の心あらず、凡て憤怒血氣の勇を恃んで戰ふ者は、中途にして其勇挫けて終りを成すこと能はず、故に袁紹も「兵忿者敗」と云へり、

善勝敵者不爭善用人者爲下

連戰連勝は、善の善なるものに非ず、戰はずして、人の兵を屈すること善の善なるものなれば、故に古の善く敵に勝つ者は、争はずして勝ちを制せり、徳川家康の三形原に於て、門を開き戰はざるか如きは、頗る之に似たり、凡そ庸俗の君は、不遜にして人に下るゝを知らざるか故に、人を用ふる能はず、善く人を用ふる者は、謙虛にして、能く人に下りて敬式するか故に、才氣ある者皆な其用となれり、孔明の蜀に於ける、仲の齊に於けるか如き、是れなり、公遜は、不遜なるを以て馬援を用ふる能はず、平の將門は、驕傲なるを以て唯々、倭藤太を用ふる能はざるのみならず、反て其爲めに滅せらる、



是謂不爭之德

德は得なり、

前節に説きたるか如く、人と争へば、損になり、人と争はされは、得になるもの故也、是れを名けて不爭の得とは謂へり、獨り戰爭のみならず、凡て世の事は争はざるを以て利得とす、故に先師敬字翁は、語を論語に取て、其別號を無所争齊と名けり、

是謂用人之力

前節に説きたるか如く、謙讓して、人を厚待するときは、才氣ある者、皆な我が爲めに力を盡して、我を祐くるか故に、是れを名けて人の力を用ふとは謂ふなり、

是謂配天古之極

意蘊は、古の字を衍文と爲し「天之極」と讀むと説けども、余を以て之を觀れば、古の衍文と爲さざるも、解し得べきが如し、蓋し古之極とは、古人の遵守する極點と云ふに同じ、仍は今の辭を以て言へば、古之主義とか古之標準とか云ふに異ならず故に極は皇極人極の極にて、メドと訓ず、

天は高きに位するも、其氣は下りて萬物を化成す、古人の卑下謙讓するは、天氣の下降する道と同一に配合するを以て、是れを天に配すとは謂ふなり、右に論ずる如く、不爭謙讓は古人の遵守する極點即ち標準なり、

用兵有言章第六十九

用兵有言吾不敢爲主而爲客不敢進寸而退尺

主は、兵の主人にて、好んで自ら兵端を開く意なり、客は敵より戦端を開らさ我れ之に應ずると云ふ、謂はゆる應兵是れなり、

此處の趣旨を誤解するときは、今の清兵の如き憶病もの、口實となれり、故に先づ其趣旨を知らざる可らず、蓋し此處の趣意は敵に對し軍に臨むもの、心得を云ふにわらず、本營の參謀官たる者の心得を云ふなり古の兵を用ふる者、即ち兵法家の言へるとあり、其言に曰く、我の外國に於ける、我より進んで兵の主人と

なりて戦端を開かず、彼より兵を興さば、我は已むを得ず、之に應じて其客と爲るのみ、(這回の征清の如きも、朝鮮に於て彼れより先づ兵端を以て、我は之を應ずるなり)而して參謀官が兵の進軍を命ずるには、一寸と雖も輕卒に之を爲す可らず、日軍の容易に奉天府北京に進まざる如き是れなり、退軍を命ずるには、一寸の十倍、即ち一尺を退却するも、亦事に害なしと、我邦の金州地方を棄て、顧みざるは頗る之に類す、孫子も云へる如く、兵は國の大事、死生の地、存亡の道なれば、苟も慈心ある者即ち人を殺すを嗜まざる者は、自ら好んで兵を動かさざるものとす、故に兵法家の語を借り來りて、以て不爭の徳を述へり、

是謂行無行攘無臂仍無敵執無兵

仍は、就くなり、

進戰するものは、其行陣を整へて行き、臂を攘げ、兵を執て前進し、以て敵に仍くを、軍隊の常とす、然るに今兵の主とならずして、應兵するのみ、毫も自ら好んで争ふの意なし、則ち身は行陣の間に在るも、心は行陣の間に在らざるが如し、身は臂を攘げて前進するも、心は其臂なきが如し、身は敵の前に仍るも、心は眼前に敵なきが如し、手には兵器を執るも、心には兵器なきが如し、故に行くも行なく、攘ぐるも臂なく、仍るも、敵なく、執るも兵なしと云ふなり、

禍莫大乎輕敵輕敵幾喪吾寶

吾寶は、前章に説く三寶中の慈を指す、

敵を侮り輕んじて驕進するときは、必ず大敗を取るものとす、故に禍は敵を侮り輕んずるより大なるは莫し、敵を侮り輕んじて大敗を取るときは、數多の人を殺すを以て、三寶中の主たる慈道を失ふに至るへし、故に抗兵相加哀者勝矣

哀は、アハレムと訓す、慈心より生ずるものなり、

兩敵互に兵を抗し、人數を相加へて交戦するときは、其大將たるものが、慈心ありて人を殺すを嗜まず、甚た其死を哀むに於ては、必ず大勝利を得るものとす、何んとなれば、兵士たるものか、皆なく其恩に感動し、身命を顧みさればなり、乃ち征清の役に於て大勝利を得たるは、大元帥陛下の慈心深き効果と知るへ



し、

吾言甚易知章第七十

吾言甚易知甚易行天下莫能知莫能行

人々の起居飲食等は、皆本性の外に發露したる妙用なり、猶ち吾か言語も亦本性の口に見はれたるものなれば、本來甚だ知り易く、甚だ行ひ易きものなるに、天下の人は、欲心に掩はれ、榮利に迷ふか故に、之を知り、之を行ふを能はず、

言有宗事有君夫唯無知是以不我知

宗は一族の本なり、君は一國の本なり、故に宗も君も、猶ほ本と云ふか如し、即ち根本の道あるを云ふなり、吾か言語は、道の支族にて、必ず其宗あり、其宗とは、無爲自然の道なり、吾か爲す所の事は、道の臣下に於て、必ず其君あり、其君とは、無爲自然より醸出せる慈儉なる三寶なり、天下の人は、夫れ唯も吾か言行の此宗此君より出るとを知らざるか故に、吾か言行を怪みて我れを知るを能はず、

知我者希則我貴

然れども、小兒は大人の事を知らず、凡夫は聖人の言行を辨せず、我か道は宏大無比なるを以て、我を知る者の希れるは、乃ち我の貴き所以なり、

是以聖人被褐懷玉

褐は、布麻を以て織りたるものにて、賤者の服なり、被褐は、外部を修飾せざるを云ふ、懷玉は、内部に美德を具ふるを云ふ、中庸の「衣錦尚絺」の意と甚だ相近し、聖人は、俗人に知れざるを、却て貴しと爲すか故に、世に知らるゝとを求めず、世人と同じく住みて、同じ業務を爲し、或は小吏と爲り、或は農夫と爲り、或は商人と爲り、或は村夫子となり、曾て赫然著明の行爲を爲さず、然れども、心の中には、千歳不滅の美玉を懷けり、亦和光同塵の旨意なり、被褐懷玉の語は、當時の俚語と云ふ説あり、果して然るや否やを知らず、

老

知不知章第七十一

知不知上不知知病

道分道を知りながら之を顯はさずして、知らざるが如くする者は、上等の人物なり、之に反し、其實道を知らざるに、外面を飾りて、道を知りたるが如く装ひを爲すは、人の病なり蓋し俗眼より眞知の人を見れば、不知暗愚なるが如くにして、其政悶々たり、是れ其民の淳々たる所以なり、道を知らざる人は、其政察々たるが故に知るに似たれども、早晚必ず大患を惹起す、是れ其民の缺々たる所以なり、

夫唯病病是以不病

聖人は、道を知りたるが如く装ひを爲すの病たるを病めるを以て、病に罹るとなし、即ち事を自然に任じて、私智を用ひざるが故に、國家無爲にして、國患興らざるなり、

聖人不病以其病病是以不病

此處は、前節と一正一反の文章なり、聖人の病に罹らざるは、道を知りたるが如く装ひを爲すの病たるを病めるを以てなり、是を以て終始病に罹らざるなり、即ち國家に大患を起すの原因は私智を用ふるに在るを知りて、無爲自然の道に一任せらるゝが故に、國家に大患なしとの旨意に外ならず、

民不畏威章第七十二

民不畏威大威至矣

威は、法律刑罰等の畏るべきものを云ふ、猶ほ壓制と云ふが如し、大威は、治者の威光を云ふ、英語のaweの意なり、

天下の人民が、刑罰壓制の畏るべきを知らず、自ら織りて衣、自ら耕して食ひ、些も政府保護の下に立つとに氣付かざる有様なるは、當時治者の威光、大に至り行はれたる效驗なり、然るに末世の政府は即ち然らず、漫に法律を以て、人民を壓制せんと欲せり、故に唯、政府の威光の行はれざるのみならず、法網を潜りて、巧

老

子



欺を謀り、甚しきは、政府を顛覆せんと企つる者あるに至れり、本節には、古來種々の説あれども、皆取るに足らざるなり、

無狹其所居無厭其所生夫唯不厭是以不厭

大威の至り行はれたる治者は、人民の居る所の位置を狭めて、束縛壓制すると無く、充分の自由を與へり、然れども、人民か生る所の家の業務を厭ひて、轉業するか如く保護せざるにわらず、無爲自然的に之を保護して、所生の業務を厭ふを無らしむ、夫れ唯、人民か其業務を厭はず、其生活を樂むを以て、其治者は人民に厭ひ嫌はるを無く其終を全ふせり、

是以聖人自知不自見自愛不自貴故去彼取此

右に説きたる理由なるを以て、聖人は自ら天下を治むるの道を知れども、悶々の政を爲して、自ら之を外に見はさず、又聖人は天下の人民に厭はるゝを無くして、我別を愛するを知らず、己れか位置の貴さを示して、人に驕らず、故に彼の法律等に一任して、天下を統治するの主義を去り捨て、謙遜以て無爲自然の道を守り、人民に厭はれざるとの主義を取れり、

勇於敢章第七十三

勇於敢則殺勇於不敢則活

敢は、我慢強く剛情張るとなり、勇敢を倒句として、「敢於勇」の意に見るも亦通す、凡そ人の事を爲す、善不善を顧みず、一旦爲し掛けたる事は、必ず爲し遂ぐる事に暴虎馮河なるときは、人に妨害を與ふるを以て、竟には人に殺さるゝに至るべし、之に反し、凡て事を處するに、毫厘にても無理に取てせざるに勇氣あるときは、終身禍に罹るを無く、安穩に其身を活き保つを得へし、

此兩者或利或害天之所惡孰知其故是以聖人猶難之

敢に勇なれば、人に殺され、不敢に勇なれば、安穩に生活を得る道理なれども、之を實際に徴すれば、必ず

しも然らず、此兩者の結果に於て、或は敢者にして安穩に生活するの利を得、或は不敢者にして、人に殺さるゝの害に遭ふものありて、道理通りに行はれざるを見れば、天の惡む所、果して何れに在るか、孰れか其故を知るを得んや、實に善惡報酬の恢々として疎なるを以て、聖人すら猶ほ之を知るを難めるに似たり、(此疑訝は、後節に至て自ら明晰なるべし)

古來よりの解釋は、右の如く解かず、古來より人の多く解釋する所の説は、左の如し、

此兩者の一は、退くに勇み、一は進むに勇めは、兩者とも勇なきにわらず、但人命を輕ろんじ、白刃を踏むものは、其身を害し、事に臨みて懼れ、濫進せざるものは、其身を全ふするの利あり、蓋し天道は盈つるを惡みて、能く謙するものを好めるを以て、戰に勇み人を殺すを嗜むものは、天の惡む所なり、然れども、世人は此理を知らず、一時の僥倖を希ひ、冒險過激の行を爲しぬ、是れ天道に背きて、殺害を免れざる所になり、獨り聖人は此理に明かなるを以て、勇氣に任せて事を爲すを難かれり、後説反へて老子の主義には、的中するか如くなれども、文章上より解釋するときは必ず前説の如くならざる可らずと信す、

天之道不爭而善勝不言而善應不召而自來繾然而善謀

繾は音タン、舒緩の意なり、

天の勝つは、人の腕力兵力等を以て、一旦の機を争ふて勝つか如きものに非ず、物と一時に争はずして、結局に於て善く勝てり(茲に天と云ふは、理と云ふに同じ、人と云ふは欲と云ふに同じ)蓋し人の勢強くして天の道行はれざる時には、天は人の勢に任せて、強て争はざる故を、善人に一時の禍を降し、惡人に一時の福を與ふて、吉凶禍福の應報、顛來するをあるも、人即ち欲の勢は、永く續くものにわらず、必ず衰ふるものとす、其衰ふるに及んで、天の道大に行はれ、善人に眞の福を降し、惡人に眞の禍を降せり、諸れを人の流水を防止するに譬ふるに、人あり流水中に立ち、一時板等を以て水の流るゝを防ぎ止め得るも、三日も四日も流水中に居り得るものにわらず、必ず根柢盡きて、之を廢す、其之れを廢するに及んで、水は本性に復



して、下に流るゝものぞ、是れ不<sup>レ</sup>争<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>善勝<sup>ス</sup>の意なり、謂はゆる「人衆勝<sup>レ</sup>天<sup>ニ</sup>。天定勝<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>」も亦此意に外ならず、天は、言はず、語らず人の如く言語を以て應ずるものに非ず、善を爲せば、福を以て應し、惡を爲せば、禍を以て應せり、故に不<sup>レ</sup>言<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>善應<sup>ス</sup>と云へり、謂はゆる「出<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>爾<sup>ニ</sup>者反<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>爾<sup>ニ</sup>」とは、是を言ふなり、天は人の如く召して始めて來るものにあらず、我より召さざれども、善惡應報の理は近く自ら我か前後左右に來りて、人の善惡を照覽するを明々白々たり、故に不<sup>レ</sup>召<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>自來<sup>ト</sup>と云へり、詩經の謂はゆる「昊天曰昭<sup>ニ</sup>。與<sup>レ</sup>汝出<sup>レ</sup>往<sup>ニ</sup>。昊天曰明<sup>ニ</sup>。與<sup>レ</sup>汝遊<sup>レ</sup>衍<sup>ニ</sup>」とは、是を謂ふなり、天は、人の如く迫切なるものにあらず、前年の冬に種を蒔きて、翌年の夏に至て實のるか如く、其父善を爲して、其子に至て、福を受くるか如く、甚だ釋然として舒緩なるものなり、其應報は、種々様々にて、人の口を假りて述ふるもあり、人の手を假りて之を爲すもあり、其巧みに謀ると、人智の能く謀り得る所にあらず、故に釋<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>善謀<sup>ト</sup>と云へり、

天網恢恢疎而不失。

恢恢は廣大の貌、失を一本には漏に作れり

天の網は、實に廣大にして、網の目疎く善惡の報酬に漏るゝものあるか如くなれども、竟に一人の漏るゝもの無く、善を爲せば、必ず善の報あり、惡を爲せば、必ず惡の報あり、疎なるか如く見ゆれども決して失はざるものとす、

天網の一曲のみを見て、其全體終局を視ざる時は、善にして禍を得、惡にして福を得るものあり、故に天網の疎にして多く失はるを疑ふに至れり、惟、能く其終始に就て、其變化を盡くし窮めて、然後天網の恢恢として疎なるも、決して應報を失はざるを知るへし、法律に期滿免除と云へるものあり、期滿免除とは、刑法規定の期限を經過するに因り、公訴若くは執行權の消滅するを云ふ、例へば死刑の言渡を受けたる者、逃亡して其身を藏くし、三十年間を經過するときは、死刑の執行を免るが如き、是なり廣き世の中には、刑の執行若くは公訴を免れたる者なきにあらず、左れば疎而不失とは言ふ可らざるか如くなれども、期滿免除を得たる者の言を聞くに、多年間其身を藏す爲め、一日

として安き心なく、其苦悶は寧ろ刑を受くるに若かずと思惟せりと云ひしとぞ、加之縱令其身は、期滿免除を得るとあるも、其子孫の繁榮するとなきは亦天理なり、

民不畏死章第七十四

民不畏死奈何以死懼之。

凡そ性命あるもの、生を欲し死を惡むは、天性の然らしむる所なり、即ち誰れか畏れざらんや、然れども政苛く刑重くして、人民手足を措く所なく、衣食を求むる方法なきときは、人民の心に於て、坐して死を待つよりは、寧ろ法律を犯して法に死するに如かずと思惟し、毫も死を畏れざるに至るへし、人民既に死を畏れざるに至るときは、奈何ぞ死刑を以て、之を懼すを得ん、貴重なる死も、人民の覺悟する所なれば、其懼れざるこそ道理なれ、死は、人の畏るゝ所なればこそ、人君に生殺與奪の權を執て、人民を制御し得れど、斯る氣風に至るときは法律も亦無用の長物のみ、

若使民常畏死而爲奇者吾得執而殺之孰敢。

爲<sup>レ</sup>奇者は、奇僻詭異の行ひを爲す者を云ふ、

人民をして死を畏れざらしむるに至るときは、法律も亦用ふ所なれども、若し人民をして寛政に安んじ、生を樂みて、死を畏れしめ、然後奇僻詭異の行ひを爲す姦惡者を執へて、之を誅せば人民皆相戒めて、孰れか敢て惡を爲すものあらんや、

常有司殺者殺。

司<sup>レ</sup>殺者は、上帝なり、即ち天網なり、

世の治るに方りて、奇僻詭異の行ひを爲して、社會を害する者は、上帝の棄る所なり、上帝の棄る所の者は、必ず之を殺して以て社會の害を去らざる可らず、故に我の之を殺すは、我の意思を以て、擅に之を殺すにあらず、上帝自ら手を下して、之を殺すに同じ、是を以て殺を司る有りて殺すと云へり、



夫代司殺者殺是謂代天匠劉夫代天匠劉者希有不傷手矣

今夫れ上帝の命する所にあらずして、已れ擅に法律の力に一任して、司殺者に代て、人を刑殺するは恰も素人か大匠に代て木材を劉るが如し、夫れ素人か大匠に代て、木材を劉らば、其手を傷かざる有ると希れなり、蓋し聖人か奇僻詭異の姦民を殺すは、毫も人爲を用ひずして、上帝の意即ち自然に従ふものとす、大匠の木材を劉るも、亦木理の自然に順ふか故に、逆目を生ずる等の事あらず、然るに今自然に従はずして、法律の力に依て、人を殺すときは、唯、良民を傷つるのみならず、躬自らも其法律に罹りて、其手を傷つくとあるに至るなり、

民之饑章第七十五

民之饑以其上食稅之多是以饑

人民は、自ら食して食ひ、自ら織て衣て、他の干渉侵奪等を受くると無ければ、本来饑ると無き道理なり、然るに、人民の饑餓困窮に陥るは、人君たる者か、賦稅を取るを多ふして、已れか逸樂の用に供すればこそ人民饑餓に逼るなれ、人民饑餓窮乏之餘、野に餓學あるに至るときは、唯、互に法網を犯すのみならず人を相戦ふて、遂には其國を亡はすに至るへし、唐の太宗か「民の物を取るは、已れか股を食ふか如し、一旦腹は充つれども、身は亡ふ」と云へるは、蓋し此を謂ふなり、

民之難治以其上之有爲是以難治

人民の邪智に長し、巧詐を事とし、天下紛々擾々として治まらざるは、人君たるものか、無爲自然の道に遵はず、法律智術を以て、天下を強制するを以てなり、斯く人君か強制的法律の權譎に由て、天下を統治せんと欲すればこそ、人民も亦狡猾欺偽を以て、之に應るなれ、是を以て、天下治め難し、

民之輕死以其求生之厚是以輕死

人民か貴重なる生命を重んぜず、愚癡を起して死を輕んずるは、人君たる者か已れの生を厚ふるか爲めに、

下民を憐むの心なく、重く聚斂するを以てなり、人民は重斂窮乏之餘、生を保ち饑を凌かんか爲めに、巧詐欺偽を事とし死を輕んし、同類相殺するに至れり、

夫唯無以生爲者是賢于貴生

人君か自ら生を厚ふするは、一時の快樂を買ふのみにて、其實甚だ愚なるものなり、人君若し無爲自然の道に安して、自ら奉ずる爲めに重斂するを無きときは、人民も亦生に安んじて、巧詐欺偽の行を爲すを無きを以て、天下安穩なり、即ち人君自己の爲めに、生を養ふとを爲すと無きは、生を養ふとに汲々せるに賢れり、

人之生章第七十六

人之生也柔弱其死也堅強

世人は強きを以て、非常に好きもの、如く思惟すれども、我道は決して強きものにあらず、極めて柔弱なり、試に近く我身體に就て之を見よ、人の生けるときは、其屈伸等自由自在なるは、其能く柔弱なるを以てに非ずや、之に反して、死するときは、身體甚だ堅く甚だ強くして、之を伸さんと欲するも伸びず、之を曲げんと欲するも曲らず、亦以て強の柔に及ばざるを知るべし、

萬物草木之生也柔脆其死也枯槁故堅強者死之徒柔弱者生之徒

又人間以外の萬物、及び草木を見るも、其生ける間は、柔脆にして、其死するときは枯れて堅強なり、殊に柳の枝に雪折れなしと云ふは、生氣柔軟にして、些も抵抗する所なきに因る、然れども、柳も枯槁して柔軟なる生氣を失ふに及んでは、降雪を待たず、少しの風にても寸折すべし、右の道理なるを以て、凡そ堅強的行爲を爲すは、死の徒爲に入りて己れの生命を棄つるものと謂ふべし、之に反し、凡そ柔弱的的行爲を爲すは、己れの生命を保つ、徒爲に入りたるものと謂ふべし、



是以兵強則不勝。木強則共。強大處下。柔弱處上。

共は、拱なり、兩手を以て抱へる如く大きくなるを云ふ。

兵強ければ、勝つこそ、道理なれ、兵強ければ、勝たすとは、背理の如くなれども、深く之を考ふれば、決して然らず、此勝敗は、苟且直接の勝負を言ふにあらす、結局最後の勝負を云ふなり、試に古今の史乘に就て見よ、就中西楚の項羽は、七十餘戰一回も負けされども、結局に於て、漢の高祖の爲めに、全滅さるゝに至りたるは、畢竟項羽が其強さを恃めるを以てに非ずや、又樹木の如きも、兩手を以て抱へる程に強大なるも、枝葉の下に處らざるを得ず、之に反し、鑽々たる枝葉は、強大なる根幹の上流に位を占むるは、其能く柔弱なるを以てなり、物皆な斯の如く、柔弱なれば、以て強大なるものを制すへし、

天之道章第七十七

天之道其猶張弓乎。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。

此處は、天の道を弓を張るに喩ふるが故に、弓の事を知らざる者に於ては、之れか解釋に苦しむへし、余が父は、弓術の師範家なるを以て、余も亦弓の事には疎遠ならず、夫れ弓を張る者は、張りの高さものは、之を抑へて下し、張りの下きものは、之を舉げて高くし、力の餘りある處は、踏て之を損し、力の足らざる處は、引揚げて之を補ふ、(踏むの、引揚るの)云ふは、弓術家の辭なり、天の道も亦斯の如く、高さものは抑へり、謂はゆる、滿は損を招く、是れなり、下たれるものは舉げり、謂はゆる、謙は益を受くる是なり、餘り有るものは、損せり、月盈つれば缺くるか如し、足らざるものは補へり、初月の漸く滿つるか如し、

天之道損有餘而補不足。人之道則不然。損不足以奉有餘。

天の道も弓を張るか如く、餘りあるものは損して、足らざるものは補へり、有道の士は、天の道に依違せしか、世人の道とせる所は、之と全く相反し、君主は不足なる貧民の物を取り上げて、餘裕ある自己の身に奉せり、

孰能損有餘以奉天下。唯，有道者。

天下人民の困窮をも顧みず、苛税を課して、自己の逸樂に供するは、堂々天下皆自然か中に就て、孰れか能く倉庫有餘の財を損して、天下の窮民を奉養するものぞ、唯、有道の士のみ之れを克くせり、

是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢。

是を以て聖人即ち有道の士は、人民の爲めに百方盡力して爲すとあるも、之を恃みて人に驕らず、其爲す所の功成るも、自ら其功に處らすして、功なきか如くす、斯く謙遜して我が賢徳を外に見はずとを欲せざるなり、

天下柔弱章第七十八

天下柔弱莫過於水。而攻堅強者莫之能勝。其莫以易之。

易は、代の意にて、カフルと訓す、即ち變易の易にて、簡易の易にあらす、

此處は、柔道の貴さを水に喩ふるなり、夫れ天下に柔弱なるものは、數多あれども、水ほど柔弱なるものあらじ、然れども、堅強なるものを攻むる水に勝るもの莫し、他に水に易ふ可きもの無く、必ず水に限れり、試に見よ、水は圓き物に入るれば、圓くなり、方なる物に入るれば、方なる程に柔弱極むれども、點滴の水、以て堅石を窪むへし、堅木も水に浸せば、容易に之を切るへし、堅固なる堤防鐵橋も、水の爲めには破壊せらる、水且つ然り、況や人の柔道に據る、以て天下を制すへし、

弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。

水の能く堅物に勝つ如く、弱の能く強に勝ち、柔の能く剛に勝つとは、天下の人、必しも之を知らざるに非ず、即ち謙遜扣目にすれば、天下萬般の事に勝ち得るとを心得ざるにあらす、然れど實際之れを行ふもの莫かりき、

是以聖人云。受國之垢。是謂社稷。主受國不祥。是謂天下王。正言若反。

垢は、汚穢なり、ハチと訓す、耻辱と云ふに同し、不祥は、不吉即ち殃を云ふ、



是を以て、聖人の言に云ふ、善く柔道を守る者は、克く耻辱を忍び、耐へ難きを堪へるが故に、克く社稷即ち國家の主となれり。(文王の幽里に囚はれ、大王の鷹鷲に於けるか如きは、垢を受けて社稷の主たる著例なり)又一時國の不祥即ち殃を被むれども、之を甘受して肯て逆はされは、竟に天下の王たるへし。(徳川家康の今川に於ける、越王句踐の呉に事ふる如き、是れなり)凡て事は、一時の不祥を忍ぶときは、終には禍を轉して福を受へざるなれども、世人は諷に一時の勝を悦び、一旦の負けを非常の耻と爲し、羞を包み、耻を恐ふの利あるを知らず、羞を包み、耻を恐ひて、柔弱を守ると云ふ議論は、本來正言なれども、世人の目より視るときは、正理に反する如く見るものなり、(正言若反は、「明而若昧、進而若退、直而若屈、巧而若拙」等の語と同じ論法なり、蓋し昧さか如くなるは、明なる所以なり、退くか如くなるは、進む所以なり、屈するか如くなるは、直なる所以なり、拙なるか如くなるは、巧みなる所以なり、反するか如くなるは、正しき所以なりと知るへし、)

和大怨章第七十九

和大怨必有餘怨。安可以爲善。

睡や小便にて消へた位の小火には、餘熱なれども、大火に至ては然らず、水を注ぎて消したる後も、火氣残りて餘熱の存するあり、人の怨も亦然り、大怨に至ては、假ひ一旦和解條約を結ひて、表面上革面すと雖も、心の底には解けずして、必ず餘怨の存するあり、斯の如きは、安が以て善と爲す可けんや、故に聖人は、初より公平無我にして、人と怨みを結はざるに注意せり、則ち此語を以て、下文を惹起す、

是以聖人執左契而不責于人。

左契は、後世の證書の如きものなり、契は、木を刻みて作製し、之を中分して二と爲し、債權者と債務者と各、其一を取り争ひの起りたるを、之を契合して、以て信を表するものなり、其右契は、金を貸したる者、即ち債權者之れを所持し、其左契は、金を借りたる者、即ち債務者之れを所持す、禮記の謂はゆる「左契爲受責者之所執證」是れなり、

有德司契。無德司徹。

徹は、通なり、此字の原因は、井田の法より來るものとす、古者井田に助法てふものあり、周に及んで、助法を改めて、徹法と爲しぬ、徹法とは、八家私田の收むる所均しからざるを恐れ、八家互に力を通して合作し、均しく之を收めしめ、八家の得る所、均平にして多寡の異なからしむるを云ふ、故に、徹は、力を通して均一にするの意あり、

此處の意味は、頗る解し難し、多少の辯を費さるへからず、蓋し聖人が債務者の位地に立ちて、左契を司るとき、右契を執れる債權者か來りて、契合することあるも、毫も之れと曲直を争ふの心なし、有德者の無我無心にして、自然に任せると左契を司れる時の心に同じ、故に有德司契と云へり、徹法を司る者は、通力合作の均しからざるありて、弱家の得る所、寡からんとを慮へり、怨みを和する者、即ち寡徳の者が、不平均なるとあるよりして、善人の害を受くるを恐る、有徳は、頗る徹法を司る者に似たるあり、故に無德司徹と云へり、但有徳者は、物を待つに心なし、無徳者は、物を待つに心あり、則ち有心無心の差を論じたるものと知るべし、

天道無親。常與善人。

天道は、公平にして一毫の私なきが故に、此れを親しみ、彼れを惡むと云ふを無し、常に善人即ち有徳者を親愛せり、乃ち忍耐強くして、柔弱なる人は、唯、人の怨み少なきのみならず、天道も亦與みし助けり、

小國寡民章第八十

小國寡民。使有什伯人之器而不用。

什は、十と同じ、伯は、百と同じ、



本章は老子衰周の世に生れ、文飾繁雜の弊に堪へざるを見て、清淨無爲の教を以て、之を救正せんと欲するの餘本書の終に於て、其志す所を述へ、小國寡民を得て、以て、無爲主義を試験せんと願へるなり、小國寡民中に於て、十人百人の長たる材器ある者も、各、其分に安して、世に用ひらることを求むの志なからしめん、

使民重死而不遠徙。

利欲の爲めに、冒險の事業を企て、死をも厭はず、遠く山海を越へて、他國に移住するは、衰世の有様なり、故に人民をして死を厭ひ生を樂み、本國を棄て、遠く他國に徙るを莫らしめん、

雖有舟輿無所乘之。雖有甲兵無所陳之。使人復結繩而用之。

結繩は、易にも見ゆる如く、上古文字なき時、繩を結びて、記録の用を爲し、ものなり、舟車の設けあるも、冒險の事業を企てずして、之に乗るの必要なからしめん、甲兵軍隊の設けあるも、吞噬の欲望を去りて、之を陳ね用ふるの必用なからしめん、總て人民をして、文飾禮儀の弊風を除去し、上古結繩を用ひし時の朴風に反らしめん、

甘其食。美其服。安其居。樂其俗。

人民皆な淳朴の風を守り、其分に安んじて、外を顧ふの心なからしめ、其食ふ所の麥飯を甘しとし、其服する所の手織り木綿を美服とし、其居る所の茅屋を安室とし、爾ら淳朴なる風俗を樂みとして、巧詐欺偽の弊を去らしめん、

隣國相望。雞狗之聲相聞。民至老死不相往來。

隣國相望みて、人民の住家甚だ近く、雞狗の聲相聞ゆる程に、土壤相接近すれども、人々各、其分に安んじ老死するに至るまで、他國に往來して利を射るの心なからしめん、蓋し當時の人民は、本國に安んぜず、他國に移住して、冒険射利を事とするの弊風、漸く行はれ、太古淳朴無爲の氣風、全く除去するを以て、斯く云へるなり、

信言不美。美言不信。

信言不美。美言不信。

眞實の言は、有りの儘にて、些も虚飾なき故に、美麗ならず、莊子か「眞言隠於榮華」と云ひしも、此意に外ならず美麗榮華なる言は、之に反して、毫も信實あらざるなり、

善者不辯。辯者不善。

一毫の不善なき純善なる者の言は、無用の辨論を待たずして其善の正味、自ら外に顯はるゝを以て、取て辨説を用ひず、喋々流るゝか如く常に辨説する者は、内に善なければこそ、外を粧ふて喋々するなれ、夫の演説遣ひ、及び三百代言の辨論を見て、之を證すへし、

知者不博。博者不知。

眞に道を知る者は、無用不急の事に難博ならず、無用不急の事まで、博く知る者は、兎角心の外馳し易きを以て、根本の道義に至ては、必しも知らざるなり、

陸象山王陽明の學派か、朱子の學問を支離と誹るは、博者不知の主意より出てたる如くなれども、朱子の學問は、決して支離にあらず、又博者不知ものにあらず、其委纏を知らんと欲せば、余か著述朱學提要に就て見るへし、

聖人不積。既以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。

聖人は、無我無欲なるを以て、自己の爲めに、財物を蓄積せず、盡く人民の爲めに之を用ふるか故に、己れ反て愈、財物あるに同じ、盡く財物を人民に與ふるか故に、己れ反て愈、多くの財物を有すると同じ、這は、

國豊なるは、即ち君の豊なりと云ふ意なり、唐の陸贄か「散小儲成大儲」と云へるも此意に髣髴たり、盡く財物を人民に與ふるは、即ち「散小儲」なり、是に由て天下大に富むは、即ち「成大儲」なり、

天之道。利而不害。聖人之道。爲而不爭。



老

利は害の反對にて、此に利あれば、彼れに害あるは、世俗の常なれども、天の道は利ありて害あらず、秋冬に草木凋落するは、天の殺氣を施して、害するにあらず、新葉を生ずるか爲めに、舊葉を去るのみ、即ち利せざるを以て、之を利するなり、即ち天地生物の心なれば、徹頭徹尾害あらずと謂ふ可し、凡そ事を爲すは争ひの端にして、爲すとあれば、争ひを生し易し、然るに、聖人の道は、爲すと雖も、争ひの起ると無し、争ひは爲さざるを以て、之を爲すか故に、争ひの起ると無き所以なり、

此處は、老子全部の主旨を括言したるものにて、殊に結末に不爭の二字を置さしは、其旨最深し、察せざる可けんや、余恒に言ふ、宋儒の説は、多くは莊子に基くと、朱子の所謂一旦割然は、莊子の大覺に基く、程子の所謂冲漠無朕は莊子の語なり、其他明鏡止水、虛靜無欲、復性復初大極無極等の語は、皆な莊子より出るものなり、而して莊子の學問は、老子より出づ、故に老子を研究するは、即ち朱學の根原を脩むるなり、

子

老子講義終

大野雲潭先生著

讀書操觚之鍵

定價未定  
郵税未定

右ハ悉皆賣レ餘册ナキヲ以テ改  
正増補ノ上不日再版ス

大野雲潭先生著

近史偶論

定價十四錢  
郵税貳錢

郵券ヲ代用スルモ敢テ割  
増ヲ請ハス

老子正釋

定價五十錢

郵税四錢

明治三十一年十月十五日印刷  
明治三十一年十一月十日發行

著述者 大野 太衛

東京市小石川區小日向第六天町十八番地

發行所兼印刷者 大野 光

東京市小石川區小日向第六天町十八番地

印刷所 熊田活版所

東京市神田區錦町三丁目二十五番地

發行所兼發賣所 同人學舍

東京市小石川區小日向第六天町十八番地

75  
95



75  
95



